

令和7年度
学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業

成果報告書

(都道府県教育委員会における研修に関する調査研究)

2026年3月31日



Build Beyond As One.

1. 事業概要	p.2
1.1. 本事業の背景・目的	3
1.2. 本事業の全体像	5
1.3. 有識者会議の開催	6
2. 実証研究の方法	p.7
2.1. 研修の改善プロセスの全体像	8
2.2. 研修の企画・立案	9
2.3. 研修の評価	11
3. 各実証県における研修改善の取組	p.14
3.1. 埼玉県教育局	14
3.2. 福井県教育庁	35
3.3. 奈良県教育委員会	53
3.4. 熊本県教育庁	71
3.5. 鹿児島県教育庁	89
4. 実証研究結果の総括	p.109

1. 事業概要

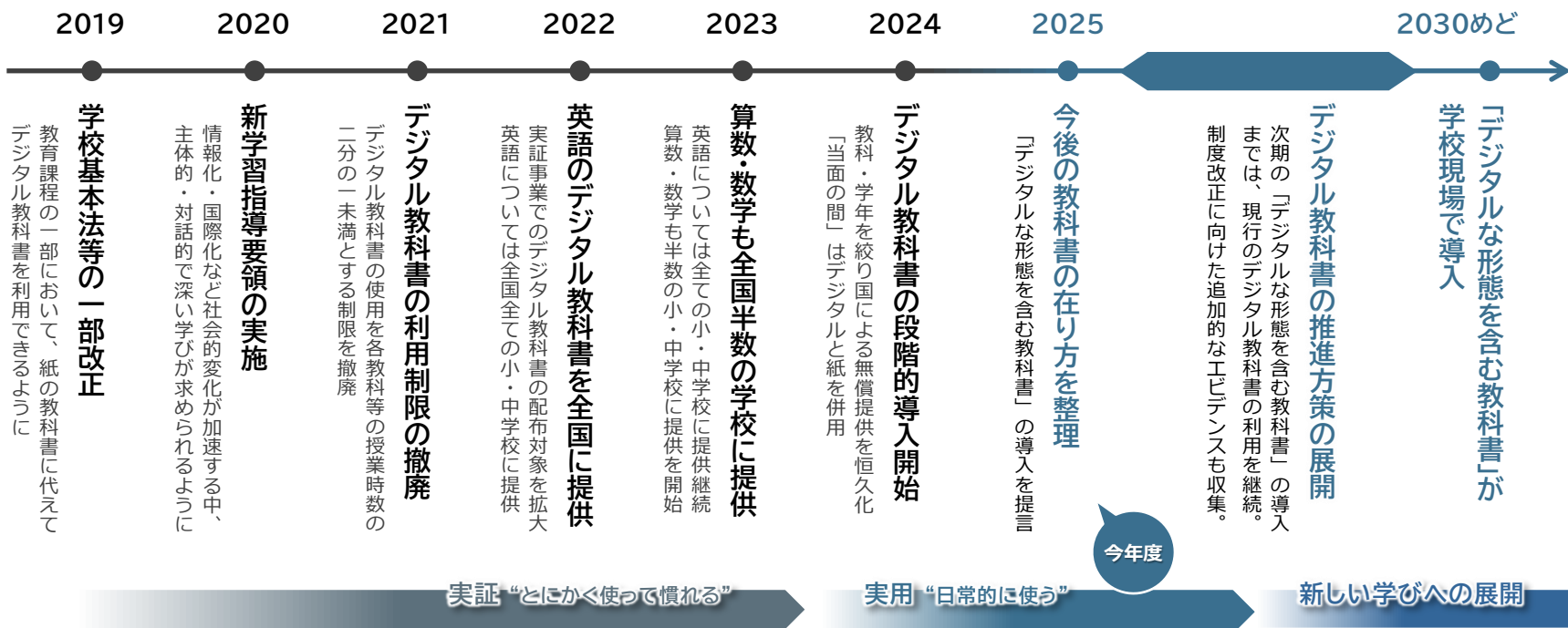


1. 事業概要

1.1. 本事業の背景・目的（1/2）

- 学習者用デジタル教科書（以下「デジタル教科書」という。）は、2019年の法改正により、紙の教科書に代えて使用できる教材として位置付けられ、英語を皮切りにデジタル教科書の段階的な導入が進められてきました。また、中央教育審議会の下に設置された「デジタル教科書推進WG」の審議まとめ（2025年）においては、今後は、**教科書の形態として紙だけでなくデジタルも認め、検定・採択・義務教育段階の無償給与などの対象とすることが適当とされました。**
- これを受けて、所要の制度改革を前提に、**デジタルも取り入れて作成される新たな教科書（デジタルな形態を含む教科書）が導入され、現行のデジタル教科書の活用の成果を踏まえつつ、学校現場で広く活用されることとなります。**本事業では、これら議論のエビデンスとなる情報を収集・整理することを目的に実施しました。

デジタル教科書の導入に係るこれまでの経緯と今後の動き

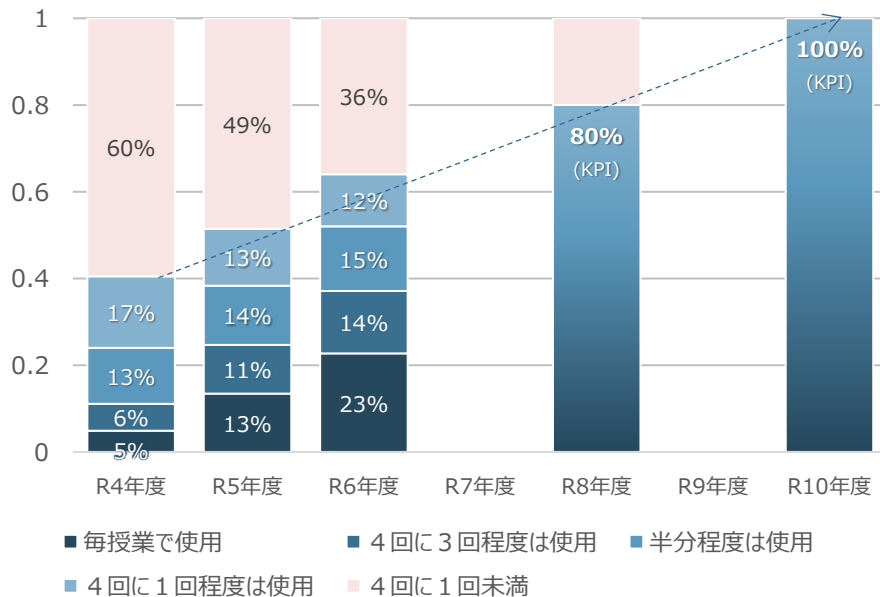


1. 事業概要

1.1. 本事業の背景・目的 (2/2)

- デジタル教科書をはじめとするICT等は、その活用を通じ、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善の効果を高めることが期待されています。実際に、「教師の授業でのデジタル教科書の使用頻度」は年々増加傾向にあり、教育現場においても、活用による効果が理解され、浸透しつつあるものと考えられます。（下図参照）
- 一方、過年度の実証事業からは、活用の程度は、自治体・学校・教員によっても相当の差異があり、また、活用事例も英語や算数・数学に偏っている現状が明らかとなっています。教員研修等の取組を通じて、デジタル教科書が効果を発揮する場面やその活用方法を周知し、より多くの教員がデジタル教科書を授業に取り入れるようにするとともに、教科や発達段階別の好事例を更に創出し、デジタル教科書を活用する教員の裾野を広げることが重要です。

教師の授業でのデジタル教科書の使用頻度の推移 ※1



デジタル教科書の活用に関する現状 ※1

デジタル教科書は、一人一人の良さを伸ばし困難の克服を助ける大きな可能性を秘めているが、効果的な活用は緒に就いたばかり

デジタル教科書等の導入・活用状況は、自治体、学校によっても大きく差があり、教員の活用スキルも様々

英語、算数・数学については比較的活用が進んでいるが、その他の教科についてはまだ事例が少ない

英語についても活用は4技能の一部に偏っていたり、個別最適な学習の用途が中心になるなど、活用のバリエーションにはまだ課題がある

発達段階別に見ると、小学校に比べ、中学校での活用はまだ途上



※1 令和6年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等の把握・分析等に関する実証研究事業」の成果物から弊社作成・分析

1. 事業概要

1.2. 本事業の全体像

- 前述の背景・目的から、本事業では次の3つの調査研究を実施しました。
- ①「**研修に関する調査研究**」では、全国5の都道府県教育委員会と連携し、有識者（次頁参照）の指導助言の下で、デジタル教科書の活用促進に関する研修の改善に取り組みました。②「**授業改善に関する調査研究**」では、全国から小学校を2校、中学校を3校選定し、同校と連携してデジタル教科書等を活用した授業改善に取り組みました。さらに、全国の小・中学校の教員及び児童生徒に対する③「**大規模アンケート調査等**」の実施を通じて、デジタル教科書が学習に及ぼす効果・影響を定量的・定性的に把握・分析しました。このうち、本書は、①「**研修に関する調査研究**」の結果をまとめたものです。

本事業を構成する3つの調査研究

	都道府県教育委員会における 研修に関する調査研究	市区町村教委及び実証研究校における 授業改善に関する調査研究	デジタル教科書の効果・影響の把握に資する 大規模アンケート調査等
対象	<ul style="list-style-type: none">● 全国5の都道府県教育委員会 (埼玉県、福井県、奈良県、熊本県、鹿児島県)	<ul style="list-style-type: none">● 左記の参加県教育委員会管下の小・中学校（合計5校）	<ul style="list-style-type: none">● 全国の小・中学校に所属する教員及び児童生徒（標本抽出）
実施内容	<ul style="list-style-type: none">● 都道府県教育委員会が計画するデジタル教科書の活用に係る研修（年内2回）を対象に、有識者の指導助言の下、その改善と実践に取り組んだ。● 研修の成果を定性的・定量的に評価し、どのように研修を実施すれば、効果的なデジタル教科書の活用促進に繋がるのかを検証した。	<ul style="list-style-type: none">● 各校において、主要5教科（外国語、算数、国語、理科、社会）の授業（年内2回）を対象に、有識者の指導助言の下、その改善と実践に取り組んだ。● また、一部では各校の取組を校内・地域内に展開。市町村教育委員会等とも連携し、デジタル教科書の活用促進を図った。	<ul style="list-style-type: none">● 全国の小・中学校のうち、外国語、算数・数学のほか複数教科のデジタル教科書を使用している学校を対象に、教員及び児童生徒を抽出し、アンケート調査を実施した。● 過年度との比較から経年変化を分析するほか、新規の調査観点を追加し分析を行った。● 特別な配慮を必要とする児童生徒への影響については追加ヒアリング調査も実施。
成果物	<ul style="list-style-type: none">● 研修計画、研修に使用した資料等一式● 研修効果の検証結果 など	<ul style="list-style-type: none">● 実践事例集● 実践事例動画 など	<ul style="list-style-type: none">● アンケート調査結果● 追加ヒアリング調査結果 など

本書の対象

1. 事業概要

1.3. 有識者会議の開催

- 本事業では、各調査研究の実施に当たっての指導・助言を得るため、デジタル教科書等の活用や各教科の指導に精通する有識者にご協力いただきました。また、各有識者には、「研修に関する調査研究」及び「授業改善に関する調査研究」について討議するWG、「大規模アンケート調査等」について討議するWGに参画いただき、本事業の実施内容及び成果に助言を頂きました。

有識者（WG委員）一覧

氏名	所属・職名	研修	授業改善	アンケート	担当県・教科
主査 中川 一史	放送大学 教授	○	○	○	—
副査※1 中橋 雄	日本大学 教授	○	○	○	—
齋藤 嘉則	東京学芸大学 教授	○	○	—	—※3
太田 洋	東京家政大学 教授	○※2	○※2	—	鹿児島県 (外国語)
岡部 恭幸	神戸大学 教授	○※2	○※2	—	福井県 (算数)
佐藤 幸江	放送大学 客員教授	○※2	○※2	—	奈良県 (国語)
岩崎 有朋	札幌国際大学 教授	○※2	○※2	—	熊本県 (理科)
副査※1 小林 祐紀	放送大学 准教授	○※2	○※2	—	埼玉県 (社会)
副査※1 稲垣 忠	東北学院大学 教授	—	—	○	—
齊藤 萌木	聖心女子大学 講師	—	—	○	—

- ※1 研修に関する調査研究の副査を小林委員、授業改善に関する調査研究の副査を中橋委員、アンケートWGの副査を稲垣委員にそれぞれ依頼した。
- ※2 各委員には本事業に参加した全国5の県教育委員会が行う研修の内容等に直接の指導・助言を依頼し、各県の実証研究校における授業改善に関する指導・助言も依頼した。
- ※3 埼玉県研修における外国語科の視点からの指導・助言を担当いただいた。

開催要領

第1回 研修・授業改善WG

日時： 2025年7月18日
議事： 今年度の実証方針に関する意見交換

第2回 研修・授業改善WG

日時： 2025年11月12日
議事： 実証研究状況の報告及び以降の取組に向けた意見交換

第3回 研修・授業改善WG

日時： 2026年3月5日
議事： 実証研究結果の報告
研修・授業改善における成果と課題及び今後の取組方針に関する意見交換

第1回 アンケート調査WG

日時： 2025年8月（書面開催）
議事： 調査方針及び設問設計に対する意見聴取
標本設計に対する意見聴取

第2回 アンケート調査WG

日時： 2026年2月27日
議事： アンケート集計・分析結果の報告
分析結果に対する意見聴取

2. 実証研究の方法

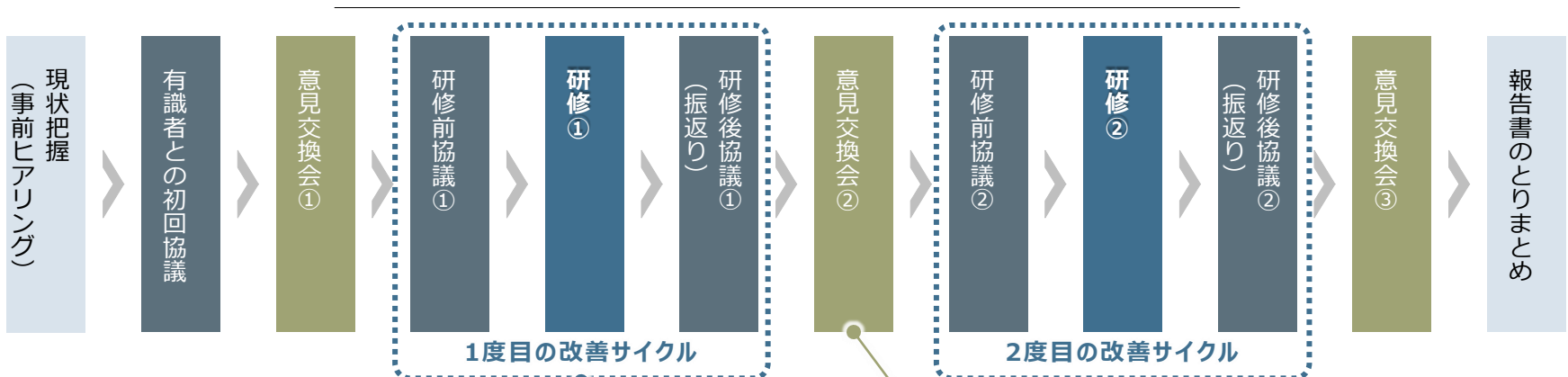


2. 実証研究の方法

2.1. 研修の改善プロセスの全体像

- 本事業では、全国から5つの県教育委員会を選定し、当該実証県が実施する2回の研修をターゲットに調査研究を実施しました。
- 研修の実施に当たっては、各実証県が、有識者の指導助言のもと、2度の改善サイクルを繰り返し、研修の成果や課題を抽出するとともに以降の改善に向けた取組を検討しました。
- また、改善サイクルの前後には、実証県間の横の連携を目的とした意見交換会を実施し、各研修から得られた成果や課題を共有しながら、実証県全体で、効果的に活用促進を図るための研修モデルの創出に取り組みました。

実証研究の全体像



2度のサイクルを通じた研修改善

- 有識者の指導助言のもと、デジタル教科書の活用促進に向けた研修を検討。
- 2度の改善サイクルを繰り返し、1回目の研修から得られた成果や課題を2回目の研修計画の改善に繋げる。

実証県の横の連携を図る意見交換会

- 5つの実証県間で情報交換を行う場として年3回実施。
- 改善サイクルの前後で実施し、各研修から得られた成果や課題を共有の上、更なる研修改善に向けた方策について実証県全体で議論。



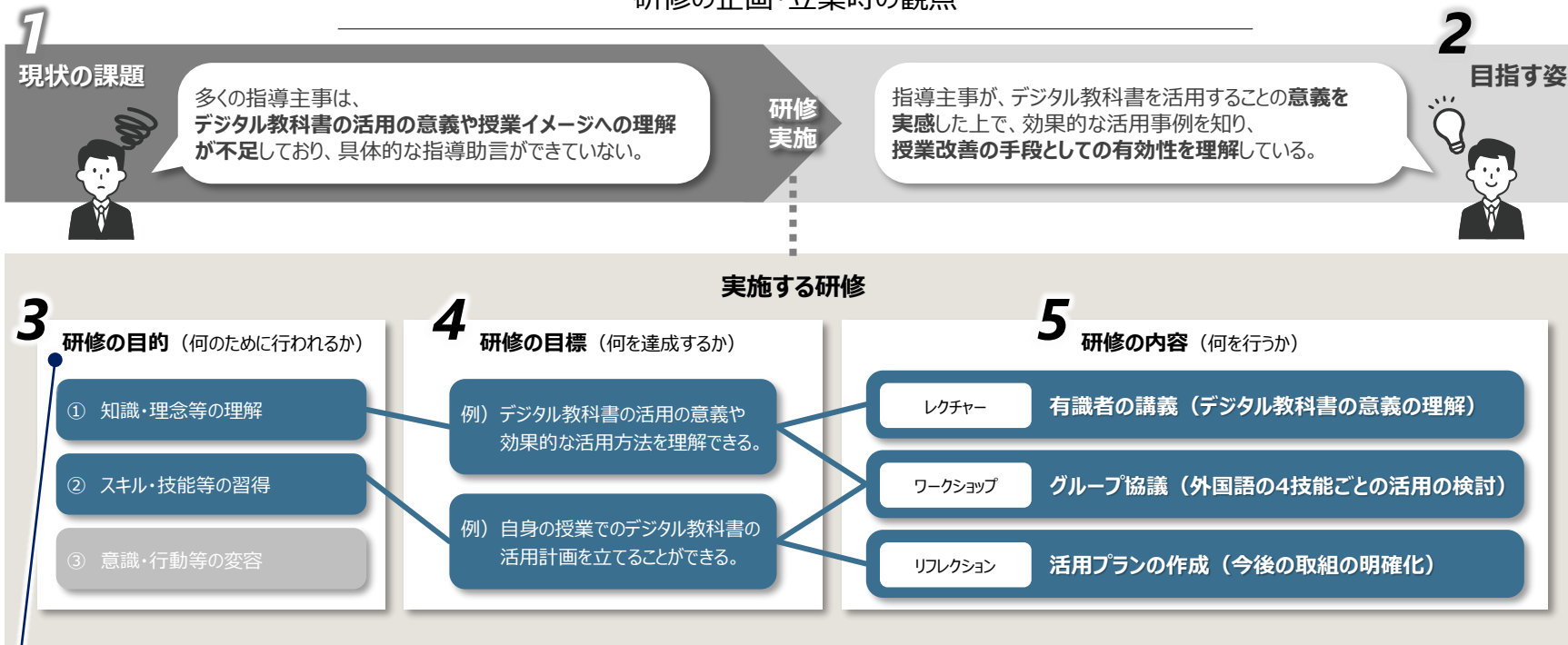
地域全体でのデジタル教科書の活用に向けた研修モデルの創出

2. 実証研究の方法

2.2. 研修の企画・立案 (1/2)

- 各回の研修は、以下に示す流れのように、受講者の「現状の課題」と「目指す姿」を出発点とし、「研修の目的」を知識・スキル・意識の3類型※から設定の上、「研修の目標」(達成水準)を具体化し、それに紐づくように「研修の内容」を整理しました。
- このように体系立てて整理することで、各回の研修で目指す方向性や他の研修等の取組で補完すべき内容を明確にしました。

研修の企画・立案時の観点



「研修の目的」は、以下の3類型に分類し、**本研修が何のために行われるものかを明確化する。**

- | | | |
|--------------|---|-------------------------|
| ① 知識・理念等の理解 | … 個別・協働の学びの充実に向けたデジタル教科書の活用方法を理解し、 実際の授業における活用イメージ をもつ | (講義等による事例紹介・解説など) |
| ② スキル・技能等の習得 | … 自身の授業における デジタル教科書の効果的な活用方法を具体化し、実行できる能力 を習得する | (活用を含めた単元計画の作成など) |
| ③ 意識・行動等の変容 | … デジタル教科書活用の 有効性・必要性を実感させ、積極的な活用を促進 する | (アクションプランに基づく実践の結果共有など) |

※ 独立行政法人教職員支援機構「教職員研修の手引き2018」及びJames D & Wendy Kayser Kirkpatrick「Kirkpatrick's Four Levels of Training Evaluation」を基に弊社にて整理

2. 実証研究の方法

2.2. 研修の企画・立案 (2/2)

- 研修計画は、共通のフォーマット※を用いて、以下に示すポイントに沿って作成しました。

研修計画サンプル

デジタル教科書等の活用に関する研修計画			
基本情報			
対象者・人数	対象者：小学校教諭、中学校外国語（英語）専科教諭 参加人数：60人		
現状の課題		目指す姿	
現状	事前アンケートでは、約60%の教員が、デジタル教科書の使用頻度について「1/4未満」と回答。	現場の教員が、デジタル教科書の活用の意義や効果を理解する。また、外国語の授業の様々な場面において、デジタル教科書を活用することができる。	
課題	多くの教員は、デジタル教科書の効果を実感していないため、具体的な活用に至っていない。		
研修の目的・目標			
項番	研修の目的	研修の目標	
①	知識・理念等の理解	デジタル教科書の効果的な活用方法を理解する。	
②	スキル・技能等の習得	自身の授業におけるデジタル教科書の活用の計画を立てることができる。	
研修の概要			
研修の各活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 講義を通して、デジタル教科書の理念や活用方法に関する理解を深める。(①) ・ グループワークにより授業におけるデジタル教科書の活用方法を検討する。(①・②) 		
準備物	講義資料、演習用資料、プロジェクト、端末、学習者用デジタル教科書（サンプル版）		
研修の詳細			
所用時間	研修スタイル	内容	対応する目的・目標
30分	レクチャー	<ul style="list-style-type: none"> ■ 有識者の講義（デジタル教科書の意義の理解） ・ デジタル教科書活用の意義・効果について 	①
60分	ワークショップ	<ul style="list-style-type: none"> ■ グループ協議（外国語の4技能ごとの活用の検討） ・ サンプル版デジタル教科書を用い、実際に触れながら、グループで検討 	①・②
研修後	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研修後の各受講者のプランに基づく実践事例を収集し、情報共有のプラットフォームで受講者に共有。 ・ 同プラットフォームでデジタル教科書活用に関する質問を収集・回答。Q&A形式で取りまとめ蓄積。 		

作成のポイント

「現状の課題」と「目指す姿」の設定

- ・ 現状（デジタル教科書の活用状況や研修の取組状況など）と課題（現状を生み出している真因など）に細分化し、本研修が受講者のどのような課題やニーズ（研修に何を求めているか）にアプローチするかを明確化。
- ・ それらを踏まえ、研修を通じて目指す姿を設定。

研修の目的・目標の設定

- ・ 「目指す姿」の達成に向け、研修の目的・目標を具体的に設定。
- ・ 研修の目標は、受講者が「何をどの程度までできるようになるか」を可能な限り具体化し、研修を通しての達成水準を明らかにする。

目的・目標の達成に向け研修内容を整理

- ・ 研修の目的・目標の達成に向け、研修の内容を整理。
- ・ 各活動は、目的・目標と紐づけるとともに、以下の3つの研修スタイル※を組み合わせ設定する。

主な研修スタイル	代表的な活動
レクチャー（知識伝達型）	聴く・見る・考える
ワークショップ（問題解決型）	話し合う・体験する・創作する
リフレクション（省察型）	分かち合う・内省する・深め合う

研修前後の取組を記載

- ・ 研修前後の取組を設定することで研修効果を更に高めることが可能となる。
- ・ 本項目には、その内容を記載。

※ 独立行政法人教職員支援機構「教職員研修の手引き2018」を基に弊社にて整理

2. 実証研究の方法

2.3. 研修の評価（1/3） 評価の概要

- 研修の効果測定は「カークパトリックの4段階評価」を用いて実施し、p. 9の流れに沿って事前に整理した研修目的（知識・スキル・意識）の達成度合いと、研修以降の行動変容の度合いを評価しました。
- 具体的には、下図のLV1～3を測定対象とし、研修時の観察や受講後アンケートをもとに「LV1：受講者の反応（満足度）」と「LV2：受講者の学び（知識・スキル・意識）」を、一定期間経過後の追跡アンケートをもとに「LV3：受講者の行動（研修以降の行動変容）」を調査しました。

カークパトリックの4段階評価※（赤枠：本事業の測定対象）

LV	定義名称	評価の対象	評価の内容	評価結果の活用目的	主な評価方法（赤字：実施した方法）
1	受講者の反応	<ul style="list-style-type: none"> 研修終了時点の満足度 	<ul style="list-style-type: none"> 研修に対して満足したか。 会場・資料は適切だったか。 	<ul style="list-style-type: none"> 研修内容の改善 	<ul style="list-style-type: none"> 研修時の受講者の観察 受講後アンケート（p.12） フォーカスグループへのインタビュー
2	受講者の学び	<ul style="list-style-type: none"> 研修を通して形成された知識・スキル・意識 	<ul style="list-style-type: none"> 研修で扱った知識や理念等を理解したか。 具体的な活用に向けたスキル・技能を習得したか。 研修を通して意識の変化があったか。 	<ul style="list-style-type: none"> 研修による効果の測定（対受講者） 	<ul style="list-style-type: none"> 受講後アンケート（p.12） 研修時に作成した成果物の分析 レポート提出（アクションプランの作成 等） 筆記試験、模擬実践
3	受講者の行動	<ul style="list-style-type: none"> 研修後以降の受講者の行動変容の度合い 	<ul style="list-style-type: none"> 研修で扱った内容を、受講者が職務において活用できたか。 		<ul style="list-style-type: none"> 一定期間経過後の受講者への追跡アンケート（p.13） 受講者が実施する授業の観察 上司等による直接観察・録画観察 レポート提出（研修で作成したアクションプランの実施状況 等）
4	児童生徒への影響	<ul style="list-style-type: none"> 学習者の学習成果 	<ul style="list-style-type: none"> 受講者は職場の業績に貢献したか。 	<ul style="list-style-type: none"> 研修による効果の測定（対児童生徒） 	<ul style="list-style-type: none"> 学習者へのテスト・アンケート

※ James D&Wendy Kayser Kirkpatrick「Kirkpatrick's Four Levels of Training Evaluation」を基に弊社にて整理

2. 実証研究の方法

2.3. 研修の評価（2/3） 研修直後のアンケート

- 各回の研修直後には、受講者にアンケートを実施し、研修の満足度や研修を通して形成した知識・スキル・意識を聴取しました。
- これらの結果を分析し、研修における改善点及び研修による効果を把握しました。

実際の調査でを使用した主な設問項目

#	設問例	LV※	区分	回答法	設問意図
1	教職経験年数／指導主事職の経験年数	-	受講者の属性	選択式	基礎情報として、受講者の経験年数及びデジタル教科書の活用頻度を把握。
2	学習者用デジタル教科書の授業における活用頻度／学習者用デジタル教科書の活用に関する指導助言の機会の頻度			4件法	
3	本研修は全体としてどの程度満足できる内容であったか	LV1 受講者の反応	研修の満足度	4件法	研修の満足度を把握し、本研修がどの程度受講者に訴求したかを分析。
4	研修のどのような内容に満足したか（または満足しなかったか）			自由記述	研修に対する受けとめを自由記述にて聴取し、成果や改善点を定性的に把握。
5	研修内容をどの程度理解することができたか	LV2 受講者の学習	知識	4件法	内容の理解度を聴取し、本研修を通じて知識を形成することができたかを把握。
6	研修のどのような内容を理解したか／役に立つと感じたか			自由記述	理解した／有用に感じた内容を自由記述にて聴取し、どのような知識を習得したかを把握。
7	研修において理解できなかったことはあるか			自由記述	研修で理解できなかった内容を自由記述にて聴取し、以降の研修設計における改善点を把握。
8	今後の授業においてデジタル教科書をどのように活用するか／今後の学校訪問においてどのように指導助言を行うか		スキル	自由記述	研修以降の取組を自由記述にて聴取し、その内容からスキルの習得に繋がったかを把握。
9	研修の前後でデジタル教科書の活用に対する意欲は高まったか／デジタル教科書に関する指導助言について自信をもつことができたか		意識	4件法	研修を通してデジタル教科書活用に関する意識に変化があったかを把握。
10	研修に対する意見や改善点はあるか。また、学習者用デジタル教科書の活用に関し更に知りたいこと、実施してほしい取組はあるか。	-	-	自由記述	以降の研修設計の参考となる改善点等を把握。

※ ここでいう「LV」とは、p.11の「カークパトリックの4段階評価」における「LV」を指す。

2. 実証研究の方法

2.3. 研修の評価（3/3） 一定期間経過後の追跡アンケート

- 研修から一定期間経過後（1か月後～）には、受講者に対して追跡アンケートを実施しました。
- このアンケートを通じて、研修以降にその内容をどのように活用しているかを聴取し、受講者の行動変容の様子を把握しました。

実際の調査で使用した主な設問項目

#	設問例	LV※	回答法	選択肢	設問意図
1	研修内容を実際の授業に活かすことができているか／研修内容を指導助言に活かすことができているか	LV3 受講者の 行動	4件法	・活かしている(#2~4へ) ・まあまあ活かしている(#2~4へ) ・あまり活かしていない(#5へ) ・ほとんど活かしていない(#5へ)	受講後の研修内容の活用状況を聴取し、研修がどの程度行動変容に繋がったかを把握。
2	学習者用デジタル教科書をどのように活用しているか／学習者用デジタル教科書に関してどのように指導助言しているか		自由記述	—	具体的な活用方法を聴取し、研修のどのような内容が行動変容に影響したかを把握。
3	学習者用デジタル教科書の活用に関して、どのような効果や課題を実感しているか		自由記述	—	実際の活用を通じて実感する効果や課題を自由記述にて聴取し、以降の研修等の改善点を把握。
4	学習者用デジタル教科書の活用に関して今後更に知りたい内容や深めたい内容があるか		自由記述	—	
5	デジタル教科書を活用していない理由は何か		自由記述	—	デジタル教科書の活用を妨げる阻害要因を聴取し、以降の研修等の改善点を把握。

※ ここでいう「LV」とは、p.11の「カークパトリックの4段階評価」における「LV」を指す。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.2. 福井県教育庁

3.3. 奈良県教育委員会

3.4. 熊本県教育庁

3.5. 鹿児島県教育庁



3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.1.1. 基本情報

- 実証研究にご協力いただいた埼玉県教育局に関する基本情報、実証前の課題認識は以下のとおりです。

県担当部署	埼玉県教育局 市町村支援部 義務教育指導課／西部教育事務所		
県担当者	添野 圭介 指導主事 秋元 政康 指導主事 杉崎 亮 指導主事 山井 葉里子 指導主事	担当有識者	放送大学 小林 祐紀 准教授 東京学芸大学 齋藤 嘉則 教授
県における 過年度の取組	<ul style="list-style-type: none">・ 令和6年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」で、小中学校の外国語教諭と指導主事向けのデジタル教科書に関する研修を実施。・ 小学校英語専科指導教員研修会、小中学校等英語指導力養成講座等で、デジタル教科書の活用も取り上げた。・ 英語指導方法改善事業研究発表会の中で、デジタル教科書の活用に関する研究を実施。		

実証前の 課題認識



学校・教員

- 一斉指導型の授業からの意識改革が進んでいない
 - ・ 「デジタル教科書も活用しながら、個別最適な学び・協働的な学びを充実させていくと良い」と周知をしても、一斉指導型の授業が念頭にある教員には、取り入れ難い内容となっており、活用が進んでいないと考えられる。
 - ・ デジタル教科書の活用の前提となる「学習者主体の学びへの転換」といった教員の意識改革にも踏み込んでいく必要がある。

教育委員会・指導主事

- デジタルの利点を実感されず効果的な指導助言ができない
 - ・ デジタル教科書を「紙の教科書のPDF版」と認識している指導主事が多く、デジタルならではの利点を実感できていないため、現場に対して有効な指導助言ができていない。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.1.2. 年間計画

- 埼玉県教育局における、令和7年度のデジタル教科書の活用に関する研修計画は以下のとおりです。このうち、本事業では三芳町と北本市の外国語教員向け研修を、研修改善に関する実証対象としました。

	対象	概要
令和6年度 三芳町外国語 教員向け研修	・ 三芳町の 小学校・中学校教員14名 (外国語科担当)	<ul style="list-style-type: none">・ デジタル教科書活用の意義・必要性に関する共通理解と具体的な活用イメージの醸成を目的に、有識者の講話やワークショップを実施。・ ワークショップでは、デジタル教科書に実際に触れながら、外国語の4技能ごとに活用方法を個人・グループで検討。グループでの協議内容を踏まえ、各自で「デジタル教科書活用プラン」を作成。 ※詳細は令和6年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」報告書を参照。
横展開		
北本市外国語 教員向け研修会 (第1回研修) 実証対象：p.17	・ 北本市の 小学校・中学校教員15名 (外国語科担当)	<ul style="list-style-type: none">・ デジタル教科書活用の意義・必要性に関する共通理解と具体的な活用イメージの醸成を目的に、有識者の講話や、教科書発行者による機能紹介、ワークショップを実施。・ ワークショップでは、デジタル教科書に実際に触れながら、外国語の4技能ごとに活用方法を個人・グループで検討。グループでの協議内容を踏まえ、各自で「デジタル教科書活用プラン」を作成。
発展		
三芳町外国語 教員向け研修会 (第2回研修) 実証対象：p.25	・ 三芳町の 小学校・中学校教員16名 (外国語科担当)	<ul style="list-style-type: none">・ 各受講者が、令和6年度研修以降に実施したデジタル教科書を活用した授業実践結果を持ち寄り、グループで共有。・ 先進的な活用を行っている受講者の授業動画を視聴し、有識者による価値づけを実施。・ 研修以降の実践を想定して、受講者ごとに単元計画を作成した上で、グループで協議。協議内容を踏まえて有識者からの講評。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.1.3. 研修改善（第1回）



- 1回目の実証対象とした研修の概要は以下のとおりです。



研修の概要

研修のポイント

- ✓ 外国語科はデジタル教科書の導入が進んでおり、具体的な活用方法を検討し実践に移しやすいため、**小学校教諭・中学校外国語教諭を対象**とする。
- ✓ 受講者が、デジタル教科書の機能を把握し、活用方法を検討できるよう、**教科書発行者による機能紹介**を行う。
- ✓ 「授業観の転換」のためにデジタル教科書を活用できるよう、**グループワーク内容を踏まえた有識者による価値付けや講義**を行う。

対象者：埼玉県北本市内の小学校教諭・中学校外国語教諭 15名

実施方式：参集

目的

① 知識・理念等の理解

② スキル・技能等の習得

③ 意識・行動等の変容

目標

・「授業観の転換」の重要性を認識した上で、デジタル教科書の意義や効果を理解できる。

・自身の授業におけるデジタル教科書の活用イメージをもつことができる。

・研修中・研修後に作成した「デジタル教科書活用プラン」を自身の授業実践に活かすことができる。

内容

レクチャー 有識者の講義（子供主体の学びの必要性）

レクチャー 教科書発行者による講義（機能紹介）

ワークショップ グループ協議（授業アイデアの共有と検討）

レクチャー 有識者の講義（グループ協議の講評・全体総括）

研修後の取組 受講者による授業実践（公開授業）

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.1.3. 研修改善（第1回）

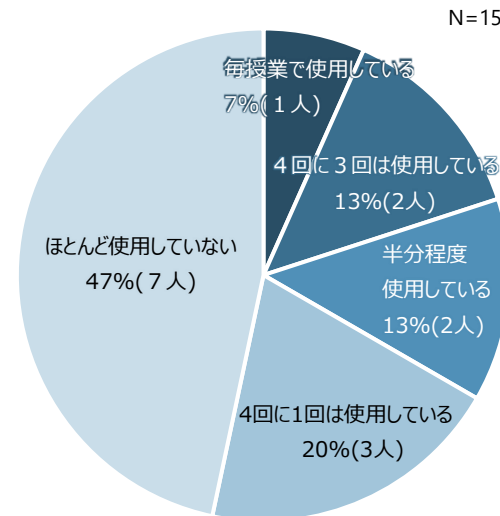
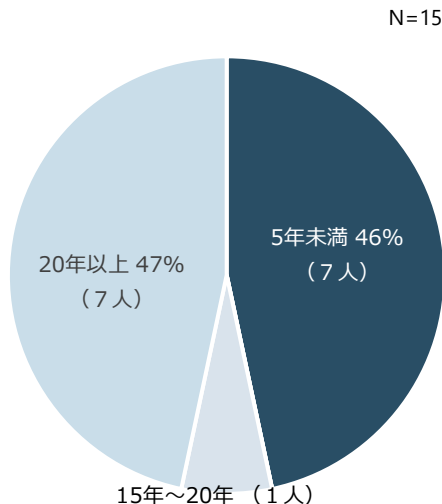
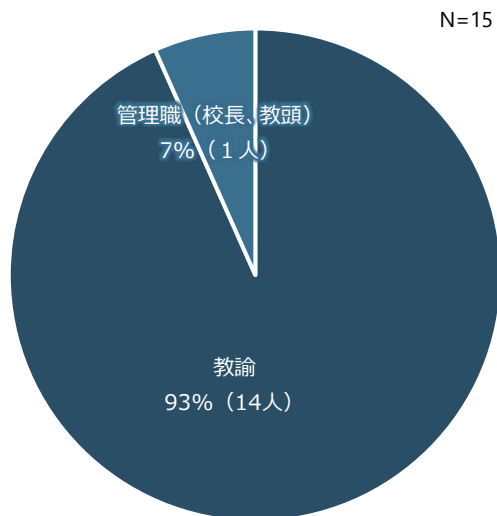


- 本研修の受講者の傾向※は、以下のとおりです。
- 本研修受講者は、役職は「教諭」の者が約9割を占めています。また、教職経験年数は「5年未満」の若手教員と「20年以上」のベテラン教員がそれぞれ半数ずつ混在している状況です。
- デジタル教科書の活用頻度は、「ほとんど使用していない」と回答した者が約半分を占めている一方、「毎授業で使用している」「4回に3回は使用している」と回答した者も2割を占め、受講者間でデジタル教科書の活用に差がある状況がうかがえます。

役職

教職経験年数

デジタル教科書の活用頻度



※ この傾向は受講後アンケート結果に基づくものであり、実際の受講者数と有効回答数が異なる。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.1.3. 研修改善（第1回）



- 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

レクチャー

有識者の講義（子供主体の学びの必要性）



有識者による講義動画を視聴した。

■ 主な講義内容

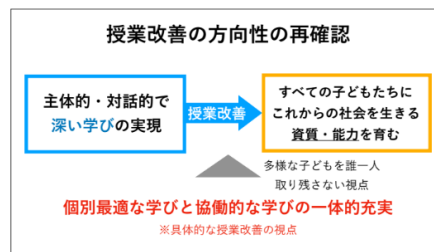
前半：授業観の転換の必要性

- ・ 自分らしい学びの実現ができていると思っている子供や※1、自律学習への自信がある子供が少ない※2ことをデータに基づき説明。
- ・ これからの学校教育では「個別最適な学び」の実現のために、「指導の個別化」と「学習の個性化」が求められることを説明。

後半：ICTを活用した授業づくりの紹介

- ・ 「指導の個別化」「学習の個性化」の観点から、ICTを活用した授業の例や、デジタル教科書の機能を紹介。

- ・ 「個別最適な学び」などの学習指導要領の用語や、「新しい時代にふさわしい学び」「学びの自己調整」などの理論的な説明は、データを示しながら説得的に説明されたことで、受講者がメモする様子が多く見られた。
- ・ 理論的な説明の後にデジタル教科書を活用した授業の具体例が示された箇所で、受講者は有識者の講義動画を注視しており、理論と具体例を紐づけて納得している様子だった。



▲ これからの時代に求められている授業づくりの方向性を提示

▲ 学習を徐々に児童生徒に委ねていくことの重要性を説明講義全体の中でも、特に教員の共感を得られていた

レクチャー

教科書発行者による講義（機能紹介）



小学校教諭・中学校外国語教諭で別の教室に分かれた後に、教科書発行者より、デジタル教科書の機能に関する講義が行われた。

■ 主な講義内容

- ・ 紙の教科書のQRコンテンツや指導者用デジタル教科書と比較し、学習者用デジタル教科書の特徴を説明。
- ・ 会場の大型提示装置に学習者用デジタル教科書を投影しながら機能を説明。

- ・ 受講者を校種別に分け少人数で講義を行ったため、**受講者が気軽に教科書発行者に質問できる雰囲気**ができて、校種ごとに異なる実態に即した内容を知ることができた。
- ・ 講義の中で受講者は、説明されたデジタル教科書の機能やコンテンツを試していた。**活用経験のある受講者が近くの受講者に機能を教えている様子も見られた**。また、操作する中で「家庭学習でも使えそう」「子供同士で問題を出し合える」など**活用アイデアが出てきていた**。
- ・ 授業内の端末利用時の課題など、**デジタル教科書の機能から離れた話題で話が盛り上がる様子も見られた**。



▲ デジタル教科書に関する説明を受けながら、実際に操作し、受講者同士で話す様子

次頁に続く

※ 1 https://www.digital.go.jp/assets/contents/node/information/field_ref_resources/511df327-5ba3-456e-a5cd-2ebdedd8c960/29c4e154/20250613_edu-dx-full.pdf
※ 2 https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2022/01_point_2.pdf

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.1.3. 研修改善（第1回）

■ （前頁の続き）

研修の流れ

ワークショップ

グループ協議（授業アイデアの共有と検討）



40分

教科書発行者からの講義を踏まえて、グループでデジタル教科書を用いた授業アイデアを出し合った。

■ グループ協議の実施方法

- 校種別に4～5人のグループを編成。
- グループで、外国語の4技能（聞く・読む・話す・書く）に沿って、デジタル教科書の効果的な活用アイデアを出し合った。
- 個人でアイデアを付箋に書き出した上でグループで模造紙にまとめ、発表を行った。

レクチャー

有識者の講義



15分

有識者より、英語の授業づくりにおいて必要な教科固有の観点の説明がなされた。

■ 主な講義内容

- 言語習得のためには、インプットが重要であることを説明。
- 授業には、教員が正しい表現を教え、児童生徒が練習する流れだけでなく、具体的な状況を想定し、その際必要となる英語の表現を考えると流れがあることを紹介。後者の流れの場合、デジタル教科書をインプットに活用しやすく、学習効果も大きいことを具体的な授業場面も挙げながら説明。

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 研修の最初に行った有識者の講義資料を参照し、講義でのキーワード「**子供に委ねる**」を用いて、議論がなされていた。講義により、受講者の**目指す授業の方向性が揃っていた**ため、議論が円滑になったと考えられる。
- デジタル教科書の具体的な授業での活用方法以上に、**知らない機能を見つけることに注目が集まりがち**だった。
- 少人数でアイデアを付箋に書き出していくグループワークであったため**、ある受講者が1つアイデアを出すと、別の受講者が関連した**アイデアを次々に出していた**。
- ワーク中も教科書発行者に質問や意見交換をしやすい環境だったため**、受講者は浮かんだアイデアをデジタル教科書で実現できるかをすぐに確かめられ、**積極的なアウトプットに繋がっていた**。



▲デジタル教科書进行操作しながら、活用方法を議論する様子

聞くこと	読むこと
本文のマスク機能を活用し、ディクテーションに取り組む。	単語を練習できるアプリの機能を家庭学習で活用する。
話すこと	書くこと
スピーチの動画を視聴し、子供がスピーチをする際の参考にする。	スピーチの原稿を書くときに使えるような教科書の文にマーカーをつける。

◀実際に受講者が付箋に書き出したアイデアの例

- 具体的な授業場面も挙げて説明されたため、受講者の理解度を高めていた。
- 受講者の議論の中で多く挙がっていた「イヤホンが無いので活用できていない」という声を踏まえて、「言語習得のインプットにイヤホンは必須ではない」という話を投げかけ、受講者の関心を惹きつけていた。



3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.1.3. 研修改善（第1回）



- 研修から約3か月後、受講者の一部が授業実践を行いました。
本実証研究では、そのうち中学校教諭による外国語の授業の様子を、研修の成果が現れているかという観点で観察しました。

授業の流れ

1 スモールトークと本時の目標の確認

- ① クリスマスの予定に関して生徒同士で英語で会話。
- ② 前時で内容理解を行った本文に関して、単元末の発表で話すことができるように、正しい発音で話すことを練習する方針を全体で確認。

2 デジタル教科書を活用し、各自で音読練習

- ① 一斉で音読を行いイントネーション等を確認した後に、生徒が各自でデジタル教科書のスピード調整やカラオケ機能を用いて音読練習する。また、語の連結や強勢など、発音で気を付けることをマーカーや付箋機能等で書き込ませる。
- ② ペアで交互に本文を読む。その後、文字起こし機能を用いて、生徒が各自で発音の正確性を確認する。
- ③ 本時の取組に関して、振り返りを記入する。

授業観察の結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 研修の成果・課題を踏まえて、事前に関係者間で協議し設定した以下の2つの観点から授業観察を行った。

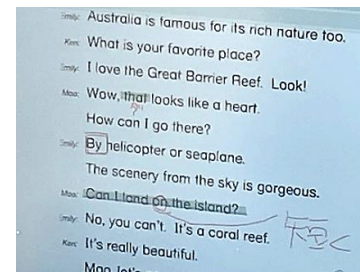
1. デジタル教科書の機能がどのように活用されているか。

読み上げのスピードを遅くした上で、発音が難しい箇所を何度も練習する生徒や、新出単語の発音から確認する生徒、繋げて発音する箇所をマーカーで強調する生徒等、各自でデジタル教科書の機能を工夫して活用しながら音読を行っていた。

2. 「指導の個別化」「学習の個性化」がされているか。

上記のように、生徒が自分に合った方法を選択しながら学習を進めており、授業者も手が止まっている生徒を中心に声かけを行っていた。

- 以上のように、**デジタル教科書の基本的な機能を多用しながら、生徒主体で学びを進める様子**が見られ、研修内の講義で教科書発行者や有識者が取り上げた内容が活かされていた。
- 授業後の研究協議においても、有識者や参観者から「デジタル教科書をまず使ってみる」段階の授業例として受け止められていた。



▲教科書本文に発音のポイントを書き込んでいる様子

- さらなる改善点として、生徒による振り返りの際に、「自分で選んだ学び方はどうだったか」「次回更に良く学ぶためには」等、学び方についても生徒同士で交流させることで、生徒が目的をもって学び方を選択できるようになり、「学習の個性化」が向上するという意見が挙げられた。

3. 各実証県における研修改善の取組




3.1. 埼玉県教育局

3.1.3. 研修改善（第1回）



- 受講後アンケートでは、満足度・理解度・活用に対する意欲について自己評価を求めたところ、いずれの項目についても **9割以上の受講者から肯定的な回答が得られました。**
- また、各項目について自由記述での意見を求めたところ、「**これからの授業づくりの見通しを持たた**」「**『個別最適な学び』の実現におけるデジタル教科書の有用性を理解した**」といった意見が多く挙げられました。
- 今後の研修に対する意見・要望としては、「**個別最適な学び**」の**一層の充実につながる活用について学びたい**との声が寄せられています。

受講後アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

研修の満足度  100%が満足	研修の理解度  93%が理解	活用に対する意欲  100%が現状より向上
満足度に関する自由記述（抜粋） <他校の先生から学ぶことができた> <ul style="list-style-type: none">・グループワークでは、他校の先生のデジタル教科書の具体的な活用方法を知ったり、意見交換できたりして満足した。 <デジタル教科書の機能を知ることができた> <ul style="list-style-type: none">・デジタル教科書の知らなかった機能や、使用していなかった機能の活用方法が分かった。 <今後の授業の見通しをもつことができた> <ul style="list-style-type: none">・今回新たに知った授業づくりの工夫を、2学期の授業ですぐに生かせると思った。	理解度に関する自由記述（抜粋） <状況に応じた教材選択の重要性を理解> <ul style="list-style-type: none">・毎時間ではなく、効果的なタイミングでデジタル教科書を活用することが必要だと分かった。・生徒が関心や能力、課題に応じて、デジタル教科書を使用できると良い。 <授業観の転換の意義を理解> <ul style="list-style-type: none">・これからの時代に求められる授業のために「授業観の転換」の視点で、自分の授業を振り返り、今日学んだことを実践したい。・「個別最適な学び」の実現のために、デジタル教科書が有効であることが分かった。	今後の活用に関する自由記述（抜粋） <効率向上で学びの時間を最大化したい> <ul style="list-style-type: none">・単語テストや自己評価シートなど、デジタル教科書にある機能を用いて手間を削減したい。・URLやスタンプを貼る機能、しおり機能を用いて、子供の手間を省きたい。 <個別学習にして子供たちに学びを委ねたい> <ul style="list-style-type: none">・まずは授業内で、英文を読んだり、音読練習をしたりする個別学習の時間を設け、習熟度に応じた学習ができるようにしたい。・生徒が自らの学びにあったやり方や機能を見つけて、学びを深められるよう、ある程度の範囲や課題を決めた上で、子供たちにデジタル教科書の使用を委ねたい。

■ 今後の研修に対する意見・要望

- ・ デジタル教科書の機能に加え、具体的な活用方法をもっと知りたい。
- ・ 「読む」「聞く」の練習へのデジタル教科書の活用ばかりではなく、「**個別最適な学び**」の**一層の充実につながるデジタル教科書の利点にもっと焦点を当てると良かった。**
- ・ **別の校種の先生とも意見交換をしたかった。**

※ 調査対象：研修受講者（北本市小学校教諭・中学校外国語教諭） 有効回答数：15 調査期間：研修実施後1週間（令和7年8月28日～9月4日）

3. 各実証県における研修改善の取組

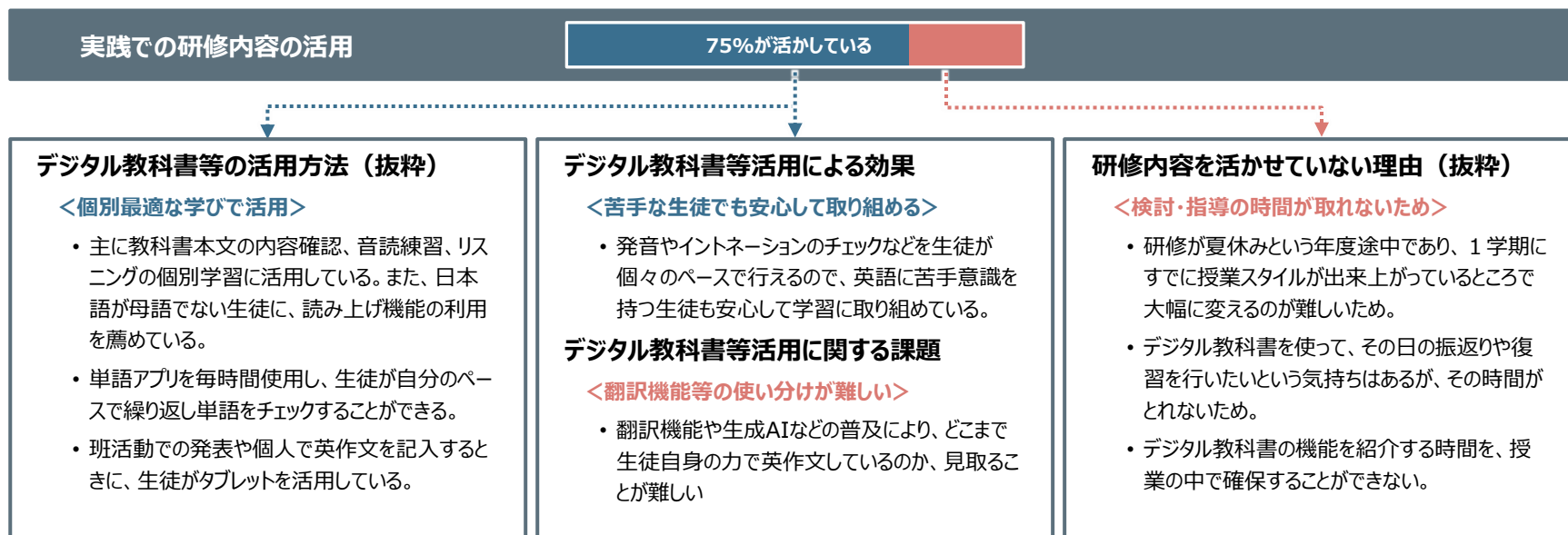
3.1. 埼玉県教育局

3.1.3. 研修改善（第1回）



- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、**75%の回答者が研修内容を活かしている**と回答しています。
- 実践の内容としては、特に「**個別最適な学び**」における活用が挙げられ、その効果としては「**学習が苦手な生徒でも安心して自分のペースで取り組める**」ことが挙げられております。
- また、研修内容を実践に活かしていない者はいずれも、「**授業の検討や指導の時間が取れない**」と回答しており、**多忙な教員でも授業に取り入れやすい事例を分かりやすく伝える取組が必要**と考えられます。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）



■ 今後の研修に対する意見・要望

- ・ デジタル教科書のより詳細な機能（子供たちの取組状況の記録は可能か等）や活用事例について知りたい。
- ・ デジタル教科書の最初の設定方法や活用例を各校に周知してほしい。

※ 調査対象：研修受講者（小学校・中学校教員） 有効回答数：14 調査期間：研修の4か月後（令和7年12月22日～令和8年1月9日）

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.1.3. 研修改善（第1回）

- 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振返りを行い、「研修の成果につながった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。



成果と課題

今後の研修に向けた取組

研修の成果に繋がった点

教科書発行者から具体的な機能とそのねらいを学び、意見交換をしたこと

- ・ 教科書発行者からは「デジタル教科書とは何か」という前提から講義がなされ、全体像を掴んだ上で、デジタル教科書の機能を学んだり、活用の議論をしたりできた。
- ・ 教科書発行者1名に対し少人数の教員で実際にデジタル教科書进行操作したため、デジタル教科書に関する疑問が解消しやすい環境であった。
- ・ 講義を踏まえて教員や発行者を交えてデジタル教科書の活用アイデアを出し合うことで、個人では出てこないような応用的な活用方法を見つけることができた。

今後の研修においても、教科書発行者が協議に参加するなど、機能・操作面に関する疑問がすぐに解消される環境を準備する。

理論と具体的な活用方法の両軸を押さえる研修構成だったこと

- ・ 研修の最初と最後に講義が行われ、最初の講義では、これからの授業づくりの方向性が理論的に示され、それを踏まえてグループ協議がなされた。最後の講義では、総括としてグループ協議の価値付けと、英語科の教科の特性に関する理論的な解説がなされた。
- ・ 目指す授業の方向性とその具体的な方法を交互に考えられる研修の構成であったため、はじめてデジタル教科書进行操作する受講者も、研修後には活用の見通しをもつことができた。

今後の研修においても、これからの授業づくりの方向性や、研修で取り上げる教科の特性に関する理論的なインプットを取り入れる。

課題

機能に注目が集まり、活用目的に関する議論が欠ける場面もあったこと

- ・ 本研修の序盤は、デジタル教科書の機能のインプットが主なテーマとなっており、そこからの切替が難しく、機能を授業や単元の中で、どのような児童生徒の姿を目指してどのように活用するかまで議論が及ばないケースも見られた。

デジタル教科書を活用した授業の検討には、機能等を知るだけでなく、授業づくりや教科の学びに関する理解が必要であることを、メッセージとして訴求する。

研修担当者の声（本研修の振返り）

受講者にはデジタル教科書の活用をしていない者もあり、機能を知ることによって時間を要してしまい、活用方法にまで話が進まない様子でした。そのため、急遽協議の時間を延長したことで、授業の中でどう使うかという建設的な議論に進むことができました。研修後のフォローとして、「個別最適な学び」と「協働的な学びの一体的な充実」の実現に向けたデジタル教科書の活用につながるよう伴走支援していきたいです。（埼玉県 秋元 指導主事）



3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.1.4. 研修改善（第2回）



- 2回目の実証対象とした研修の概要は以下のとおりです。



研修の概要

研修のポイント

- ✓ 受講者が、段階的にデジタル教科書の活用への理解を深められるよう、本研修を**昨年度**からの継続研修と位置付け、同じ対象に研修を実施する。
- ✓ 各受講者の多様な活用を参考に単元検討がなされるよう、**事前課題**として、各受講者はデジタル教科書を用いた実践結果を整理して持ち寄る。
- ✓ 受講者間で共通する現状・課題を基に単元検討が進められるよう、**学校種別のグループ**に分ける。

研修の対象者：三芳町内小中学校外国語教諭 16名

実施方式：参集

目的

① 知識・理念等の理解

② スキル・技能等の習得

③ 意識・行動等の変容

目標

・ 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に繋げるためのデジタル教科書の活用方法を理解できる。

・ 単元ゴールや各授業のめあてに向けて、子供自身がデジタル教科書を含めた学び方を選択できるような授業の計画を立てることができる。

・ 作成した計画を基に、子供自身が学び方を選択できるような授業を実際に行うことができる。

内容

研修前の取組 各自の実践結果の整理

ワークショップ グループ協議（実践結果の共有）

レクチャー 代表教員の発表（活用ポイントの理解）

ワークショップ グループ協議（単元計画の作成）

レクチャー 有識者の講義（研修全体の総括）

研修後の取組 受講者による授業実践（公開授業）

3. 各実証県における研修改善の取組

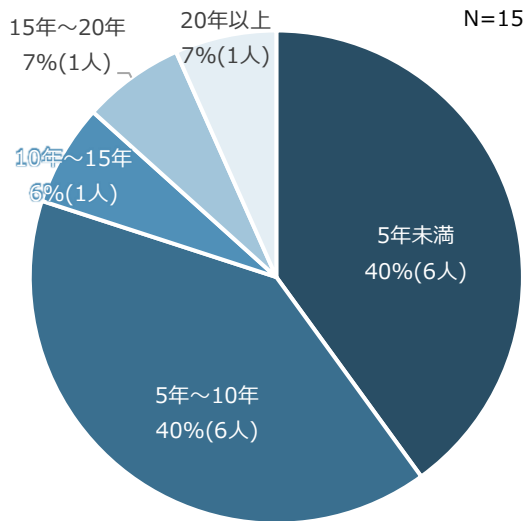
3.1. 埼玉県教育局

3.1.4. 研修改善（第2回）

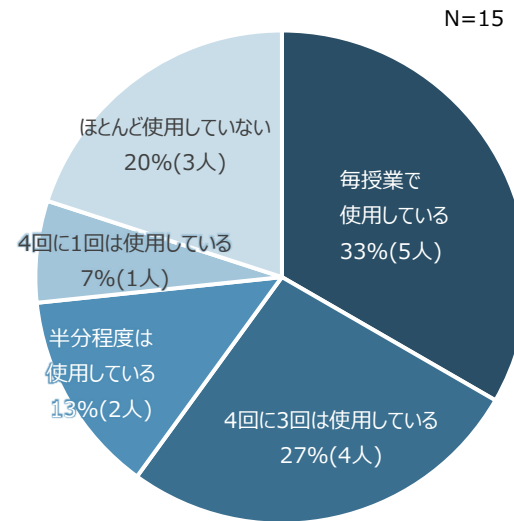


- 本研修の受講者の傾向※は、以下のとおりです。
- 昨年度と同じ自治体・同じ受講者へのアンケート結果と比較すると、デジタル教科書を活用した授業の頻度は、「2回に1回以上」と回答した者が7割を超え、5割弱だった昨年度から増加しています。
- 受講者には未だ一斉指導の思考も根強いという課題意識のとおり、個別最適な学び（子供が自身にあった方法を選択して学習を進める授業）の実施状況は、「よく行っている」と回答した人数に変化が見られませんでした。

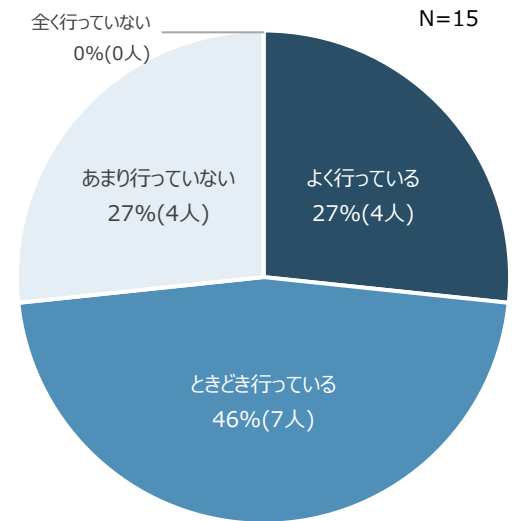
教職経験年数



デジタル教科書の活用頻度



個別最適な学びの実施状況



※ この傾向は受講後アンケート結果に基づくものであり、実際を受講者数と有効回答数が異なる。また、昨年度を受講後アンケートより回答者が増加していることに留意。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.1.4. 研修改善（第2回）



- 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

研修前の取組 各自の実践結果の整理

振り返り、昨年度からの継続研修として位置付けられ、昨年度研修以降の受講者の実践結果を整理した。

ワークショップ グループ協議（実践結果の共有）



グループごとに、各受講者の実践結果を基に意見交換を行った後、その内容を数グループが全体に発表した。

■グループの編成方法

学校種ごとに、3～5人でグループを編成。「研修前の取組」で把握したデジタル教科書を積極的に活用している受講者をグループに1名ずつ配置し、議論をリードする役割を担当させた。

レクチャー 代表教員の発表（活用ポイントの理解）



先進的な活用を行う受講者1名に授業実践の様子を撮影してもらい、活用のポイントを字幕等で補足する動画を作成してもらった。研修では、同受講者の解説を交えながら実践動画を視聴した。視聴後、有識者が実践動画のポイントについてコメントした。

■有識者の主なコメント内容

- ・実践動画の授業が「個別最適な学び」を体現したものだ」と価値づけ。その上で「本文の内容理解に協働学習も取り入れる」など、外国語の観点で更なる改善点を提示。
- ・受講者が授業実践例から自分自身の授業に繋げるための考え方を紹介（右図）。

次頁に続く

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- ・昨年度研修に使用したワークシートと同じフォーマット（次々頁参照）を使用し、各受講者が、研修以降の実践結果を、「外国語の4技能」ごとに整理して記載した。

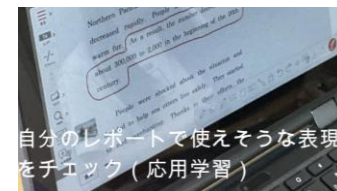
- ・「デジタル教科書への書き込みは、学習の履歴を残す意味で便利である。プリントだとすぐ無くしてしまう。」
「文法の解説動画は振り返りにも有効である。実際に、1回の説明で理解しきれなかった子供が、後から繰り返し動画を見ている。」等の発言があった。
実際の活用に基づいたリアルな意見交換となり、受講者間で互いに共感し合う姿が見られた。



▲各自のこれまでの実践をデジタル教科書とあわせて紹介

- ・協議の進め方は定めず、自由な意見交換の時間としていたため、議論が停滞しそうなグループには、研修運営者（指導主事）が適宜介入し、議論を活性化させた。

- ・実践動画は授業の流れに沿って進み、子供たちがデジタル教科書を活用して学習する様子を拡大しながら字幕で示す動画になっており、受講者も注視していた。

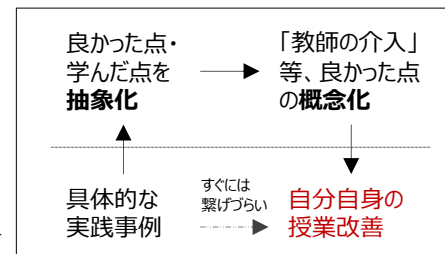


自分のレポートで使えるような表現をチェック（応用学習）

▲授業動画の一部

- ・有識者が、右下図を基に、「具体的な実践事例から、活用のポイントを抽象化・概念化しながら自分自身の授業改善に繋げると良い。」と説明。受講者のメモ・頷きが多く、**研修の前半で共有された事例を受講者自身の授業改善に繋げるために必要な考え方として強く訴求していた。**

有識者が提示した図のイメージ▶



3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.1.4. 研修改善（第2回）



■（前頁の続き）

研修の流れ

ワークショップ グループ協議（単元計画の作成） 60分

グループごとに、「デジタル教科書単元活用シート（右図）」を使い、デジタル教科書の活用を組み込んだ単元計画を検討した。

■ 単元計画の検討の流れ

- ① 単元及び目標は、研修運営者側であらかじめ指定。
- ② 指定された単元目標の達成に向け、各時間の内容を検討。
- ③ 各時間の中で、個別最適な学び／協働的な学びの視点から、どのようにデジタル教科書の活用ができるかを検討。
- ④ グループでの検討結果を、全体に向けて発表。

■ 指定した単元の目標

小学校：行きたい国とそこでしたいことを伝えよう
 中学校：留学生に安心して日本でホームステイをしてもらうために大切なことを動画で伝えよう

レクチャー 有識者の講義（研修全体の総括） 25分

有識者が、本研修内容を振り返りながら、今後の更なる活用促進に向けたポイントを説明した。

- ① 「語彙・文法の説明」→「練習」→「言語活動」という積み上げ式の学習と、単元や授業を貫くタスクを与え、学習者がそのタスクを通して実際に言語を使いながら習得していく学習の違いを紹介。後者の学習において、デジタル教科書は学習者自身が必要な言語を自分のペースで取り入れるためのツールとなることを解説。
- ② 子供たちが主体的に学習を進める上での教師の役割を、ステップに沿って説明（ステップの内容は第1回研修 p.19を参照）。

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- **単元や単元目標をあらかじめ指定したこと**で、「単元目標の達成に向け、個別最適な学び／協働的な学びの視点から、どのようにデジタル教科書が活用できるか」という**本質的な議論に時間を割くことができた。**
- 「行きたい国が思いつかない児童のために、国がランダムで表示されるデジタルルーレットを使うのも一案」等、**実際の子供たちの反応を想像しながら効果的な活用に関する検討がされていた。**
- **研修の目標である「単元全体を見据えた授業づくり」の検討には及ばず、授業の一部の活動で「児童生徒による外国語の練習」を行うためのツールとしてデジタル教科書を導入するという議論に留まっているように見られた。**

デジタル教科書単元活用シート 学校名・名前

単元名 How can we save animals?

単元の目標 地域のおそれがある動物の現状を知り、それをALTに伝えるために、絶滅危惧種について調べたり、守るために大切なこと必要なこと、自分たちができることについてまとめたレポートを作成。

単元の計画

1	ALTのプレゼンテーション	単元について理解する
2	本文理解 + 自分の考え	
3	本文理解 + 自分の考え	
4	本文理解 + 自分の考え	
5	本文理解 + 自分の考え	
6	レポート内容作り	
7	グループ発表	
8	全体で共有	

個別最適な学び	協働的な学び
<ul style="list-style-type: none"> ・新出単語・本文の内容理解 ・個別で時間を取り、デジタル教科書を活用してそれぞれで学習を行う。 ・本文の理解・自分の考えの整理 ・デジタル教科書を使い、わからないところにチェックをして読む。また、発展的な課題として印象に残ったところや自分のレポートに必要なところに線をひいたり、自分のコメントを入れる。 ・発展的な学習および学習支援 ・早く終わってしまった子への次の手立てや、課題で行き詰った生徒への手立てを子供が取りに行けるようにする ・レポート内容の調べ作業 ・レポート作成時の単語調べ 	<ul style="list-style-type: none"> ・内容の確認（ペア） ・一定時間後、ペアで内容確認 ・4人グループでの作業 ・個人作業中にわからないところは聞きやすいよう協働的な学びの隊形を作る ・考えの共有（ICTツール） ・自分の考えをまとめたものをオクリンクで提出する。お互いの考えを見られるようにする。 ・グループ発表 ・レポートのたたき台ができたところでグループで共有し、お互いにアドバイスを行う。

▲実際に用いられた単元活用シート
赤字がデジタル教科書の活用場面

- 前段のワークショップで受講者の多くが「積み上げ式の学習」を前提に検討していたため、「タスクを通して言語を習得する学習」への転換を促す左記①の講義は、受講者の印象に残りやすく、メモが多く取られていた。
- 左記②のように、有識者がステップごとに求められる教師の役割が異なることについて説明した際に、受講者の頷き・メモが多かった。「教師と子供が共に操作をなぞる」段階から「教師も介入しつつデジタル教科書の使用を子供に委ねる」段階へステップアップした事例も紹介しており、段階を踏んだアプローチの重要性について受講者に訴求したと考えられる。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.1.4. 研修改善（第2回）



- 事前課題として、実際に各受講者が整理した実践結果の例（中学校）を以下に示します。

実際に作成された実践結果の例（中学校）

聞くこと

【使う場面】

- 本文の内容理解および本文に関する問題に取り組む場面

【デジタル教科書を中心としたICT活用のポイント】

- 自分のペースで、聞きづらいもしくは難しい箇所を何度もリピート再生する。
- 教科書本文の導入動画を見て、単元のテーマと学習する文法等を理解する。

読むこと

【使う場面】

- キーセンテンスや言語材料をチェックし、内容を理解する場面

【デジタル教科書を中心としたICT活用のポイント】

- 本文に関する問題の答えの根拠となる箇所へのアンダーラインやチェックをする。

話すこと

【使う場面】

- 本文等の対話文を用いたロールプレイ練習をする場面

【デジタル教科書を中心としたICT活用のポイント】

- 会話文本文の音声を再生する時に、ロールプレイモードにして行うことで、生徒自身が役になりきりながら会話練習を行う。

書くこと

【使う場面】

- 自分の考え等を書く場面

【デジタル教科書を中心としたICT活用のポイント】

- 自分の考え等を書く際に参考になる表現に書き込み機能を用いて下線を引く。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.1.4. 研修改善（第2回）



- 研修から約2か月後、受講者の一部が授業実践を行いました。
本実証研究では、そのうち中学校教諭による外国語の授業の様子を、研修の成果が現れているかという観点で観察しました。

授業の流れ

授業観察の結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

1 ペアでスモールトークを行い、話した内容を振り返り

- ① 「あなたが影響を受けた人物」という話題に沿って、ペアで英語の会話を3回行う。途中で中間指導を入れて、使える表現の共有を図る。
- ② 生徒が自分の話した内容を英語でノートに記録し、使える表現や言いかけた表現、友達の話した内容等をまとめる。

2 ジグソー法を活用し、教科書本文の内容を理解

- ① 前時までの本文内容、単元及び本時の目標を全体で再確認する。
- ② 本文で読み取るべき4つの内容（ガンディーの活動内容や当時のインドの時代背景等）について、グループで各生徒が担当する内容を決定し、各自で教科書本文を読み取る。（ジグソー法）
生徒は読解の際にデジタル教科書を使用し、各自のペースで新出単語やキーセンテンス等を確認しながら読み進める。
- ③ 生徒は担当箇所の概要や重要だと思った箇所、本文に対して考えたことなどをグループで伝え合う。また、本文全体を貫く問いに対する自分の考えもグループ・全体で共有する。
- ④ 本時の取組に関して、振り返りを記入する。

- 研修の成果・課題を踏まえて、事前に関係者間で協議し設定した以下の2つの観点から授業観察を行った。

1. 「指導の個別化」「学習の個性化」がされているか。

- ✓ 左記1-②や2-②の場面を中心に、生徒が自分のペースで学習を進めていた。
- ✓ 特に2-②のデジタル教科書を活用した教科書本文の読解を行う場面では、本文にマーカーやスラッシュを書き込んで意味を取りながら読み進める生徒や、音読の際にも使用するカラオケ機能（読み上げられている本文の箇所が赤く表示される機能）を活用して読んでいる生徒が見られた。
- ✓ 授業者による指導も、生徒の活動を見取りながら、書き込み機能の活用や、日本語訳を使うタイミングなどの声掛けを行っていた。

2. デジタル教科書は、生徒の資質能力の育成にどのように寄与しているか。

- ✓ ジグソー法も組み合わせ、生徒が各自で上記のようなデジタル教科書の機能を活用しながら本文を自分のペースで読む時間が十分に確保されたことで、多くの生徒が自身の担当箇所に関して理解を深め、自信をもってグループで発表している様子だった。
- ✓ 生徒からは多様な意見が発表され、協働的な学びが活性化していた。個々の生徒が本文で気になる箇所を集中的に読む機会があったからだと考えられる。
- 以上のように、**個別最適な学びや協働的な学びにデジタル教科書が寄与している様子が多く見られ**、研修で意見交換されていた内容の反映が見られた。
- 単元構成自体は積み上げ式で進む内容であったものの、本時全体の構成は、本時で与えられたタスク（本文から読み取る必要がある内容）に対して、生徒が個々で学習手段を選択しながら主体的に学びを進める内容であり、**有識者の講義内容の反映**が見られた。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.1.4. 研修改善（第2回）



- 受講後アンケートでは、満足度・理解度・活用に関する意識について自己評価を求めたところ、いずれの項目についても全受講者から肯定的な回答が得られました。
- また、各項目について自由記述での意見を求めたところ、「今後の授業での活用イメージが深まった」「子供に学びを委ねる授業づくりを進めていきたい」といった意見が多く挙げられました。

事後アンケート結果

研修の満足度 100%が満足	研修の理解度 100%が理解	活用に関する意識 100%が意欲向上
<p>満足度に関する自由記述（抜粋）</p> <p><他の教員の実践から具体的に学んだ></p> <ul style="list-style-type: none">グループ協議や事例動画の視聴を通じて、他校の実践を具体的に知ることができて良かった。参加者間でデジタル教科書の活用アイデアを共有しながら単元検討し、刺激を受けた。 <p><今後の授業での活用イメージが深まった></p> <ul style="list-style-type: none">デジタル教科書の機能を知ることができた。また、その中に、授業の中に取り入れたいと思えるものが見つかった。デジタル教科書を実際に使いながら学ぶことができた。今回知ったことを、早速2学期の最初の授業から使えそうと思った。グループワークで作成した単元計画は、夏休み明けの授業で使えそうである。	<p>理解度に関する自由記述（抜粋）</p> <p><個別最適な学びや協働的な学びとの関連></p> <ul style="list-style-type: none">有識者の講義から、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることが重要であると理解し、デジタル教科書を使用することで子供たちへの個別最適化に繋がることを理解した。有識者の講義を聞いて、「指導の個別化」と「学習の個性化」のためにICTを活用することが、子供たちの「自己調整学習」に繋がることを理解した。 <p><英語科の教科特有の理論></p> <ul style="list-style-type: none">有識者の講義で、新出単語は、単語単体ではなく、文章の中で文脈を通して学ぶことで、長期的に定着することが分かった。授業に早速取り入れたい。	<p>今後の活用に関する自由記述（抜粋）</p> <p><子供に学びを委ねる授業づくり></p> <ul style="list-style-type: none">「機能を知る」「操作をなぞる」「限定して委ねる」「ほとんど委ねる」のステップに沿って、デジタル教科書を活用していきたい。自分の授業では、まだデジタル教科書を活用できていない。デジタル教科書を授業に導入する際には、授業規律を保つために、まずは子供がデジタル教科書を操作する時間としない時間のメリハリをつけたい。その上で、徐々に子供に自由に学び方を選んでもらうようにし、学びを委ねていきたい。 <p><デジタル教科書の応用的な活用></p> <ul style="list-style-type: none">英語のみでなく、他の教科でも活用したい。今回研修では取り上げられなかった機能も確認し、より効果的な活用方法を考えたい。デジタル教科書を他のツールと組み合わせ活用したい。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.1.4. 研修改善（第2回）



- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、**全ての回答者が研修内容を活かしている**と回答しています。
- 実践の内容としては、音読練習など**個別最適な学びでの活用**や、**単元末の発表活動に向けた活用**が挙げられています。デジタル教科書等の効果としては、子供たちが自分のペースで学習を行い、考えを共有できることが感じられていました。
- 今後の研修に対する意見として、研修中では受講者による活用方法の検討がメインだったため、**実際の先進的な活用事例を用いた研修**を希望する声がありました。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

実践での研修内容の活用

100%が活かしている

デジタル教科書やICTツールの活用方法（抜粋）

<子供たちによる個別最適な学びで活用>

- 本文を読む際に、デジタル教科書を使って新出単語の意味や発音について生徒が調べている。
- リスニングやスピーキングの練習、単語練習ツール等を生徒が使用している。

<単元末の発表活動に向けて使用>

- デジタル教科書のイラストを単元末の発表のスライドなどで活用している。
- 単元末の発表に向けた各時間の振り返りの記入や、動画撮影にタブレットを使用している。

デジタル教科書やICTツールの活用による効果（抜粋）

<子供たちが繰り返し学習を行うことができる>

- 児童が自分のペースで、自分に必要なだけ音声を何度も視聴できる点が良い。
- 新しい単語・表現等を繰り返し練習することができる。

<考えを共有することができる>

- 友達や教師と自分の考えや困りごとを共有することができる。

デジタル教科書やICTツールの活用に関する課題（抜粋）

<デジタル教科書の使用範囲が限定的>

- 例えば6年生の児童でも5年生の教科書が利用できるようになれば、より自分に必要な学習を選択しやすくなると思う。
- 学校でタブレットの持ち帰りが禁止されているため、家庭学習で利用できない。

■ 今後の研修に対する意見・要望

- デジタル教科書やICTツールを使った具体的な活用事例を知りたい。
- 実際の活用事例（人気なものがあればなおさら）を用いた研修をお願いしたい。

※ 調査対象：研修受講者（小学校・中学校教員） 有効回答数：13 調査期間：研修の4か月後（令和7年12月22日～令和8年1月9日）

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.1.4. 研修改善（第2回）



- 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振り返りを行い、「研修の成果につながった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。

成果と課題

今後の研修に向けた取組

研修の成果に繋がった点

継続して同じ対象者に研修を行い、 研修での学びの段階的実践を求めて定着を図ったこと

- ・ 受講者は前回研修において、デジタル教科書の授業での活用プランをまとめており、本研修の事前課題も同じフォーマットで前回研修以降の取組を整理したことで、研修間の継続性が意識された。
- ・ 実際に自身の授業で活用した状態で意見交換を行ったため、受講者の前提が揃い、「想定される授業内での子供たちの反応」など、具体的な議論が深まっていた。

三芳町の2年間の研修を先行事例として、今後、埼玉県内の他の市町村に対しても横展開を図る。

受講者の事例からポイントを抽象化・概念化したことで、 受講者自身の授業改善に繋がられたこと

- ・ 研修の前半では受講者同士の意見交換や代表教員による事例紹介を通して、豊富なデジタル教科書の活用事例が受講者に共有された。
- ・ その上で、有識者の講義を通して事例のポイントが「抽象化」「概念化」されたことで、受講者が自身の授業に落とし込んで考えやすい研修の流れとなっていた。

今後の研修においても、事例紹介や有識者の講義などのインプットの時間と受講者自身が実践を行うアウトプットの時間を設ける。

課題

単元全体を見据えた授業づくりの検討には及ばない側面もあったこと

- ・ 本研修は単元計画から検討する点が特徴だったが、「一斉指導型からの転換」や「単元全体の流れを意識した授業検討」という研修のねらいには一步及ばず、従来どおりの「積み上げ式」の学習の中でデジタル教科書をどのように活用するかを検討に留まっている受講者も見られた。

一斉指導型からの転換や、外国語教育に関する教員の意識改革を広げるため、今後の同様の研修では、有識者から上記の視点でのアドバイスを頂いた後に、もう一度単元計画を検討する時間を設ける。

研修担当者の声（本研修の振り返り）

受講者は既にデジタル教科書の操作に慣れており、普段の授業でも活用していました。その上で、デジタル教科書の活用についてグループ協議を行ったため、学びのある協議を行うことができました。今後は、さらなる外国語教育の改革の視点を加えていきたいです。（埼玉県 山井 指導主事）



3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.1.5. 総括

- 埼玉県教育局での実証を通じて得られた「研修改善のポイント」と、実証を踏まえた「今後の取組」は以下のとおりです。

埼玉県教育局における研修改善の取組の総括

研修改善のポイント

研修改善 (1回目)

教科書発行者から具体的な機能とそのねらいを学び、意見交換をしたこと → 参考：p.19

- ・ 受講者は、教科書発行者からデジタル教科書の機能を紹介されながら操作したため、受講者の知らない機能についても知ることができた。グループ協議では、発行者を交えてデジタル教科書の活用アイデアを出し合うことで、機能に関する疑問がその場で解消され、応用的な活用方法を見つけることができた。

理論と具体的な活用方法の両軸を押さえる研修構成だったこと → 参考：p.19、p.20

- ・ 「これからの授業づくりの方向性に関する講義」→「グループ協議」→「英語科の教科の特性に関する講義」という流れで、目指す授業の方向性とその具体的な方法を交互に考えられたため、はじめてデジタル教科書を操作する受講者も、研修後には活用の見通しをもつことができた。

研修改善 (2回目)

継続して同じ対象者に研修を行い、研修での学びの段階的実践を求めて定着を図ったこと

→ 参考：p.27

- ・ 受講者が前回の研修以降に、自身の授業でデジタル教科書を活用し、各自の活用経験を踏まえて意見交換を行ったため、受講者の前提が揃い、「想定される授業内での子供たちの反応」など、具体的な議論が深まっていた。

受講者の事例からポイントを抽象化・概念化したことで、受講者自身の授業改善に繋がったこと

→ 参考：p.27、p.28

- ・ 研修の前半では受講者同士の意見交換や代表教員による事例紹介を通して、豊富なデジタル教科書の活用事例が受講者に共有された。その上で、有識者の講義を通して事例のポイントが「抽象化」「概念化」されたことで、受講者が自身の授業に落とし込んで考えやすい研修の流れとなっていた。

実証成果を踏まえた 県における今後の取組

- ・ 北本市（第1回研修）はデジタル教科書の機能を知る段階としての研修、三芳町（第2回研修）は一部の場面で学習者に学びを委ねる段階としての研修でした。それぞれの自治体の状況に合った研修ができたため、これらの研修が今後の授業実践につながると考えます。今年度の2回の研修事例を埼玉県全体に展開していきたいと考えています。（埼玉県 添野 指導主事）
- ・ デジタル教科書の具体的な活用場面について意見交換をするなど、有効な研修の在り方について検討し実施することができたと考えています。本研修の成果について、県内に展開し、他の市町村でも実施可能であることを伝えていきたいです。（埼玉県 杉崎 指導主事）

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.2. 福井県教育庁

3.3. 奈良県教育委員会

3.4. 熊本県教育庁

3.5. 鹿児島県教育庁



3. 各実証県における研修改善の取組

3.2. 福井県教育庁

3.2.1. 基本情報

- 実証研究にご協力いただいた福井県教育庁に関する基本情報、実証前の課題認識は以下のとおりです。

県担当部署	福井県教育庁 教育政策課 教育DX推進室		
県担当者	村井 信吾 指導主事	担当有識者	神戸大学 岡部 恭幸 教授
県における 過年度の取組	<ul style="list-style-type: none">・ 令和5、6年度に、県内のモデル校にデジタル教科書を配布し、デジタル教科書等の効果的な活用に関する研究を推進。具体的には、各モデル校においてデジタル教科書を活用した授業を公開し、研究協議を実施。また、一部のモデル校によっては、県の指導主事が、授業づくりの段階から支援。このほか、モデル校同士を参集した研修会や、モデル校とその近隣校による情報交換会も実施。		

実証前の 課題認識



学校・教員

- **デジタル教科書の必要性が浸透していない**
 - ・ デジタル教科書の紙に対する有用性を実感できる機会が少なく、「紙の教科書のPDF版」という意識がある。
 - ・ 児童生徒の深い学びにつながるデジタル教科書の効果的な活用について具体的な姿でイメージすることが難しい
- **ICTの活用自体が目的化している**
 - ・ 「何のために使うのか」が明確になっていないこともあり、「活動あって学びなし」となっていることがある。

教育委員会・指導主事

- **経験が不足しており指導助言に課題を感じている**
 - ・ デジタル教科書を使った授業を行ったことが無い指導主事も多いため、現場に対して、どのように効果や必要性を伝えていくと良いかという点に課題を持っている。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.2. 福井県教育庁

3.2.2. 年間計画

- 福井県教育庁における、令和7年度のデジタル教科書の活用に関する研修計画は以下のとおりです。このうち、本事業では、「第1回研修」と「第2回研修」を研修改善に関する実証対象としました。

	対象	概要
事前研修	<ul style="list-style-type: none">小中学校教員12人 (視聴覚主任)	<ul style="list-style-type: none">「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」や「主体的・対話的で深い学びの実現」に向け、ICT活用の必要性や効果について、福井県・越前町教委の指導主事から説明。各受講者が、ICT活用に係る実践事例を持ち寄り、ICT活用に関する現状や課題などについて情報交換。
第1回研修 実証対象：p.38	<ul style="list-style-type: none">小中学校教員26名 (研究主任・視聴覚主任)	<ul style="list-style-type: none">デジタル教科書の意義や目指す姿・育てたい資質能力の育成に向けた活用方法の理解を目的に、模擬授業、有識者の講義、グループ協議を実施。具体的には、模擬授業によりデジタル教科書等の活用イメージを醸成し、有識者の講義によりデジタル教科書の必要性や授業づくりの要点を理解。その後、グループごとに研修後の取組の方向性について検討。
第2回研修 実証対象：p.45	<ul style="list-style-type: none">小中学校教員13名 (視聴覚主任)	<ul style="list-style-type: none">“目指す子供の学びの姿”の達成に向けたICT活用の理解を目的に、受講者間の実践共有、グループ協議、パネルディスカッションを実施。研修課題として、各受講者が第1回研修後のICT活用に係る実践報告を作成。研修では、グループごとにその実践共有を行いながら、“目指す子供の学びの姿”の達成に向けたICT活用について検討した後、パネルディスカッションにより、研修や実践を通じて感じた課題や疑問を解消した。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.2. 福井県教育庁

3.2.3. 研修改善（第1回）



- 1回目の実証対象とした研修の概要は以下のとおりです。



研修の概要

研修のポイント

- ✓ 研修対象地域内の全ての学校に、効果的な活用促進が図れるよう、各校で中核を担う研究主任・視聴覚主任を主な対象とする。
- ✓ 各受講者が、授業における活用イメージを持てるよう、デジタル教科書等を活用した模擬授業を実施する。
- ✓ 研修以降も、受講者間で情報交換ができるよう、学習支援ソフトを活用し、情報交換のためのプラットフォームを準備する。

対象者：越前町内の小中学校の研究主任・視聴覚主任 26名

実施方式：参集

目的

① 知識・理念等の理解

② スキル・技能等の習得

③ 意識・行動等の変容

目標

・ 目指すべき授業の在り方や、その実現に向けたデジタル教科書等の意義を理解できる。

・ 模擬授業や講義を通じて、自身の実践に向けた活用イメージをもつことができる。

・ 研修での学びや研修後の受講者間での情報交換を通じて、実践への意欲を高める。

内容

ワークショップ 模擬授業（活用による効果の体感）

レクチャー 有識者の講義（授業づくりの要点の理解）

ワークショップ グループ協議（今後の取組の明確化）

研修後の取組 実践に向けたオンライン上での情報交換

3. 各実証県における研修改善の取組

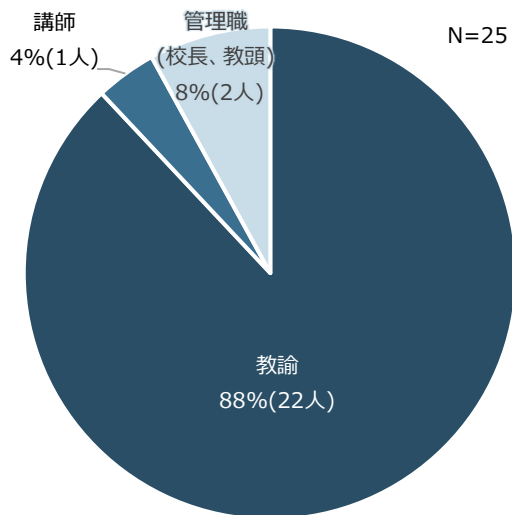
3.2. 福井県教育庁

3.2.3. 研修改善（第1回）

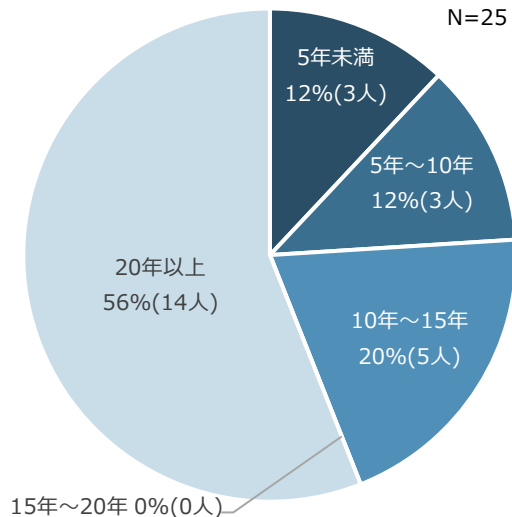


- 本研修の受講者の傾向※は、以下のとおりです。
- 本研修受講者の役職は、「教諭」が約9割を占めています。また、各校で研究推進の中核を担う研究主任・視聴覚主任を主な対象としたため、教職経験年数は「20年以上」が過半数となっています。
- デジタル教科書の活用頻度は、デジタル教科書が配布されている受講者の半数が「ほとんど使用していない」と回答しており、活用の意義や必要性が浸透していない状況であったと考えられます。

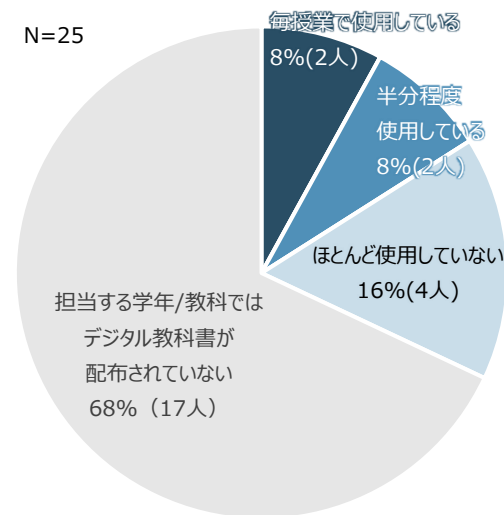
役職



教職経験年数



デジタル教科書の活用頻度



※ この傾向は受講後アンケート結果に基づくものであり、実際の受講者数と有効回答数が異なる。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.2. 福井県教育庁

3.2.3. 研修改善（第1回）



- 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

ワークショップ 模擬授業（活用による効果の体感） 40分

指導主事が、デジタル教科書と学習支援ソフトを活用した模擬授業を実施した後、授業構想時の生成AIの活用法について紹介した。

■ 主な内容

前半：模擬授業（題材：小学校第4学年算数「台形と平行四辺形」）

- ① **学習者の立場**：デジタル教科書の図形をランダムに並べたデジタルワークシートを使い、各自が自由に仲間分けを検討。その後、各受講者の考えを基に全体で仲間分けの方法について議論。
- ② **教員の立場**：各受講者の仲間分けの考え方を予想した後、それらをどのように授業に繋げていくと良いかを議論。

後半：生成AIを活用した授業づくり

- ・ 授業づくりに悩む教員に向けた1つの検討手法として、生成AIに参考となる授業案を作成させ、検討する手法を紹介。
- ・ あわせて、生成AIはあくまで補助的なものであり、**子供の実態や目指す姿にあわせてカスタマイズが必要**であることを説明。

レクチャー 有識者の講義（授業づくりの要点の理解） 50分

デジタル教科書等の意義を説明した後、好事例を題材に、子供たちの学習の様子に着目しながら効果的な活用方法を解説した。

■ 主な講義内容

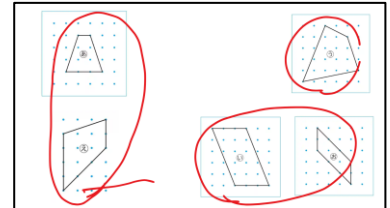
前半：「見方・考え方を動かせるデジタル教科書等の活用

- ・ 授業づくりに当たり、教科の「見方・考え方」や育成したい資質・能力を明確にした上で、その達成に向けたデジタル教科書等の活用を検討することが重要であると説明。

次頁に続く

研修の様子（青字は成果に繋がる内容）

- ・ 受講者がワークシートにより試行錯誤する際に、「図形を自由に動かせるため、子供たちが試行錯誤しやすい。多様な発想が生まれそう。」「便利だが操作に慣れる必要がある。」等の発言があり、**学習者の立場になってデジタル教科書等の効果や使用感を実感**している様子であった。



▲受講者がワークシートで試行錯誤する様子

- ・ 全体で仲間分けの考え方を議論する場面では、指導主事が、「あらかじめ、着目すべき点や考え方を提示すると、正解か否かの構図となり学び合いが生まれにくい。正解か否かではなく、**子供たちの自由な発想を重視しながら授業を進めることで、子供たち同士の対話を生み、学び合いを引き出せる。**」と説明。受講者の頷きが多かった。

■ 生成AIを指導主事に見立てた例

«指示文»

あなたは小学校算数の指導主事です。添付の授業案について指導助言してください。指導助言の観点は小学校学習指導要領の算数です。教科書はXX社を使用します。 PDF 授業案

▲生成AIの活用例を紹介

- ・ 特に以下の説明時に受講者のメモや頷きが多く、理解を深めたと考えられる。
 - 「目的無くデジタルツールを取り入れても、従来どおりの一斉授業や個別最適”風”の放任授業が増長される恐れがある。**まずは、教科の見方・考え方を十分に動かせるような授業づくりをし、その上でデジタルツールを取り入れていくことが重要である。**」
 - 「特に学習が苦手な子供にとって、参考となる他者の考えがあると、それらを基に自分の考えを補強することができる。また、**その場面において、デジタルツールは、容易に子供たちの考えを全体に共有することができるため、効果的である。**」

3. 各実証県における研修改善の取組

3.2. 福井県教育庁

3.2.3. 研修改善（第1回）



■（前頁の続き）

研修の流れ

レクチャー

有識者の講義（授業づくりの要点の理解）



35分

後半：好事例を基にデジタル教科書等の活用を解説

- 過年度事業の好事例を基に授業場面に沿って活用方法を解説。その際、デジタル教科書等の活用方法だけでなく、**各場面での子供の思考や言動に着目し**、どう理解が促されたかを説明。

「解説した事例」

- ① 名寄市立名寄小学校（R5年度、算数）
- ② 甲州市立塩山南小学校（R6年度、算数）
- ③ 所沢市立山口中学校（R6年度、数学）

ワークショップ

グループ協議（今後の取組の明確化）



35分

グループごとに、「2学期以降のICTを活用した授業づくり」について模擬授業や講義を踏まえて意見交換した後、研修全体を振り返った。

■グループ協議の実施方法

- 各校の状況に基づいた協議ができるよう、学校ごとに2～4人のグループを編成。
- グループで「2学期以降のICTを活用した授業づくり」について意見交換し、その内容を、学習支援ソフトにより作成した**情報交換用プラットフォーム**上に入力。
- 意見交換後、各自で本研修の振り返りを同プラットフォーム上に入力。

研修後の取組

実践に向けたオンライン上での情報交換

研修後、**情報交換用プラットフォーム**上で、授業実践に関する情報提供や指導主事による実践のサポートを実施。

研修の様子（青字は成果に繋がる内容）

- 事例解説は、**学習が苦手な子供にフォーカス**。有識者が「この子は、最初は分からなかったが、他者との交流を通じてヒントを得て、自分なりにデジタル教科書や学習支援ソフトを振り返りながら答えにたどり着いた。」と説明し、受講者のメモや頷きが多かった。**子供の思考・言動の変化に着目しながら活用を解説したことで**、受講者の納得感を伴った理解を引き出していたと考えられる。
- 有識者が、先行事例における授業者の声を引用しながら「子供たちが、自分一人の力だけでなく、他者との学び合いを通じて理解を深めていく姿勢を評価すると良い。」と説明。メモや頷く受講者が多く、理解を深めていた。

- 「デジタル教科書をキャプチャして使うことは便利だが、子供の操作スキルが不足している。まずは慣れるところから始めていきたい。」「校内の教員間で、ICT活用に関する話し合いの場がもっとあると良い。」等、活用方法だけでなく校内での普及促進についての議論が及び**各校の状況を踏まえた意見交換となっていた**。



▲指導主事も参加し、議論を活性化

- 「まずは、課題設定を工夫し、子供たちの多様な考えを引き出したい。その上で、ICTにより共有・比較しながら理解を深めていけるような授業設計にしたい。」等の意見が多く出された。特に**全体共有・他者参照の場面でのデジタル教科書等の有効性が理解された**と考えられる。



▲プラットフォームに検討結果を入力

- 情報交換用プラットフォーム**上で、実践に当たっての疑問点や実際の実践の様子を共有し、受講者や指導主事が活発に意見交流を行っていた。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.2. 福井県教育庁

3.2.3. 研修改善（第1回）



- 受講後アンケートでは、満足度・理解度・活用に対する意欲について自己評価を求めたところ、いずれの項目についても全受講者から肯定的な回答が得られました。
- また、各項目について自由記述での意見を求めたところ、「授業づくりの重要性を理解した」「協働的な学び（全体共有や他者参照）における有用性を理解した」といった意見が多く挙げられました。
- 今後の研修に対する意見・要望としては、**実際の授業を基に、具体的な活用を考える機会**を求める声が寄せられています。

受講後アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

研修の満足度 100%が満足	研修の理解度 100%が理解	活用に対する意欲 100%が現状より向上
<p>満足度に関する自由記述（抜粋）</p> <p><授業づくりと活用をセットで学ぶことができた></p> <ul style="list-style-type: none">ICTの活用だけではなく授業づくりについても学ぶことができ満足した。学習者主体の授業づくりを目指すことが、結果としてICT活用に繋がると分かり満足した。 <p><活用の方向性をイメージすることができた></p> <ul style="list-style-type: none">様々な事例や活用方法を紹介いただき、活用のイメージを持つことができた。 <p><学び合いを生み出すポイントを実感できた></p> <ul style="list-style-type: none">模擬授業を通じて「正解か否かでは学び合いが生まれにくい。」という点に気付くことができた。ICTを使って子供の自由な発想を引き出し、そこから学びに繋げるような授業を目指したい。	<p>理解度に関する自由記述（抜粋）</p> <p><授業づくりの重要性を理解></p> <ul style="list-style-type: none">ICTは学びを深めるツールだと再認識した。また、それらを効果的に活用するためには、学習の目的や課題の設定が重要であると理解した。今までは「ICTを活用しなければ」と無理矢理使っていたが、授業づくりを大切に、上手に使える場面を考えれば良いと分かった。 <p><協働的な学びの重要性を理解></p> <ul style="list-style-type: none">「他者との学び合いを通して理解を深めていくことを価値づけていく」という内容が一番重要だと感じた。他者の考えを瞬時に参照し、自分の学びを更新できることが、ICTの強みであると考えた。	<p>今後の活用に関する自由記述（抜粋）</p> <p><学習の目的に沿ってICTを活用></p> <ul style="list-style-type: none">活用が目的化すると、結局は授業改善にならない。まずは問いや課題を重視した上で、思考や振り返りの場面でICTをうまく活用していきたい。 <p><全体共有・他者参照の場面で活用></p> <ul style="list-style-type: none">誰がどこで躓いているか、誰がどう考えているかが見られるよう他者参照を積極的に行いたい。全員の考えをどう集めるか、友達のをどう比較するかなどを考え、ICTを使う場面を積極的に組み込んでいきたい。 <p><まずは活用を進める></p> <ul style="list-style-type: none">授業者も学習者とともに、デジタル教科書等を使い、色々試してみたい。

■ 今後の研修に対する意見・要望

- デジタル教科書・学習支援ソフト問わず**実践例をとことん深める場**があると良い。
- 特に学力差がある際の協働的な学びの実現について理解を深めたいと思った。
- 本研修での学びを生かした**各校の実践交流の機会**があると良い。
- 今回は算数が中心であったが、国語の活用方法についても知りたい。

※ 調査対象：研修受講者（小学校・中学校教員） 有効回答数：25 調査期間：研修実施後1週間（令和7年8月6日～8月13日）

3. 各実証県における研修改善の取組

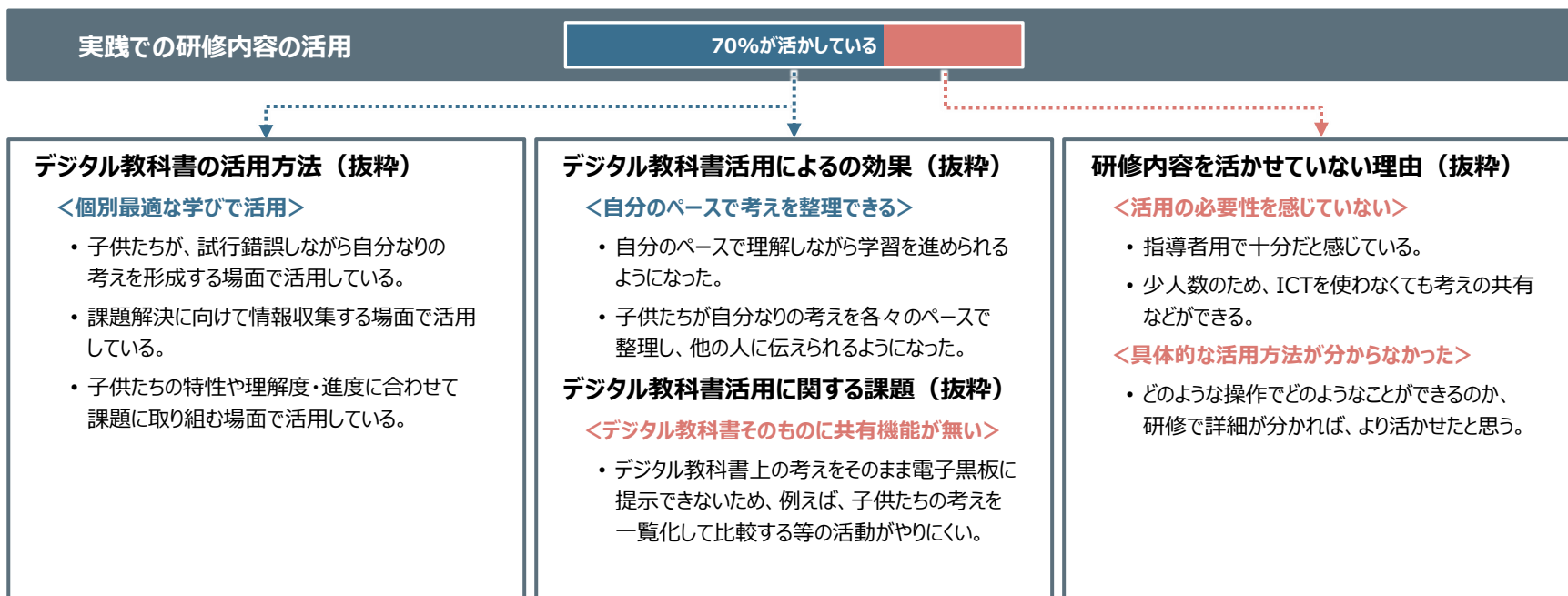
3.2. 福井県教育庁

3.2.3. 研修改善（第1回）



- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、**70%の回答者が研修内容を活かしている**と回答しています。
- 実践の内容としては、特に「**個別最適な学び**」における活用が挙げられ、その効果としては「**子供たちが自分のペースで考えを整理できるようになった**」というものが挙げられております。
- また、研修内容を実践に活かしていない者は、「**活用の必要性や具体的な活用方法に関する理解が不足している**」と回答しており、**今後、実際の授業における活用やその効果が、より具体的に想起できるような取組が求められている**と考えられます。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）



■ 今後の研修に対する意見・要望

- ・ デジタル教科書を**実際に触りながらどのような活用ができるか考えてみたい**。
- ・ デジタル教科書と学習支援ソフトを連携させた授業展開を知りたい。
- ・ 学習用具が紙のアナログからタブレットのデジタルに移行できる可能性が増えたと思うので、効果的な使い方を深めていきたい。

※ 調査対象：研修受講者（小学校・中学校教員） 有効回答数：23 調査時期：研修実施から約3か月後（令和7年10月21日～11月14日）

3. 各実証県における研修改善の取組

3.2. 福井県教育庁

3.2.3. 研修改善（第1回）

- 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振り返りを行い、「研修の成果につながった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。



成果と課題

今後の研修に向けた取組

研修の成果に繋がった点

デジタル教科書等の活用の効果を、学習者の目線から伝えたこと

- 受講者の課題として「必要性の理解不足」が挙げられていたため、デジタル教科書等の活用が、学習者にどのような効果をもたらすのかを理解する必要があった。
- 模擬授業では、学習者の目線から、デジタル教科書等の効果や使用感を実感することができ、受講者はその有用性を肌で感じる事ができていた。
- 有識者の講義では、学習者の思考・言動の変化に着目しながら事例を解説したで、活用による効果に納得感が伴い、受講者に高く訴求していた。

特に、これから活用を進めていく教員に、「学習者目線での効果的な活用」が訴求できるよう研修内容を検討する。

主任を研修対象とするとともに、学校ごとにグループを分けて議論したこと

- 学校間にデジタル教科書等の活用状況に差があったため、同じ課題を基に意見交換ができるよう学校ごとのグループ構成とし、実態に即した議論を引き出していた。
- また、各校で中核を担う主任を主な対象とすることで、学校の状況を俯瞰する立場からの意見も加えられ、活用方法だけでなく、校内での普及の方策にも議論が及んでいた。

次回の研修も基本的に同対象（視聴覚主任）とし、各校の実践状況に基づいた検討ができるよう研修を設計する。

課題

活用イメージの具体化に向け、実際の授業を基にした検討が必要なこと

- 本研修は、デジタル教科書等の効果や必要性の訴求を目的としており、その点は達成されたが、実際の授業場面を想定したより具体的な活用検討までは至らなかった。
- 受講者からは、実際の授業での具体的な活用の検討を深めたいという声や、各受講者の実践例を基に交流する機会を求める声が寄せられている。

次回の研修に向けた研修課題として、「ICT活用に関する実践報告」を設定し、受講者の実際の授業実践を促す。

研修担当者の声（本研修の振り返り）

本研修を通じて、受講者に、デジタル教科書等の活用の前段として、「“見方・考え方”を働かせる授業づくり」が重要であると理解してもらったと思います。この意識を大切にしながら実際に実践してもらい、次回研修では、その結果を持ち寄って効果的な活用を深めていきます。（福井県 村井 指導主事）



3. 各実証県における研修改善の取組

3.2. 福井県教育庁

3.2.4. 研修改善（第2回）



- 2回目の実証対象とした研修の概要は以下のとおりです。



研修の概要

研修のポイント

- ✓ 研修前に、デジタル教科書等を実際に活用し、その成果や課題を捉えた状態で研修に臨めるよう、**研修課題として実践報告を作成し持ち寄る。**
- ✓ デジタル教科書等の活用検討に際し、目的意識が明確になるよう、**研修を通貫する問いとして「目指す子供の学びの姿を問い直す」を設定する。**
- ✓ 研修や実践で感じた課題・疑問を解消し、今後に向けた意欲を高められるよう、**パネルディスカッションで有識者と受講者の交流の機会を設ける。**

対象者：越前町内の小中学校の視聴覚主任 13名

実施方式：参集

目的

① 知識・理念等の理解

② スキル・技能等の習得

③ 意識・行動等の変容

目標

・ 実践共有を通じて、デジタル教科書等の活用に関する新たな視点を得ることができる。

・ 目指す子供の学びの姿の達成に向けたデジタル教科書等の活用を具体化できる。

・ 各自で目指す子供の学びの姿を再定義し実践への意欲を高めることができる。

内容

研修前の取組 デジタル教科書等を活用した実践報告の作成

ワークショップ グループ協議（実践共有・目指す姿の検討）

ワークショップ パネルディスカッション（今後に向けた討論）

3. 各実証県における研修改善の取組

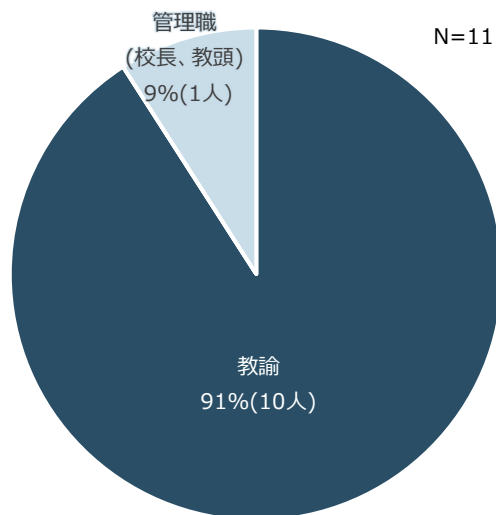
3.2. 福井県教育庁

3.2.4. 研修改善（第2回）

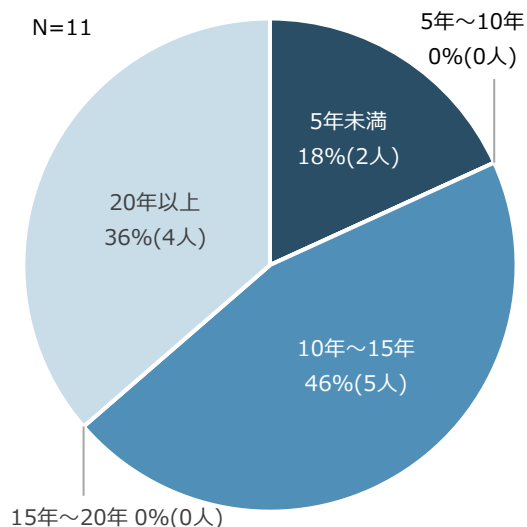


- 本研修の受講者の傾向※は、以下のとおりです。
- 受講者の役職は、約9割が「教諭」となっています。また、教職経験年数は「10～15年」の受講者が多数を占めており、各校の中堅層の教員が多く参加しました。
- 「担当する学年/教科ではデジタル教科書が配布されていない」と回答した受講者は、全体の約7割を占めており、これらの受講者は、将来的なデジタル教科書活用に向け、まずは、活用の意義や効果等の“知識”の理解を深めていく段階にあったと考えられます。なお、これらの受講者は、研修課題として、主に学習支援ソフト等のICT全般に係る実践報告を作成しています。

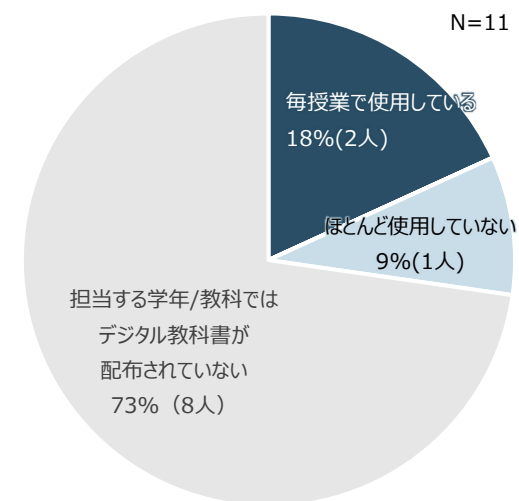
役職



教職経験年数



デジタル教科書の活用頻度



※ この傾向は受講後アンケート結果に基づくものであり、実際の受講者数と有効回答数が異なる。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.2. 福井県教育庁

3.2.4. 研修改善（第2回）



- 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

研修前の取組

デジタル教科書等を活用した実践報告の作成

各受講者は、ICTを活用した授業実践の内容を報告書に整理し、[情報交換用プラットフォーム](#)上に提出した。

■ 実践報告の作成に当たっての観点

- ① 【現状の課題】と【目指す姿】
- ② 目指す姿の達成に向けた【取組の具体】と【取組のポイント】
- ③ 取組の結果、見出された【成果（子供の変容）】や【課題】

研修の様子（青字は成果に繋がる内容）

- 各受講者からは、様々な教科・学年・校種の実践報告が提出された。研修課題の取組を通じて、同地域内で、多様なICT活用の事例が創出された。
- ICTを活用した取組の内容だけでなく、【目指す姿】や【取組のポイント】も併記したことで活用のねらいが掴みやすくなっていた。また、【子供の変容】も記載したことで、活用の効果も明らかとなっていた。

- 報告書作成時点で、ICTを活用した取組の【課題】も記載したことで、各自が、研修時に意見交換したい論点を明確にすることができたと考えられる。

各校からの実践報告の例 ▼▶

越前町立糸生小学校の実践(▼)の詳細は[こちら](#)の動画もご参照ください。

【取組内容】 ロイロノートを活用して、全員が参加し、考えを深め合える授業づくり

【現状の課題】 ICTの研修は年々進化している。各教員のスキルが向上を遂げ、より効果的な活用を実現すること。

【目指す姿】 ICTの効果的な活用により、協働的な学びを促進する。主体的な発表や対話、探究すること、より深い考えを導き出す力を発露に付ける。

【取組の具体】 ポイント① 共有する姿にICTを活用し、図形の変容を共有する。数々の図形の学習でロイロノートを活用した授業。図形の変容の取組が活発に行われていた。また、画面比較を活用して、深さある考え方を共有できた。

【生徒の変容】 ・文字を書いたり、図形に線を引いたりするのが苦手な生徒にとって、ICTを活用することによって、見やすく、間違えた時にも消してやり直しができるので、便利である。
一人一人の考えが一瞥で見られる機能があり、比較もできるので生徒の自己肯定感が高まる。

【詳細】 ・どうしても両面を見ている時間が長くなり、対話が滞っているように感じる。ICTを使う場面とそうでない場面の使い分けが必要。

振り返りを共有することで、ねらいに迫る考えや次第につながる考えを共有できる。

ポイント② 共有ノートで振り返り

【取組内容】 4年 算数「変わり方」 ICTを使って様々な考え方に触れ、問題解決の見通しを持つ

【現状の課題】 ・理解度の差がある。
・自分の考えや根拠を言語化して伝えることが難しい。

【目指す姿】 ・他者参照して、自分の考えを深める姿
・図や表、言葉などを使って自分なりの表現で考えを伝える姿

【取組の具体】 図が1cmの正方形をなべり、正方形の面積を求めよう。正方形の長と幅の関係を調べよう。

ポイント① 共同注視 まわりの長さはどこにあたるのか全員で確認し、解決の見通しを持たせる。

ポイント② いくつかの解決法を提案する。児童は、自分がどの方法であれは解決できそうな見通しを持ってから、自分の考えをロイロノートにまとめていく。

デジタル教科書 異なる角度を変えると階段の図形が変わる。まわりの長さの数字も変わる。

ロイロノートの資料欄に児童 選択した児童は、「使う」をクリックして自分のロイロノートに貼り付けて考えていく。

児童の手描きの図、言葉で... ロイロノートに表現させる。

次頁に続く

3. 各実証県における研修改善の取組

3.2. 福井県教育庁

3.2.4. 研修改善（第2回）



■（前頁の続き）

研修の流れ

研修の様子（青字は成果に繋がる内容）

ワークショップ

グループ協議（実践共有・目指す姿の検討）



50分

グループごとに、持ち寄った実践を共有した後、協議の視点に沿って目指す学びの姿やそれに向けたICT活用について意見交換した。

■グループ協議の実施方法

- 第2回研修では、学校を超えた幅広い実践共有をねらいとしたため異なる学校の受講者で、4～5人でグループを編成。
- 各受講者が、情報交換用プラットフォーム上の「報告書」により実践内容を共有した後、以下の協議の視点に沿って意見交換。

■グループ協議の視点

テーマ：デジタル教科書をはじめとするICTの活用を通じて目指す子供の学びの姿を問い直す。

- 検討の視点①：ICT活用の成果や課題は何であったか。
- 検討の視点②：今後に向けた疑問や困っていることは何か。
- 検討の視点③：深い学びを確かなものにするための取組とは何か。

ワークショップ

パネルディスカッション（今後に向けた討論）



35分

福井県及び越前町の指導主事、有識者、文部科学省の職員をパネラーとし、受講者と交流しながらパネルディスカッションを行った。

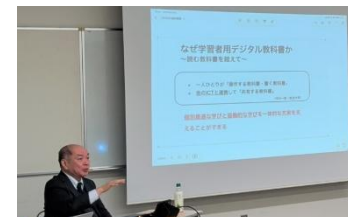
■パネルディスカッションの実施方法

- 前半：受講者から、グループ協議を通じて見えてきた課題や疑問を募り、その内容に対してパネラーから回答。
- 後半：各パネラーが、研修全体を振り返りながら総括。

- あるグループでは、算数・数学における活用という共通の観点を持ちつつも、発達段階によつての相違点や共通点を含めた議論がなされていた。
- あるグループでは、授業だけでなく、校内研修の事例も同様に報告されており、校内での普及策についても議論が及んでいた。
- ある受講者は、**デジタル教科書等の利点を、実践を通じて見られた子供たちの姿を交えながら説明。**「ICTの活用が、子供のどのような学びに繋がるか」が明確化され、テーマに迫る議論が促されていた。
- 各受講者が実践を通じて感じた、**具体的な課題を持ち寄ったことで、共感を呼びつつ、課題の解消や今後の取組に向けた建設的な意見交換を引き出していた。**
- 主に以下のような質疑応答がなされ、多くの受講者の顔さやメモが見られた。
 - ✓ 質問：子供が端末を操作しているとき、どのように学びを見取ると良いか。
回答：端末を使って“何をしているのか（＝動詞）”、学び方に着目すると良い。
 - ✓ 質問：デジタルとアナログ（ノートへの学びの蓄積等）のバランスはどう考えると良いか。
回答：まずは、それぞれの学習媒体の“良さ”が何であるかを考えると良い。
その上で、やろうとしている学習活動のねらいを明確にし、その達成に適した学習媒体を選択できると良い。目的に応じて使い分ける意識が重要である。
- パネルディスカッションを通して、各受講者は、授業実践や本研修で感じた課題や疑問を解消することができ、更なる理解の深まりに繋がっていたと考えられる。



▲グループ協議の様子
端末で実践を共有しながら議論



▲パネラーが質問に答える様子

3. 各実証県における研修改善の取組

3.2. 福井県教育庁

3.2.4. 研修改善（第2回）



- 受講後アンケートでは、満足度・理解度・活用に対する意欲について自己評価を求めたところ、満足度・理解度は全ての受講者から、活用に対する意欲は約9割の受講者から肯定的な回答が得られました。
- 自由記述の意見としては、「**実践共有を通じてICT活用による成果・課題を見いだせた**」という声や、「**子供が主体的に学ぶ姿を目指してICTを活用したい**」という声が多く寄せられ、「目的達成に向けたICT活用」について意識付けができたと考えられます。
- 今後に向けた意見として、**目的達成に向けたICT活用のバリエーションを更に増やしていきたい**という声が寄せられています。

受講後アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

研修の満足度 100%が満足	研修の理解度 100%が理解	活用に対する意欲 91%が現状より向上
満足度に関する自由記述（抜粋） <実践共有を通じて成果・課題を見いだせた> <ul style="list-style-type: none">・ 他校の先生と実践共有し、ICT活用の良さと今後の課題を新たに見つけることができた。・ グループ協議で、様々な学びの在り方を知った。新たなことに取り組むのは大変だが、このような場があると活用のメリットが具体的に見えてくる。 <年間を通じてICT活用に継続して取り組めた> <ul style="list-style-type: none">・ 年間の研修を通じ、一貫して、ICT活用の視点から「目指す子供の学びの姿」を考え、深く学ぶことができたと感じている。・ 1年間の「ICT活用研修」を通じてデジタル教科書等のICTを活用することで、教員も子供たちも大きく成長できたと感じている。	理解度に関する自由記述（抜粋） <教員の役割の重要性を再認識> <ul style="list-style-type: none">・ 子供の学習の幅が広がり、様々な活用の仕方が見えてきたからこそ、授業をどうコーディネートしデザインしていくかが重要となると感じた。・ 「使ってみることが目的」となっていた段階から、「目的に応じた使い方を考える」という次の段階に進まなくてはならないと理解した。 <デジタルのメリットを理解> <ul style="list-style-type: none">・ デジタルの強みは、思考の可視化と共有・他者参照、試行錯誤、学びのポートフォリオ、子供の見取りにあると思う。・ 作業や共有の時間を短縮し、考える時間を確保できるため、学習意欲の維持にも繋がる。	今後の活用に関する自由記述（抜粋） <子供が主体的に学ぶ姿を目指す> <ul style="list-style-type: none">・ 目指す児童像は、自分で学びを切り拓く子。一人一台端末によって、調べる力が高まってきているので、学習活動の中で、より深く考え、判断・表現できるよう単元を構成したい。・ 今後は、ICTの良さを生かし、子供たちが友達の考えと比較したり深掘りしたりしながら主体的に話し合う姿を目指していきたい。・ 自ら課題を見つけ、情報を収集・整理・分析しながら学ぶ子供の姿を目指したい。・ デジタルの良さを理解し、学びの見通しを自分で立てて学びを進めていく姿を目指したい。

■ 今後の研修に対する意見・要望

- ・ ICTの活用によって、生徒の学習の可能性を広げることができると学んだ。そのため、これから、**生徒の主体性や意欲を引き出す仕掛けや活用法を更に模索**していきたい。
- ・ 様々な学習支援アプリがあるが、自分はまだ使いこなせているとは言い難い。**今回のような各学校での実践をじっくり聞く時間を更に確保**できると良い。

※ 調査対象：研修受講者（小学校・中学校教員） 有効回答数：11 調査時期：研修実施後1週間（令和7年12月24日～1月9日）

3. 各実証県における研修改善の取組

3.2. 福井県教育庁

3.2.4. 研修改善（第2回）



- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、**全ての受講者が研修内容を活かしている**と回答しています。
- 主な実践の内容としては、第1回研修と同様に「個別最適な学び」における活用が挙げられていますが、**特に「既習事項の振返り」の場面における活用が増えています。**
- 研修に対する意見・要望として、「**協働的な学びにおける活用」「デジタルと紙の違い」を更に知りたい**という声が寄せられています。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

実践での研修内容の活用

100%が活かしている

デジタル教科書の活用方法（抜粋）

<個別最適な学びに向けて活用>

- 既習事項を振り返る場面で活用している。
- 子供たちが、試行錯誤しながら自分なりの考えを形成する場面で活用している。
- 子供たちが、課題解決に向けて情報収集する場面で活用している。
- 子供たちの特性や理解度・進度に合わせ課題に取り組む場面で活用している。

デジタル教科書活用によるの効果（抜粋）

<子供の主体性を引き出す>

- 子供たちが、分からないことがあったときに、既習事項を振り返るなど自分ですぐ調べるようになった。

<子供の理解を引き出す>

- 画像や動画、音声などを活用することで、子供たちの理解を促すことができた。

デジタル教科書活用に関する課題（抜粋）

<デジタル教科書に関する情報不足>

- 効果的な活用方法についての情報が不足している。

<教員間の格差>

- 教員の間で活用に関する意識の差がある。

■ 今後の研修等に対する意見・要望

- 自分の考えを整理する場面では、ある程度児童が主体的に活用できている。**考えを共有し、深め、広げる場面での有効活用**について知りたい。
- **デジタル教科書と紙の教科書の違い**が知りたい。また、仮に同じことができるとしたら、**全てデジタルになる利点は何か**を知りたい。
- 担当する学年や教科で、デジタル教科書が配布されていない受講者に、「**配布されたら活用したいか**」を問うたところ、**全ての受講者から肯定的な回答が得られた。**

※ 調査対象：研修受講者（小学校・中学校教員） 有効回答数：13 調査時期：研修実施から約3か月後（令和8年2月2日～2月13日）

3. 各実証県における研修改善の取組

3.2. 福井県教育庁

3.2.4. 研修改善（第2回）



- 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振り返りを行い、「研修の成果につながった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。

成果と課題

今後の研修に向けた取組

研修の成果に繋がった点

“目指す子供の学びの姿”を前提に、ICT活用を検討したこと

- “目指す子供の学びの姿を問い直す”を通貫するテーマとして据え、その達成に向けたICT活用を検討したことで、各自が目指す授業観をアップデートするとともに、活用自体を目的化しない意識を醸成することができていた。

活用自体が目的化しないよう、今後の研修においても、“目指す子供の学びの姿”を軸にしながら活用検討を行う。

実践報告作成に際し、活用のねらいや成果・課題を意識するようにしたこと

- 受講者が実践報告を作成する際、活用方法とあわせて現状の課題/目指す姿や成果・課題を整理したことで、自身の実践のポイントを概念的に捉え直すことができ、また、それらを受講者間で共有したことで、活用方法に留まらない議論の深まりを生んでいた。

今後の研修等で、授業での活用を検討する際には、活用のねらいや成果・課題を意識できるようにし、様々な授業に応用できるようなポイントを見出せるようにする。

継続した研修により、受講者に段階的な理解を促したこと

- 研修で得たデジタル教科書等の概念的な理解をもとに実際に実践を行い、そこから得られた成果・課題を踏まえて再度研修にて理解を深めていくよう、継続した研修設計がなされており、受講者は、研修を重ねながら段階的に理解を深めることができていた。

活用のレベルを更に上げられるよう、以下課題も踏まえて同対象への研修の継続を検討する。

課題

“目的達成に向けたICT活用”のバリエーションを増やす機会が必要なこと

- 受講者は、年間の研修を通じてICT活用の良さや可能性を実感し、“目指す姿に向けたICT活用”の意識をもつことができています。
- 今後に向けて、受講者からはICT活用のバリエーションを更に増やしていきたいという声が寄せられている。

今後の研修においても、実践報告の機会を設け、様々な活用パターンに触れられるようにする。また、実践報告に留まらず、共有された実践を自分の実践に活かす方法についても議論する。

研修担当者の声（本研修の振り返り）

本研修では、活用方法だけでなく、そのねらいや子供の変化まで含めた意見交換がなされ、活用のフェーズが1段進んだと感じました。次は、目指す子供の学びの姿の達成に向けた「具体的な活用方法」にフォーカスを当てる等、抽象⇔具体を往還した取組を継続したいと思います。（福井県 村井 指導主事）



3. 各実証県における研修改善の取組

3.2. 福井県教育庁

3.2.5. 総括

- 福井県教育庁での実証を通じて得られた「研修改善のポイント」と、実証を踏まえた「今後の取組」は以下のとおりです。

福井県教育庁における研修改善の取組の総括

研修改善のポイント

研修改善 (1回目)

デジタル教科書等の活用の効果を、学習者の目線から伝えたこと → 参考：p.40、p.41

- ・ デジタル教科書を積極的に活用していない教員は、その必要性や効果（子供の変容など）を実感しておらず、最初の一步を踏み出せていないことが多い。それらの教員が、納得感をもって活用を進めていけるよう、模擬授業等で「学習者の目線」を体感させることが重要。

主任を研修対象とするとともに、学校ごとにグループを分けて議論したこと → 参考：p.41

- ・ 受講者間でデジタル教科書の活用に差がある場合、活用状況や課題ごとにグループを分け、議論の前提を揃えることで検討を活性化できる。また、主任など学校の中核を担う教員を対象とすることで、個人に留まらず学校全体の状況を踏まえた議論を引き出せる。

研修改善 (2回目)

“目指す子供の学びの姿”をテーマに、ICT活用を検討したこと → 参考：p.48

- ・ ICT活用検討に際しては、活用“方法”に目が行き、活用自体が目的化してしまうことが多い。活用の前提となる「目指す姿は何か」を軸に活用検討を行うことにより、授業観をアップデートしながら目的達成に向けた“活用”を意識することができる。

実践報告作成に際し、活用のねらいや成果・課題を意識するようにしたこと → 参考：p.47

- ・ 実践報告の作成に当たり、活用方法だけでなく、ねらいや成果・課題もあわせて整理するようにしたこと、各受講者は自身の実践のポイントを概念的に捉え直すことができた。また、それらを受講者間で共有することにより、活用方法に留まらない議論の深まりを引き出した。

継続した研修により、受講者に段階的な理解を促したこと → 参考：p.47

- ・ 研修で得たデジタル教科書等の概念的な理解をもとに実際に実践を行い、そこから得られた成果・課題を踏まえて再度研修にて理解を深めていくよう、継続した研修設計を行うことで、受講者は、研修を重ねながら段階的に理解を深めることが可能となる。

実証成果を踏まえた 県における今後の取組

- ・ デジタル教科書活用促進に向け、まずは、先生方に授業で使ってもらい、子供の姿を通じて効果を実感してもらおうと思います。その際には、学校や先生方に全てを委ねるのではなく、指導主事が伴走していくことも重要と考えます。今後も、先生方と共に離れた同僚として、デジタル教科書等の活用の在り方について、考えていきたいと思っています。（福井県 村井 指導主事）
- ・ 研修を通じてICTを活用する教員が増え、更には、“目指す子供・授業の姿”に向けた活用が意識されるようになってきました。今後も、先生方の“目指す姿”を大事にしながら、ICT活用が更に進むよう取組を進めていきたいと思っています。（越前町 伊藤 指導主事）

3. 各実証県における研修改善の取組

3.1. 埼玉県教育局

3.2. 福井県教育庁

3.3. 奈良県教育委員会

3.4. 熊本県教育庁

3.5. 鹿児島県教育庁



3. 各実証県における研修改善の取組

3.3. 奈良県教育委員会

3.3.1. 基本情報

- 実証研究に御協力いただいた奈良県教育委員会に関する基本情報、実証前の課題認識は以下のとおりです。

県担当部署	奈良県教育委員会 義務教育課 義務教育指導係		
県担当者	福呂 当起 指導主事	担当有識者	放送大学 佐藤 幸江 客員教授
県における 過年度の取組	<ul style="list-style-type: none">・ 令和4年度に、オンデマンド形式で中学校外国語科の教員を対象に実施した教育課程研究集会において、県内の指導主事がデジタル教科書の活用方法を共有。		

実証前の 課題認識



学校・教員

- **デジタル教科書の意義や効果について、理解の深化を図る必要がある**
 - ・ デジタル教科書を紙の教科書の代替として、大型掲示装置への投影や端末での閲覧といった形で活用している。今後、学習者主体の学びの実現に向け、デジタル教科書の意義や効果に対する理解を一層深める必要がある。
- **学校間・教員間で活用状況に差が見られる**
 - ・ 学校や教員間でデジタル教科書の活用頻度には差が見られる。教員のICTへの慣れによって使用状況が異なる上、他の教員との交流の機会も限られていることから、活用格差が広がっている可能性が考えられる。

教育委員会・指導主事

- **デジタル教科書の活用に関する知見の整理がなお十分とは言えない**
 - ・ デジタル教科書の活用に関する知識や実践的経験について、体系的な整理が十分に進んでいるとは言えず、指導助言の充実に向けて、更なる検討が必要な状況である。
- **学校現場における活用状況や課題の把握・共有が十分とは言えない**
 - ・ 学校現場におけるデジタル教科書の活用状況や課題について、十分に把握・共有できていない側面があり、実態を踏まえた支援の在り方について、更なる検討が求められる状況にある。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.3. 奈良県教育委員会

3.3.2. 年間計画

- 奈良県教育委員会における、令和7年度のデジタル教科書の活用に関する研修計画は以下のとおりです。本事業では、「第1回研修」と「第2回研修」を研修改善に関する実証対象としました。

	対象	概要
第1回研修 実証対象：p.56	<ul style="list-style-type: none">各郡市代表の教員 (外国語科を担当) 計32名	<ul style="list-style-type: none">学習者主体の学びの必要性、その実現に向けたデジタル教科書の意義や活用方法とその効果について、有識者から説明。その後、複数のグループに分かれて、実際にサンプル版のデジタル教科書を操作しながら、外国語科の4技能における具体的な活用方法を検討。外国語科におけるデジタル学習基盤の活用の重要性や具体的な授業例について、県内指導主事から紹介。
第2回研修 実証対象：p.63	<ul style="list-style-type: none">各郡市代表教員及び 指導主事 (算数・数学科を担当) 計51名	<ul style="list-style-type: none">学習指導要領の要点とデジタル教科書の具体的な実践事例を交えて、県内指導主事から紹介。デジタル教科書を導入する意義やこれからの授業の在り方について、有識者から説明。その後、複数のグループに分かれて、実際にサンプル版のデジタル教科書を操作しながら、算数・数学科の4領域※における具体的な活用方法を検討。

※ 「数と計算」「図形」「データの活用」「関数」を指す。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.3. 奈良県教育委員会

3.3.3. 研修改善（第1回）



- 1回目の実証対象とした研修の概要は以下のとおりです。



研修の概要

研修のポイント

- ✓ 県内の全教員に対して、効率的にデジタル教科書活用を促進するため、各校で普及啓発の中核を担う各郡市代表教員を対象とする。
- ✓ 他の教員と交流する時間を設けたり、県内の事例を紹介したりして、活用の幅を広げてもらう。

対象者：各郡市代表の教員（外国語科を担当） 計32名

実施方式：参集

目的

① 知識・理念等の理解

② スキル・技能等の習得

③ 意識・行動等の変容

目標

・ 学習者主体の学びの必要性を認識した上で、デジタル教科書の意義や効果を理解する。

・ 場面に応じて適切にデジタル教科書を活用するイメージが持てる。

・ 他の教員がデジタル教科書を活用する際の参考とできるよう、研修で学んだ内容を紹介できる。

内容

レクチャー 有識者の講義（活用意義、効果の理解）

ワークショップ グループ協議（実践例を基にした活用検討）

リフレクション 指導主事の講義（県内事例の紹介）

3. 各実証県における研修改善の取組

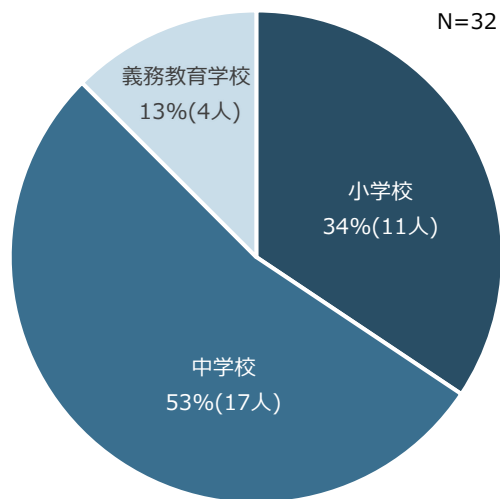
3.3. 奈良県教育委員会

3.3.3. 研修改善（第1回）

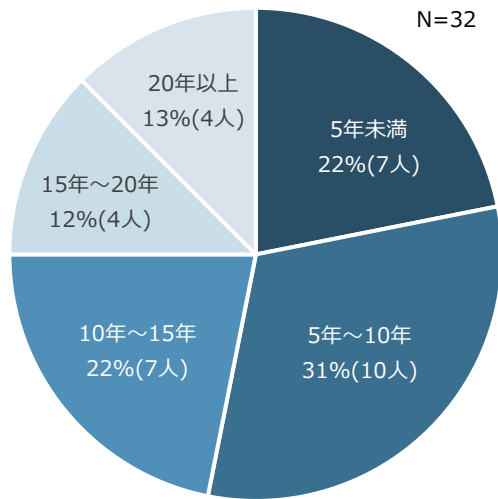


- 本研修の受講者の傾向は、以下のとおりです。
- 本研修受講者は、中学校教員が過半数を占めています。また、教職経験年数に特段の偏りはなく、幅広い層が参加しました。
- デジタル教科書の活用頻度には差があるものの、約6割の受講者が4回に1回以上の授業で使用していると回答がありました。各郡市の代表者を対象としたため、活用が進む教員も多く集まったと考えられます。

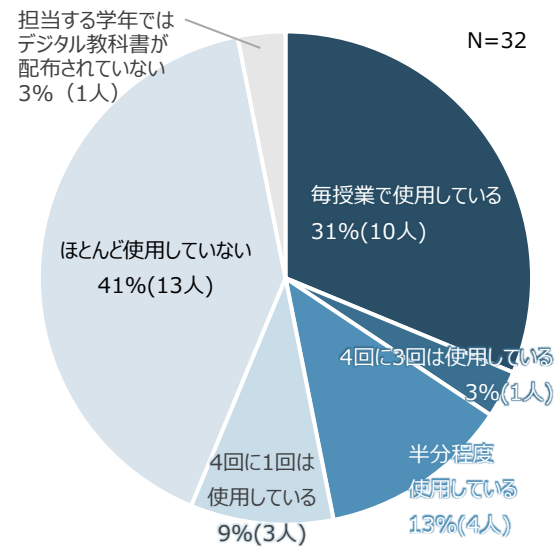
学校種



教職経験年数



デジタル教科書の活用頻度



3. 各実証県における研修改善の取組

3.3. 奈良県教育委員会

3.3.3. 研修改善（第1回）

- 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

レクチャー

有識者の講義（活用意義、効果の理解）



60分

学習者主体の学びの必要性やその実現に向けたデジタル教科書の活用意義や活用方法について、効果と共に有識者から説明した。

■ 主な講義内容

デジタル教科書の現状と課題、学習者主体の学びの必要性の説明

- ・ 文部科学省のデジタル教科書導入に当たっての教員の課題感に関する調査結果を紹介。
- ・ 時代とともに子供たちを取り巻く環境が変化していることを紹介。従来の一斉一律型の学びだけではなく、学習者が自立的に学びを進めていく「学習者主体の学び」が求められていることを説明。

デジタル教科書の活用意義の理解、実践事例の紹介

- ・ デジタル教科書の具体的な機能や活用例を紹介しながら、「学習者主体の学び」にデジタル教科書が寄与することを説明。
- ・ 受講者が段階的にデジタル教科書の活用を進められるよう「授業づくり」の各フェーズを説明。特に「学習者主体の学び」となるフェーズ3・4への移行に向けた実践事例を紹介。
- ・ 「学習者の声」に着目しながら過年度事業の好事例動画を視聴。

次頁に続く

1回目

計画

実践

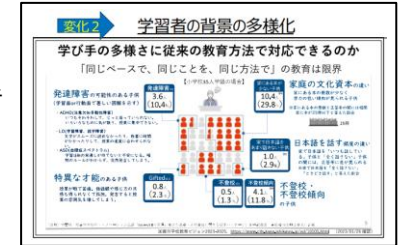
アンケート

振り返り

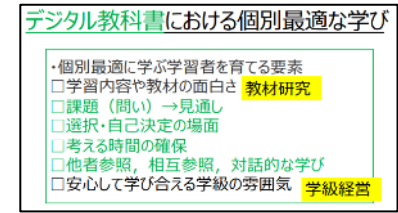
2回目

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

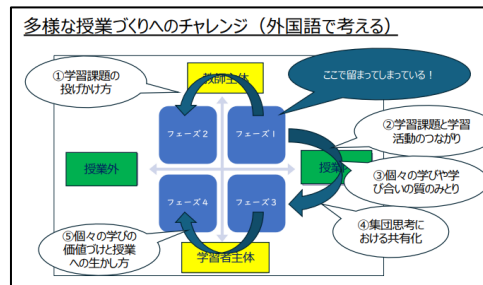
- ・ 多くの受講者が紹介された課題感に共感していた。
- ・ 子供たちを取り巻く環境の変化やそれに伴う学習者主体の学びの必要性についても多くの受講者が共感していた。
前述の課題感とあわせ、**自身の学級を想起し、各自の課題意識を鮮明にしていた**と考えられる。
- ・ 講義の途中で席が近くの受講者と自身の課題について話し合う場面では、**各自の課題意識に基づき、熱心に議論する様子が見られた。**
- ・ デジタル教科書の機能や活用例を紹介する場面では、実際に操作して試しながら確認していた。
- ・ 「授業づくり」のフェーズごとに実践事例を紹介する場面では、多くの受講者がメモを取っていた。
自身の立ち位置を意識しながら、今後の取組の方向性を明確にすることができたと考えられる。



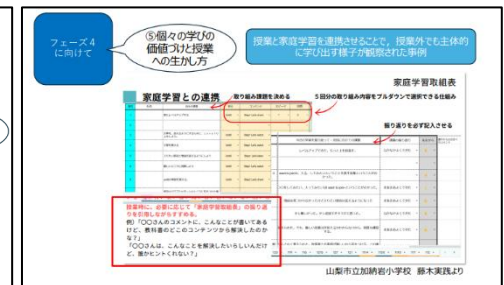
- ▲多様化する学級の状況を紹介
「同じペースで、同じことを、同じ方法で」学ぶことの限界について言及



- ▲学習場面ごとにデジタル教科書の活用方法を紹介



- ▲「授業づくり」のフェーズごとにポイントを解説



- ▲フェーズ3・4は取組例も併せて紹介（上図は山梨市加納岩小小学校の取組）

3. 各実証県における研修改善の取組

3.3. 奈良県教育委員会

3.3.3. 研修改善（第1回）

■（前頁の続き）

研修の流れ

ワークショップ

グループ協議（実践例を基にした活用検討）



30分

受講者一人一人がデジタル教科書とデジタル学習基盤の活用方法を考えた後、グループに分かれて、外国語科の4技能（聞く・読む・話す・書く）における具体的な活用方法を検討し、全体に向けて発表を行った。

個別ワーク：5分

- 自身の実践や講義で学んだ内容を基に、「デジタル教科書の活用方法」「デジタル学習基盤の活用方法」について個人で考え、学習支援ソフトに書き出して共有。

グループワーク：15分

- 1グループ約5名でグループに配置。
- グループごとに外国語科における4技能の活用を検討。
- 実際にデジタル教科書を手元で操作しながら、グループで具体的な活用方法をホワイトボードに整理。

全体発表：10分

- 2グループが代表して活用方法を発表し、全体で共有。

レクチャー

指導主事の講義（県内事例の紹介）

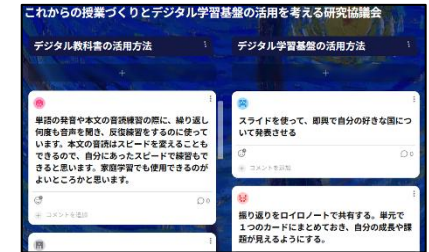


20分

外国語科におけるデジタル学習基盤の活用の重要性や県内の実践事例について、奈良県教育委員会の指導主事から紹介した。

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 個人ワークでは、多くの受講者が「スピーキングやリスニングにおける反復練習」において有用性を感じていた。
- グループの中には、**既に活用が進んでいる教員もあり、そうした教員がグループの中心となって話し合いを先導していた。**具体的に、「線を引く機能は便利だけど、真っ直ぐ引けない生徒も多いんだよね」といった声に対し、「ここを〇〇すると対応できるよ」と助言する等、**互いにアイデアを出し合い、活用の幅を広げていた。**一方で、**時間が足りず、表面的な機能の話に留まる様子も見られ、実際の授業を想定した活用までイメージできていないグループもあった。**
- 全体発表では、個別最適な学びを実現するための活用方法が紹介された。

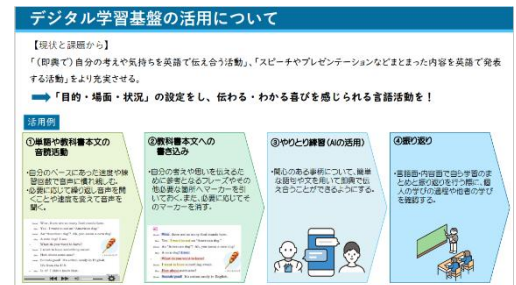


▲学習支援ソフト上に個人の考えを書き出す様子



▲活用に関するアイデアを互いに話し合っている様子

- 県内の実践事例は具体的な授業の流れに沿ってデジタル学習基盤の活用が紹介され、多くの受講者が共感していた。**授業の場面ごとにデジタル学習基盤の重要性を理解できた**と考えられる。



▲授業場面ごとに県内の活用事例を紹介

3. 各実証県における研修改善の取組

3.3. 奈良県教育委員会

3.3.3. 研修改善（第1回）



- 受講後アンケート※では、満足度・理解度・活用に対する意欲について自己評価を求めたところ、**満足度と活用に対する意識は約9割、理解度は全受講者から肯定的な回答が得られました。**
- また、各項目について自由記述での意見を求めたところ、「**他の教員と活用に関する意見交換ができたことに満足した**」「**学習者主体の学びにおける活用意義を理解した**」という声が多く寄せられています。
- 今後の研修に対する意見・要望としては、**より具体的な活用方法を考えたい**といった声が寄せられています。

受講後アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

研修の満足度 90%が満足	研修の理解度 100%が理解	活用に対する意識 88%が現状より向上
満足度に関する自由記述（抜粋） <他の教員と活用に関する意見交換ができた> <ul style="list-style-type: none">他の教員が実践している具体的な活用方法について意見交換でき、有意義だった。授業での活用方法だけでなく課題についても、意見交換できて良かった。 <活用の方向性が見出せた> <ul style="list-style-type: none">デジタル教科書を今後どのように活用していくべきか、方向性を知ることができた。デジタル教科書を活用することで、個に応じた学習を実現できたと分かった。 <グループ協議の時間不足> <ul style="list-style-type: none">グループワークの時間が短く、十分に話し合えなかった。	理解度に関する自由記述（抜粋） <学習者主体の学びにおける活用意義を理解> <ul style="list-style-type: none">デジタル教科書を場面に応じて適切に活用することで、学習者主体の学びに繋がると理解した。特に、個別最適な学びの実現において、デジタル教科書は有効に機能する側面が多いと理解し、その実現に向けては、まずは実際に活用してみることが重要であると感じた。 <具体的な機能を理解> <ul style="list-style-type: none">意見交換を通じて、デジタル教科書の様々な機能を知り、授業で活かそうと感じた。デジタル教科書への書き込みや音声の速度調整等を中心に活用を進めたい。	今後の活用に関する自由記述（抜粋） <個別最適な学びにおける活用促進> <ul style="list-style-type: none">一斉指導での活用に留まらず、個々の課題に応じた活用や、自主学習に繋がる活用も進めていきたい。生徒の個別学習（音読やリスニング）や、本文に線を引く等で活用していきたい。児童生徒が単語等の音声速度を調整して自分に合った速度で学習できる時間を確保したい。 <研修内容を再展開> <ul style="list-style-type: none">個別最適な学びを実現するため、研修会で学んだ取組を本校や市で共有したい。

■ 今後の研修に対する意見・要望

- ・ **具体的にどのような場面でどのような活用が可能か、更に考えていきたい。**
- ・ **実際にデジタル教科書を使いながら、具体的な活用方法をもっと深めたい。**
- ・ **実際の授業で使っている様子を、実践動画等を視聴し学んでいきたい。**
- ・ **実践動画だけでなく、実際にデジタル教科書を活用する授業風景を確認したい。**

※ 調査対象：研修受講者（各都市代表の教員（外国語科を担当）） 有効回答数：32 調査期間：研修実施後2週間（令和7年10月10日～10月17日）

3. 各実証県における研修改善の取組

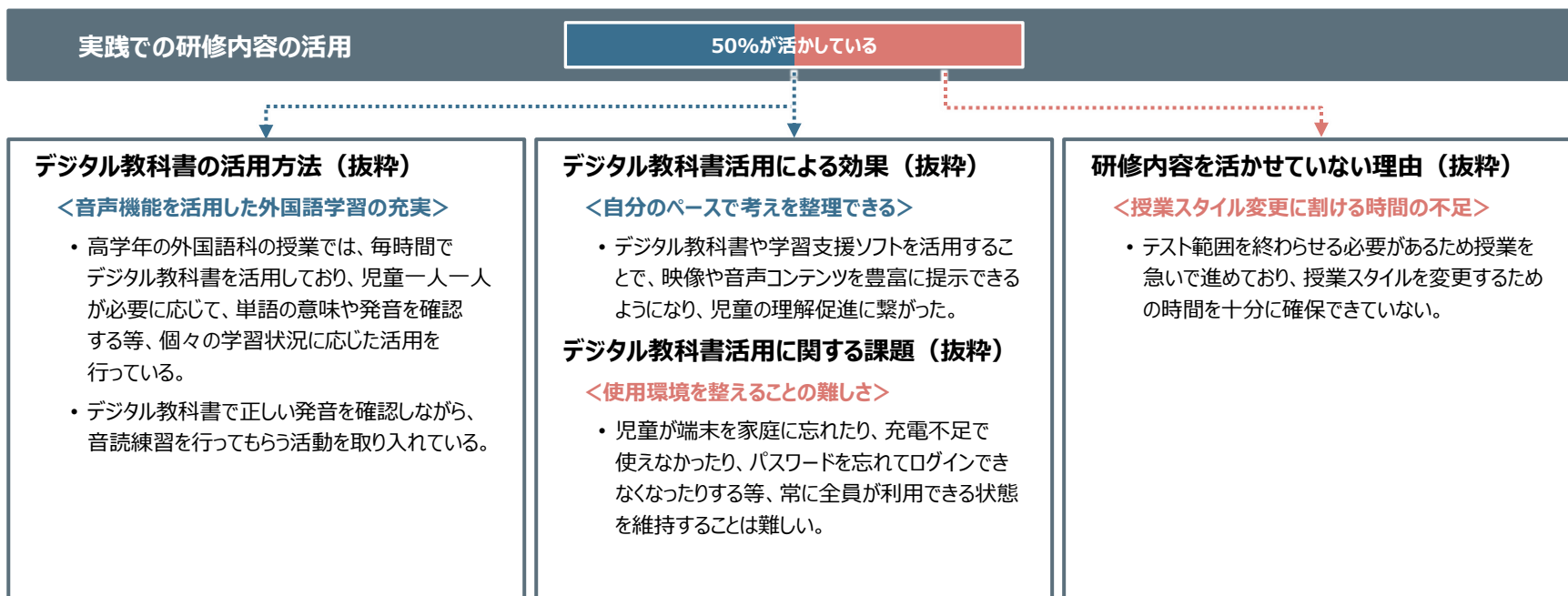
3.3. 奈良県教育委員会

3.3.3. 研修改善（第1回）



- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、**半数が研修内容を活かしている**と回答しています。
- 実践の内容としては、「**音声機能を活用した外国語学習**」が挙げられており、映像や音声コンテンツを豊富に提示できたことで、**児童生徒の理解促進に繋がった**との効果が示されています。
- また、研修内容を実践に活かしていない方からは、「**授業スタイル変更**に割ける時間が**不足している**」との声が寄せられています。

受講後アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）



■ 今後の研修に対する意見・要望

- ・ デジタル教科書が学校現場でどのように活用されているのか、具体的な実践例を知りたい。
- ・ 学級内で端末利用に関するルールの整備をどのように進めていくか考えていきたい。

※ 調査対象：研修受講者（各都市代表の教員（外国語科を担当）） 有効回答数：6 調査期間：研修実施から約1か月後（令和7年11月17日～11月28日）

3. 各実証県における研修改善の取組

3.3. 奈良県教育委員会

3.3.3. 研修改善（第1回）

- 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振り返りを行い、「研修の成果に繋がった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。



成果と課題

今後の研修に向けた取組

研修の成果に繋がった点

他の教員とデジタル教科書の活用方法について意見交換できたこと

- 本研修では、積極的にデジタル教科書を活用し、知見をある程度有していた教員も多く受講していた。
- そのため、グループ協議において、そのような知見を有する教員を中心として意見交換することで、互いにアイデアを出し合い、活用の幅を広げることができていた。

今後の研修においても、他の教員と意見交換できる機会を積極的に設定する。
また、意見交換がより活発に行われるよう、受講者の実態に合わせてグループ編成や協議テーマを工夫する。

課題

受講者の活用実態に応じたインプットとアウトプットの時間配分

- アンケートにおいて「グループワークの時間が足りなかった」という声が挙げられている。
- 本研修では、積極的にデジタル教科書を活用し、知見をある程度有していた教員も多く受講していたため、講義や説明（インプット）の時間を短縮し、グループ協議（アウトプット）の時間を十分に確保することで、より発展的な活用に向けた検討を促進できた可能性がある。

今後の研修では、比較的活用が進んでいない受講者にはインプットの時間を、活用が進んでいる受講者にはアウトプットの時間を長く設定する等、受講者の活用段階に応じて時間配分を柔軟に設定する。

より実践的な活用を理解するためのグループワーク内容の設定

- 本研修を通じて、受講者はデジタル教科書の活用意義や活用の方向性を把握することができた。
- 今後に向けては、「より具体的な活用方法を深めたい」との要望が寄せられている。

今後の研修では、授業案検討等を通じて実際の単元や授業場面を想定し、具体的な活用方法を検討する活動を取り入れる。

研修担当者の声（本研修の振り返り）

本研修の受講者が中心となり、各校においてデジタル教科書の活用が一層推進されることを期待しています。また、当初想定よりもデジタル教科書の活用が進んでいる受講者が多かったことを踏まえ、今後は活用が進んでいる方に向けた研修も検討していきたいです。（奈良県 福呂 指導主事）



3. 各実証県における研修改善の取組

3.3. 奈良県教育委員会

3.3.4. 研修改善（第2回）



- 2回目の実証対象とした研修の概要は以下のとおりです。



研修の概要

研修のポイント

- ✓ デジタル教科書の活用イメージを具体化するために、教科の見方・考え方や授業観といった概念的な内容について、具体的な実践例を交えて紹介する。
- ✓ 校種や立場を越えた意見交流ができるよう、グループ協議において、小学校・中学校教員及び指導主事を混在させて配置する。

対象者：各都市代表教員及び指導主事（算数・数学科を担当） 計51名

実施方式：参集

目的

① 知識・理念等の理解

② スキル・技能等の習得

③ 意識・行動等の変容

目標

・ 教科の見方・考え方や目指すべき授業観と照らして、デジタル教科書の理解を深める。

・ 場面に応じた適切なタイミングでデジタル教科書を活用できる。【教員】
・ 学級の課題や場面に応じて、デジタル教科書活用に関する指導助言ができる。【指導主事】

・ デジタル教科書を活用した授業を実践したり、指導助言したりしようとする意欲を高める。

内容

レクチャー 指導主事の講義（県内事例の紹介）

レクチャー 有識者の講義（これからの授業の在り方）

ワークショップ グループ協議（領域ごとの活用検討）

3. 各実証県における研修改善の取組

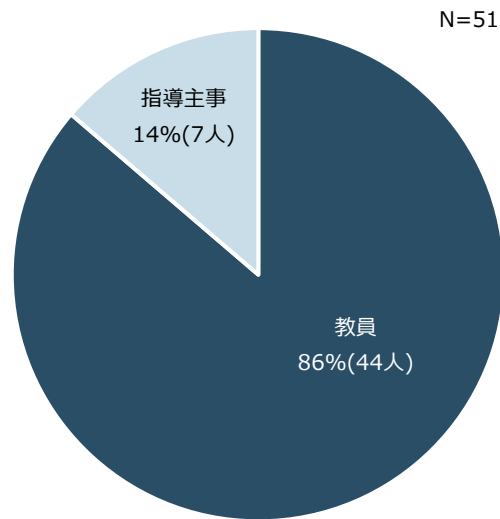
3.3. 奈良県教育委員会

3.3.4. 研修改善（第2回）

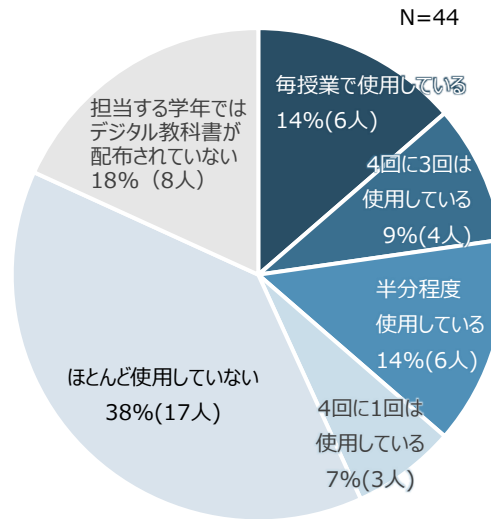


- 本研修の受講者の傾向は、以下のとおりです。
- 本研修の受講者は、教員が約9割を占めており、第1回研修同様に各郡市の代表者を対象としたため、活用が進む教員も多く参加しました。
- 一方で、受講者の約1割を占めている指導主事は、デジタル教科書に関する指導助言頻度が1人を除き「学校訪問時の1/4未満」と回答しており、指導主事を起点としたデジタル教科書の活用促進は、研修開始時点では十分に進んでいない状況が見られました。

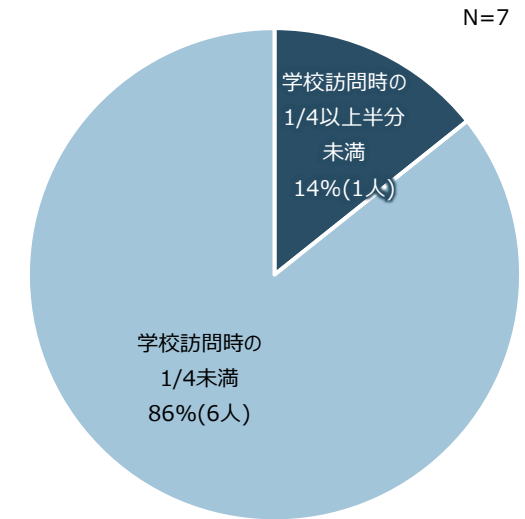
職又は職別



【教員】
デジタル教科書の活用頻度



【指導主事】
デジタル教科書に関する指導助言頻度



3. 各実証県における研修改善の取組

3.3. 奈良県教育委員会

3.3.4. 研修改善（第2回）



- 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

レクチャー

指導主事の講義（県内事例の紹介）



奈良県教育委員会の指導主事から、学習指導要領の要点が確認されるとともに、デジタル教科書の具体的な実践事例が紹介した。

■ 事例紹介の流れ

1. 学習指導要領を基に実践事例に関わる指導上の要点を確認。
2. 授業の流れに沿ってデジタル教科書及び学習支援ソフトの具体的な活用方法の提示。

■ 紹介された事例

- ① 中学校1年生「空間図形」における活用
- ② 中学校2年生「連立方程式」における活用

レクチャー

有識者の講義（これからの授業の在り方）



有識者から、デジタル教科書導入の活用ポイントや意義、これからの授業の在り方について説明した。

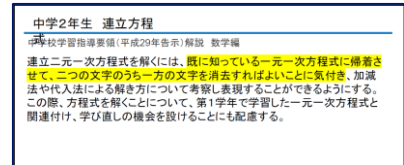
■ 主な講義内容

序盤：実践動画を通じた効果的な活用ポイントの確認

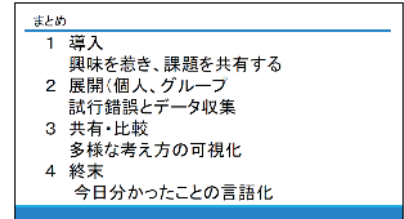
- ・ 過年度事業の好事例動画を視聴し、効果的と考えられるポイントについて個人で整理した後、グループで意見交換。
- ・ デジタル教科書、デジタル教材、学習支援ソフトの機能や活用の可能性について解説。

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- ・ **学習指導要領に記載されている概念的な内容を出発点とし、デジタル教科書や学習支援ソフトを用いた具体的な実践事例と結び付けて説明したことで、抽象的になりがちな内容を実際の授業場面としてイメージしやすくなり、受講者の理解を一層深める様子が見られた。**
- ・ 講義のまとめでは、導入から振り返りに至るまで、授業の各場面に応じた具体的な活用方法が示されていた。受講者は授業全体の流れの中で、どの場面でのようにデジタル教科書を活用するか具体的にイメージすることができ、授業づくりの理解を深めることに繋がっていた。



▲指導要領の記載を冒頭に確認



▲授業場面ごとにデジタル教科書及び学習支援ソフトの活用方法を整理

- ・ 動画視聴に際しては「自身の授業と比較して良いと感じたポイントを見つけてほしい」と事前に示したことで、動画を視聴する視点が明確となり、受講者が積極的に活用ポイントを捉え、メモを取る様子が見られた。

受講者からメモされた主な「活用ポイント」

- ・ 個々のペースで学習を進めることができる。
- ・ 内容を視覚的に捉えやすい。
- ・ 試行錯誤を行いやすい。
- ・ 学習活動の効率化により、児童生徒の思考時間を十分に確保することができる。
- ・ 拡大表示や書き込みが可能である。

次頁に続く

3. 各実証県における研修改善の取組

3.3. 奈良県教育委員会

3.3.4. 研修改善（第2回）

- 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

レクチャー

有識者の講義（これからの授業の在り方）



60分

中盤：デジタル教科書導入の意義の説明

- ・ 学習者の多様化が進んでいる現状を踏まえ、学習者一人一人の特性に応じた指導・支援の重要性について説明。
- ・ 「VARKモデル」を用いて、学習スタイルごとの特徴を整理しながらデジタル教科書や学習支援ソフトをどのように活用できるか説明。

終盤：これからの授業の在り方の説明

- ・ デジタル教科書が、個別最適な学びの実現に有効であることを示した上で、その学びを協働的な学びへと繋げていくことの重要性について、具体的な活用場面を交えて説明。
- ・ 個別学習・協働学習・全体指導を往還しながら授業を構成していく考え方や、その実現に向けた授業設計上のポイントを解説。

ワークショップ

グループ協議（領域ごとの活用検討）



40分

グループに分かれて、算数・数学科の4領域における具体的な活用方法を検討し、全体に向けて発表を行った。

グループワーク：30分

- ・ 1グループ3～5名で教員と指導主事を同一グループに配置。
- ・ グループごとに算数・数学科における4領域の活用を検討。
- ・ 実際にデジタル教科書を手元で操作しながら活動し、グループで意見をホワイトボードに整理。

全体発表：10分

2グループが代表して検討内容を発表し、全体で共有。

※ 1 学習者の学習スタイルを①視覚型②聴覚型③読み書き型④体験型に分類したモデル。

1回目

2回目

計画

実践

アンケート

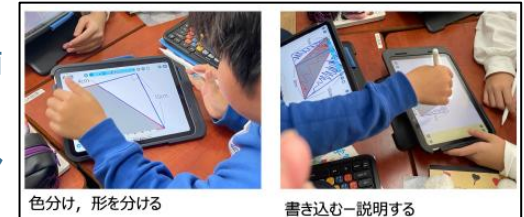
振り返り

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- ・ 「VARKモデル^{※1}」を用いた説明は、学習スタイルごとの特徴に応じたデジタル教科書や学習支援ソフトの活用ポイントが整理され、「学習者の背景の多様化」と併せて説明されたことで、受講者にとって理解しやすい内容となっていた。
- ・ 個別学習・協働学習・全体指導を往還しながら進める授業スタイルの説明において、**小学校第5学年「平面図形の面積」**を題材とした具体的な活用場面と結び付けて示されたことで、**今後の授業や指導助言にデジタル教科書を活用していこうとする意識の高まりが感じられた。**

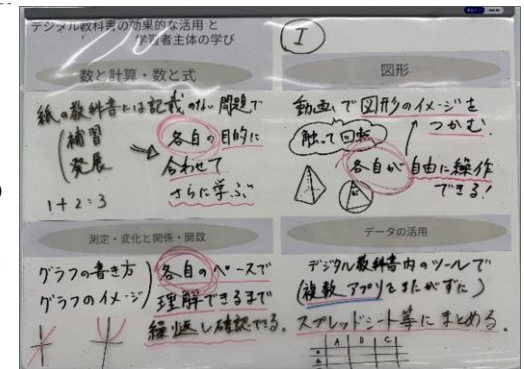


▲個に応じた学習スタイルを「VARKモデル」を用いて説明



▲「平面図形の面積」を題材とした活用の様子

- ・ グループ協議では、「中学校ではこのように活用している」「学校訪問時には○○の視点で指導助言している」等、**校種や立場を越えた多様な視点から意見交流が活発に行われていた。**また、一部のグループでは、学習媒体の選択を学習者に委ねることが主体的な学びに繋がる等、学習者主体の学びに関する議論へと発展していた。
- ・ **領域によっては、活用のイメージが持ちにくく、具体的なアイデアが十分に出来ない様子も見られた。**



▲意見が整理されたホワイトボードの一例

3. 各実証県における研修改善の取組

3.3. 奈良県教育委員会

3.3.4. 研修改善（第2回）



- 受講後アンケート※では、満足度・理解度・活用に対する意欲について自己評価を求めたところ、いずれの項目においても、**9割以上の受講者から肯定的な回答が得られました。**
- また、各項目について自由記述での意見を求めたところ、「**デジタル教科書が学びを広げると理解できた**」「**校種・立場を超えた意見交換ができた**」という声が多く寄せられています。
- 今後の研修に対する意見・要望としては、**領域や単元ごとの具体的な活用例を多く紹介してほしい**といった声が寄せられています。

受講後アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

研修の満足度 92%が満足	研修の理解度 98%が理解	活用に関する意識 90%が現状より向上
満足度に関する自由記述（抜粋） <校種・立場を超えた意見交換ができた> <ul style="list-style-type: none">・校種・立場を超えて活用事例や課題を共有し、新たな視点を得られて良かった。（教員・指導主事） <学習スタイルごとの活用が整理できた> <ul style="list-style-type: none">・機能の紹介に留まらず、学習スタイルに応じたデジタル機能の具体的な使分けを知ることができ、満足した。（教員・指導主事） <県内の実践例を把握することができた> <ul style="list-style-type: none">・県内のデジタル教科書を用いた実践事例を知ることができて、良かった。（教員）	理解度に関する自由記述（抜粋） <デジタル教科書が学びを広げると理解> <ul style="list-style-type: none">・デジタル教科書を活用することで、学びの選択肢を増やせると理解した。（教員）・児童生徒が考える際のアシストツールとして活用できると分かった。（教員）・学習ツールの1つの選択肢になるよう、日々の活用を進めることが大切と感じた。（教員） <実際に操作して機能や活用方法を理解> <ul style="list-style-type: none">・実際にデジタル教科書に触れ、どのような機能があり、どのように使えるかが分かった。（教員） <主体的な学びに有効と理解> <ul style="list-style-type: none">・デジタル教科書を有効に活用すると、児童生徒の主体性を引き出せると感じた。（教員）	今後の活用に関する自由記述（抜粋） <授業改善の視点に加えていく> <ul style="list-style-type: none">・研修を通して多くの新たな発見があり、今後の授業づくりにおける引き出しの1つとして活用していきたい。（教員） <子供たちと一緒に活用を模索> <ul style="list-style-type: none">・活用できる場面を様々に知ったので、子供たちと一緒に触りながら活用を進めたい。（教員）・紙とデジタルそれぞれの利点を踏まえ、子供たちと共に良い活用方法を考えたい。（教員） <活用の目的を意識して指導助言> <ul style="list-style-type: none">・「何のために使うのか」を意識して助言したい。特に、子供が主体的に学習できているかという視点を大切にしたい。（指導主事）

■ 今後の研修に対する意見・要望

- ・ 算数・数学は領域や単元によって学びの性質が大きく異なる教科なので、**領域や単元ごとの具体的な活用例が多く示されると、より検討しやすかった。**
- ・ デジタル教科書の重要性を十分に理解できたため、**個別最適・協働的な学習場面において、どのように活用できるか、具体的に深めていくことに特化した研修に参加したい。**

※ 調査対象：研修受講者（奈良県内の小学校・中学校教員、市町村教委指導主事）

有効回答数：51

調査期間：研修実施後1週間（令和7年12月25日～12月31日）

3. 各実証県における研修改善の取組

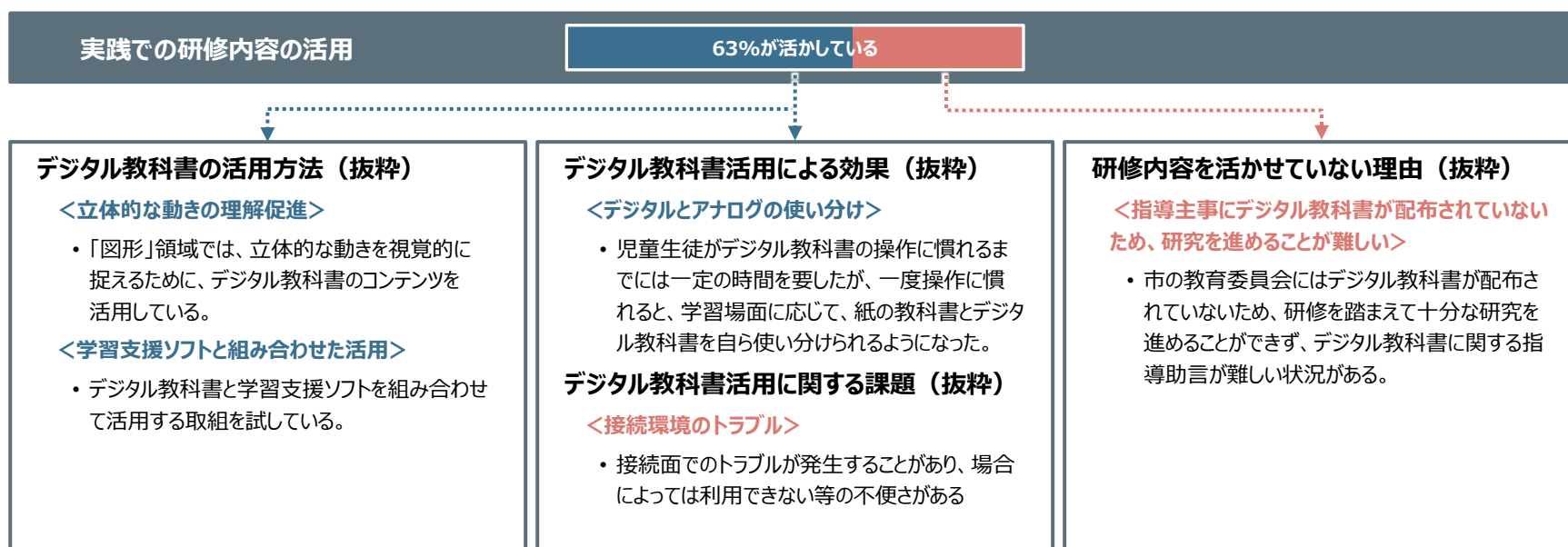
3.3. 奈良県教育委員会

3.3.4. 研修改善（第2回）



- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、約6割が研修内容を活かしていると回答しています。
- 実践の内容としては、「立体的な動きの理解促進」が挙げられ、児童生徒が一度操作に慣れると、学習場面に応じて、紙の教科書とデジタル教科書を自ら使い分けられるようになったとの効果が示されました。
- また、研修内容を実践に活かしていない者からは、「指導主事にデジタル教科書が配布されていないため、研究を進めることが難しい」との声が寄せられています。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）



■ 今後の研修に対する意見・要望

- ・ 指導者用デジタル教科書の活用には慣れているものの、学習者用デジタル教科書の活用はこれまで十分に行えていなかった。実践事例を知ることで、今後更に理解を深め、学習者用デジタル教科書の活用を進めていきたいと感じている。

※ 調査対象：研修受講者（各都市代表の教員・指導主事（算数・数学科を担当）、教員はデジタル教科書が配布されている方、指導主事は指導助言の機会があった方） 有効回答数：8
調査期間：研修実施から約1か月後（令和7年11月17日～11月28日）

3. 各実証県における研修改善の取組

3.3. 奈良県教育委員会

3.3.4. 研修改善（第2回）



- 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振返りを行い、「研修の成果に繋がった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。

成果と課題

今後の研修に向けた取組

研修の成果に繋がった点

概念的な内容を、具体的な実践例と結び付けて説明したこと

- ・ 研修前は、算数・数学科におけるデジタル教科書活用の具体的な授業イメージを持つことが困難な段階であり、活用の必要性に対する理解を深める必要があった。
- ・ そこで、教科の見方・考え方や個別学習・協働学習・全体指導を往還しながら進める授業スタイル等の概念的な内容を、具体的なデジタル教科書の活用方法や実践例と結び付けて説明した結果、受講者は「なぜデジタル教科書を活用するのか」という意義について、理解の深化に繋がった。

今後の研修においても、概念的な内容の説明と併せて具体的な活用方法や実践例を関連付けて取り上げることで、受講者がより深く理解できるよう工夫する。

校種や立場を越えた多様な視点を共有できたこと

- ・ 研修前は、校種や立場を越えたデジタル教科書の実践や考え方を共有する機会は限られていたため、更に視野の拡張を図る観点から、小学校・中学校教員及び指導主事を同一グループに配置した。
- ・ その結果、異なる校種や立場からの意見交流が活発に行われ、受講者が自身の実践を振り返るとともに、新たな視点や問いを獲得する契機となった。

今後の研修においても、研修の目的に応じて、校種や立場を越えた多様な視点を共有できる機会を積極的に設け、受講者間の意見交流を促す。

課題

領域や単元ごとの具体的な活用例の提示

- ・ グループ協議において、領域によってはデジタル教科書の活用のイメージが持ちにくく、具体的なアイデアが十分に出ない様子も見られた。
- ・ 算数・数学科は、領域や単元ごとに特性が異なるため、領域別の具体的な実践事例を提示することが有効であると考えられる。

今後の研修では、算数・数学科における領域や単元ごとの特性を踏まえた、デジタル教科書の具体的な活用例を更に充実させて提示する。

研修担当者の声（本研修の振返り）

小学校・中学校教員及び指導主事を同一のグループに配置したことで、ICT活用の観点に留まらず、教科の観点からデジタル教科書の活用について考えることができました。また、交流の機会を設けたことにより、互いの状況を理解する良い機会となりました。（奈良県 福呂 指導主事）



3. 各実証県における研修改善の取組

3.3. 奈良県教育委員会

3.3.5. 総括

- 奈良県教育委員会での実証を通じて得られた「研修改善のポイント」と、実証を踏まえた「今後の取組」は以下のとおりです。

奈良県教育委員会における研修改善の取組の総括

研修改善のポイント

研修改善 (1回目)

他の教員とデジタル教科書の活用方法について意見交換できたこと → 参考 : p.59

- 研修でグループ協議を実施する際は、積極的にデジタル教科書を活用する教員を中心に意見交換することで、互いにアイデアを出し合い、活用の幅を広げることができる。

研修改善 (2回目)

概念的な内容を、具体的な実践例と結び付けて説明したこと → 参考 : p.65

- 概念的な内容と具体的なデジタル教科書の活用方法や実践例と結び付けて説明することで、受講者は活用意義について理解を深めることができる。

校種や立場を越えた多様な視点を共有できたこと → 参考 : p.66

- 小学校・中学校教員及び指導主事を交えてグループ協議を行うことで、異なる校種や立場からの意見交流が活発に行われ、受講者が自身の実践を振り返るとともに、新たな視点や問いを獲得する契機となる。

実証成果を踏まえた 県における今後の取組

- これまで、小学校・中学校教員と指導主事が直接交流する機会は限られていたため、研修を通じて意見交換の場を設けられたことは非常に有意義でした。県の指導主事から県内の事例を発信したこともデジタル教科書の活用促進に繋がったと考えています。
(奈良県 福呂 指導主事)
- 同形式の研修を外国語科と算数・数学科に分けて実施したことで、各教科に適したデジタル教科書活用を検討することができました。今後はより多くの教科でデジタル教科書活用方法を検討し、県全体での活用を更に進めていきたいと考えています。
(奈良県 福呂 指導主事)

3. 各実証県における研修改善の取組

- 3.1. 埼玉県教育局
- 3.2. 福井県教育庁
- 3.3. 奈良県教育委員会
- 3.4. 熊本県教育庁
- 3.5. 鹿児島県教育庁



3. 各実証県における研修改善の取組

3.4. 熊本県教育庁

3.4.1. 基本情報

- 実証研究に御協力いただいた熊本県教育庁に関する基本情報、実証前の課題認識は以下のとおりです。

県担当部署	熊本県教育庁 市町村教育局 義務教育課		
県担当者	松下 智恵 指導主事	担当有識者	札幌国際大学 岩崎 有朋 教授
県における 過年度の取組	<ul style="list-style-type: none">・ 県の事業としてICT活用に関する多様な研修の実施。・ 学校現場で活用できる事例集の作成にも継続的に取り組んでおり、その取組の中で、一部の学校と組み合わせてデジタル教科書を積極的に活用した具体的な実践事例を創出。・ 作成した事例集を県の公式HPにて発信。		

実証前の 課題認識



学校・教員

➤ デジタル教科書の意義や効果の理解が進んでいない。

- ・ 端末や指導者用デジタル教科書は活用しているが、学習者用デジタル教科書の活用は進んでおらず、意義や効果の理解も浸透していない状況。
- ・ 教科の特性に応じた効果的な活用方法や、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に繋がる活用方法を更に知る必要がある。

教育委員会・指導主事

➤ 指導助言の具体的なイメージを十分に持てていない。

- ・ デジタル教科書の活用経験が乏しく、学校訪問等でも先進的な授業に触れる機会は少ない。そのため、どのように指導助言すべきか、具体的にイメージできていない。
- ・ デジタル教科書の特性に対する理解が十分とは言えず、その特性を活かして学習を促す指導助言が行えていない。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.4. 熊本県教育庁

3.4.2. 年間計画

- 熊本県教育庁における、令和7年度のデジタル教科書の活用に関する研修計画は以下のとおりです。このうち、本事業では、「『熊本の学び』わくわくサークル」と「第2回『熊本の学び』作業部会」を研修改善に関する実証対象としました。

	対象	概要
『熊本の学び』 わくわくサークル (第1回研修) 実証対象：p.74	・ 小中学校教員、指導主事 合計約100名	<ul style="list-style-type: none">・ デジタル教科書の意義の理解を目的に有識者による講義を実施。 また、活用による効果を体感するとともに、活用イメージをもつことができるよう模擬授業を実施。・ 幅広く受講を促せるよう、参集・オンラインのハイブリッド型研修とした。
第1回 『熊本の学び』 作業部会	・ 県・教育事務所指導主事 17名	<ul style="list-style-type: none">・ 県内の指導主事間で、紙・デジタル問わず教科書そのものの理解を深めることを目的に研修を実施。・ 参集形式で約1時間程度、本事業の過年度成果物である事例動画を視聴しながらグループで協議。
第2回 『熊本の学び』 作業部会 (第2回研修) 実証対象：p.81	・ 県・教育事務所指導主事 31名	<ul style="list-style-type: none">・ デジタル教科書の機能や活用の可能性を理解し、訪問指導や校内研修においてデジタル教科書の活用に関する具体的な提案ができるよう、有識者による講義、グループでの授業検討、受講者間で模擬授業を実施。・ 具体的には、有識者の講義を踏まえて、グループでデジタル教科書を活用した授業検討を行い、その後、ワールドカフェ形式で全体交流しながらグループで検討した授業を互いに実施し合った。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.4. 熊本県教育庁

3.4.3. 研修改善（第1回）



- 1回目の実証対象とした研修（『熊本の学び』わくわくサークル）の概要は以下のとおりです。



研修の概要

研修のポイント

- ✓ 地理的制約に左右されず、誰でも気軽に受講できるよう、**参集・オンラインのハイブリッド型研修**とする。
- ✓ 研修を通じて、気づきや振り返りを書きとめ、それらを基にオンライン上で交流ができるよう、**デジタルのワークシートを用意**する。
- ✓ 各受講者が、授業における活用イメージが持てるよう、**デジタル教科書を活用した模擬授業を実施**する。

対象者：熊本県内の小中学校教員、指導主事 約100名

実施方式：参集+オンライン

目的

① 知識・理念等の理解

② スキル・技能等の習得

③ 意識・行動等の変容

目標

・「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させる授業づくりと関連して、デジタル教科書の意義や効果を理解する。

・模擬授業やデジタル教科書の操作を通じて、デジタル教科書の効果的な活用場面や活用方法のイメージを持つ。

・デジタル教科書を活用した授業を実践したり指導助言したりする意欲を高める。

内容

研修前の取組 事前アンケートの実施

レクチャー 有識者の講義（授業づくりの要点の理解）

レクチャー 模擬授業（活用イメージの具体化）

リフレクション 個人の振り返り（気づき等の明確化）

3. 各実証県における研修改善の取組

3.4. 熊本県教育庁

3.4.3. 研修改善（第1回）

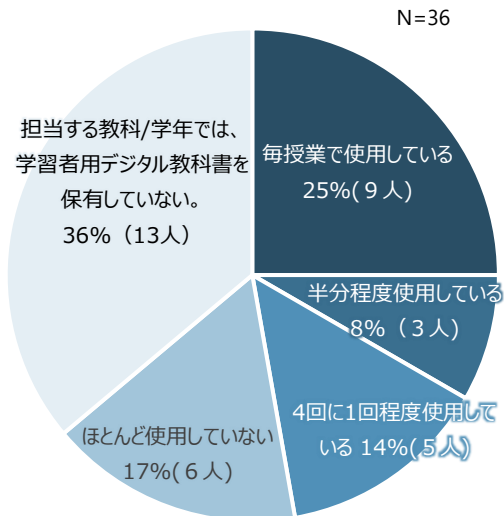


- 本研修の受講者の傾向※は、以下のとおりです。
- 本研修の受講者は、教員（教諭・講師・管理職等）が約4分の3、指導主事が約4分の1を占めております。
- 教員はデジタル教科書の活用が進んでいる方も多い一方で、指導主事によるデジタル教科書の指導助言は「学校訪問時の1/4未満」と回答した者が8割以上を占めており、指導主事を起点としたデジタル教科書の活用促進は研修開始時点では、十分に進んでいない状況が見られました。

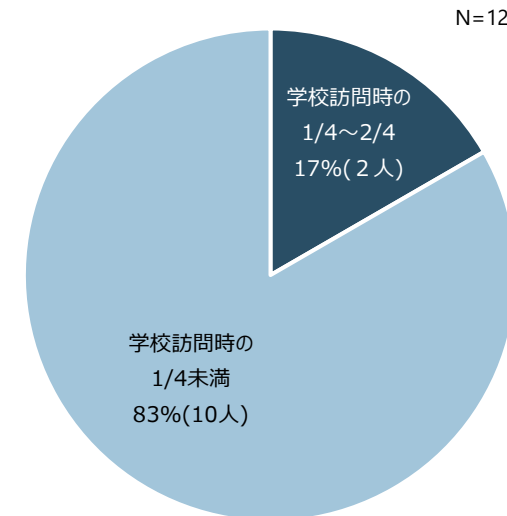
役職



【教員】
デジタル教科書の活用頻度



【指導主事】
デジタル教科書に関する指導助言頻度



※ この傾向は受講後アンケート結果に基づくものであり、実際の受講者数と有効回答数が異なる。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.4. 熊本県教育庁

3.4.3. 研修改善（第1回）

- 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。



研修の流れ

研修前の取組

事前アンケートの実施

受講者のデジタル教科書の活用に関する状況や課題をアンケートで把握した。

レクチャー

有識者の講義（授業づくりの要点の理解）



有識者から、随所で受講者間の交流の時間を設けながら、効果的な活用に至るまでの段階や授業づくりに必要な視点を説明した。

■ 主な講義内容

前半：効果的な活用に向けた段階

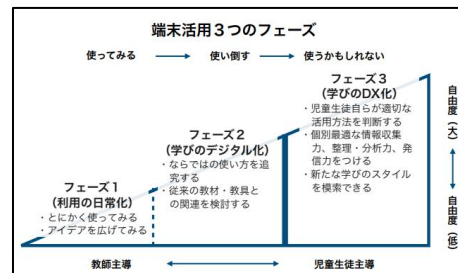
- デジタル教科書の効果的な活用に至るまでには段階があることを説明。その後、各受講者に対して「自身がどの段階にいるか」を問いかけ、自身の立ち位置を意識させた。

後半：デジタル教科書を用いた授業づくり

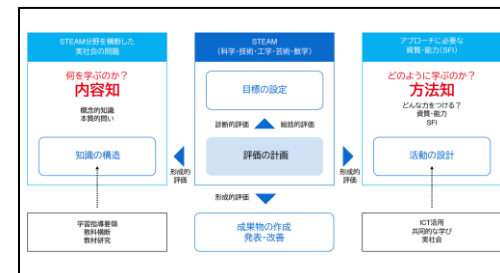
- 事例動画中の授業者や学習者のインタビュー部分を視聴。それぞれの立場からデジタル教科書の効果を紹介。
- 過年度事業の事例集を基に、授業者主導、学習者主導の場面に着目しながら活用方法を解説。あわせて、事例集では、活用のポイントが一般化されており、教科を超えて応用が可能であることを説明。
- 単元構想時に重視すべき視点としてPBL（Project Based Learning）デザインを紹介。何を学ぶか（内容知）、どのように学ぶか（方法知）の2軸で授業づくりを考えることの重要性を説明。

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 事前アンケートでは、「デジタル教科書でどのようなことができるか分からず、活用への一歩が踏み出せない」「活用は始めてみたものの、児童が主体となって学びを進める段階には至っていない」等の課題が挙げられている。これらのことから、デジタル教科書を効果的に活用するまでの取組の進め方について、一定のニーズがあることがうかがえた。
- 有識者が「端末活用の3つのフェーズ（下左図）」を基に、**デジタル教科書の効果的な活用に向けた道筋を説明**。受講者のメモや頷きが多く、訴求することができていた。また、**各受講者に「自身がどの段階にいるか」を投げかけ、自身の立ち位置を明確に認識させたこと**で、以降の研修において、それぞれの活用段階に応じた気付きや学びを得ることができていた。
- 有識者が、「PBLデザイン（下右図）」を基に、単元構想時の要点を解説した。「端末活用のフェーズ1では、どのように学ぶか（方法知）に着目し、子供たちと活用に慣れていくと良い。子供たちが活用に慣れ、学習手段として使いこなせるようになったら、何を学ぶか（内容知）に着目すると良い。」と説明した際に、受講者の頷きやメモが多かった。**単元構想時に意識すべき点をフェーズごとに分けて解説したこと**で、各受講者の立ち位置に応じた取組が明確化され、高く訴求した。



▲効果的な活用に至るまでの段階について説明



▲PBL（プロジェクト型学習）デザインを紹介

次頁に続く

3. 各実証県における研修改善の取組

3.4. 熊本県教育庁

3.4.3. 研修改善（第1回）

- 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

レクチャー

模擬授業（活用イメージの具体化）



20分

有識者が授業者、受講者が学習者の立場となり、模擬授業を行った。

■ 模擬授業の主な内容

（題材：東京書籍株式会社 中学校2年生 理科「ホットケーキの秘密」）

「本時の課題」蒸しパンを作る時に、ベーキングパウダーの有無で出来上がりに違いが出る理由は何か説明する。

- ① **学習者の立場**：デジタル教科書内の写真や資料、文章を根拠としながら、グループごとに説明内容を整理。
- ② **授業者の立場**：ルーブリック（本時の評価基準）をいつ子供たちに共有すると良いかについてグループで議論。
- ③ **総括**：学習活動の意図や評価等、授業そのものを子供たちと共有しながら作り上げていくことで、子供たちの主体性を引き出し、学習者主体の学びへと繋がることを説明。

リフレクション

個人の振り返り（気づき等の明確化）



10分

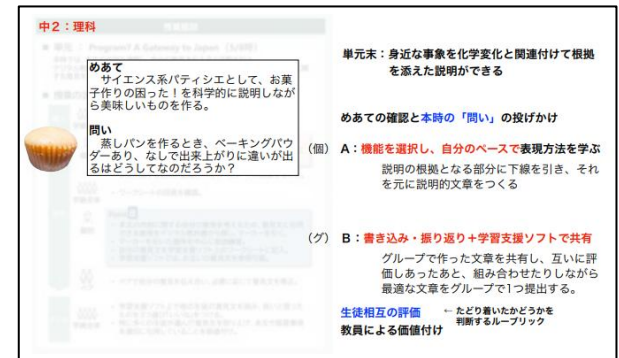
各受講者が、研修を振り返り、気づきや発見、今後活かしたいこと等について、オンライン上のワークシートに記入。他者の記入内容も確認・参照できるようにした。



研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 模擬授業におけるグループワークでは、「例えば、根拠となる箇所に線を引き、それらを見せ合って説明すると良い。」「実験動画は視覚的に捉えやすいし、困った時に何度でも見ることができる。」等の発言があった。**デジタル教科書の操作を通じて、実際の授業における活用イメージを具体化することができた。**

- ルーブリックを子供に共有するタイミングについて、熱心に議論する様子が見られた。デジタル教科書活用と同様に、評価の中身を子供に共有することも、学習者主体の学びを引き出す重要な要素であると確認された。
- 円滑にグループワークを行うために、事前にオンライン接続を確認することが望ましい。



▲ 先行事例を応用しながら模擬授業を実施
（赤字箇所：先行事例から応用したポイント）

- オンライン上で、他の受講者のワークシートを参照しながら振り返る様子も見られた。他者から新たな視点を取り入れることで、学びの幅を広げる効果があった。

講義中のメモ

- 3つのフェーズ、常に自分の学級がどこにいるのかを認識することが重要。
- どのように学ぶか（方法知）のみとなっていないか。活用は手段であることを意識する。

模擬授業中のメモ

- 教科書のキャプチャは根拠を整理する時に便利。まずは操作に慣れていきたい。
- 評価の視点を明確にするため、ルーブリックを子供に共有することが大切。

振り返り

- 最初は時間をかけて活用方法に慣れていく時間が必要だと分かった。
- 授業そのものを子供たちと共有しながら作ってみたい。

▲ 受講者がオンライン上のワークシートに実際に記載した内容

3. 各実証県における研修改善の取組




3.4. 熊本県教育庁

3.4.3. 研修改善（第1回）



- 受講後アンケートでは、満足度・理解度・活用に対する意欲について自己評価を求めたところ、いずれの項目についても**9割以上の受講者から肯定的な回答が得られました。**
- また、各項目について自由記述での意見を求めたところ、「**模擬授業を通じて活用イメージを具体化することができた**」「**デジタル教科書の段階的な活用について理解することができた**」といった意見が多く挙げられました。
- 今後の研修に対する意見・要望としては、「**より実践的な活用法を学びたい**」といった声が寄せられています。

受講後アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

研修の満足度  92%が満足	研修の理解度  96%が理解	活用に関する意識  96%が現状より向上
満足度に関する自由記述（抜粋） <模擬授業を通じた活用イメージの具体化> <ul style="list-style-type: none">・学習支援ソフトを活用した協働学習の場が、他教科への応用のヒントになった。（教員） <子供と学ぶことへの意欲の高まり> <ul style="list-style-type: none">・子供たちと実践してみたいことが多く見付き、満足感を得られた。（教員）・機能や目的を理解し、有用性を認識することで実際に指導助言に繋がれそうと感じた。（指導主事） <他者参照による学びの深化> <ul style="list-style-type: none">・他者の振返りを読むことで「たしかに！」と共感する場面が多く、講義内容の理解が一層深まった。（教員）	理解度に関する自由記述（抜粋） <デジタル教科書の段階的な活用の理解> <ul style="list-style-type: none">・デジタル教科書の活用段階の中で、自分がどの段階にいるかを確認でき、今後の方向性を見出せた。（教員） <学習者主体の学びの重要性を理解> <ul style="list-style-type: none">・児童生徒に学びを託し、見守る教員の在り方を今後の指導に活かしたい。（指導主事） <具体的な活用イメージの理解> <ul style="list-style-type: none">・デジタル教科書の機能を把握し、授業の場面をイメージできるようになった。（教員）	今後の活用・助言に関する自由記述（抜粋） <学習の目的に沿ったデジタル教科書の活用> <ul style="list-style-type: none">・デジタル教科書の使用を目的とせず、あくまで学習の手段として位置づけることを助言していきたい。（指導主事） <児童生徒主体の学びにおける活用> <ul style="list-style-type: none">・教員が一方向的に教えるのではなく、子供が自分のペースで学び、仲間と協力しながら学習を進められる授業展開を実践したい。（教員） <年間を見通した計画的活用> <ul style="list-style-type: none">・授業者に対して年間を通した活用計画を問いかけ、計画的にICTを取り入れられるよう指導していきたい。（指導主事）

■ 今後の研修に対する意見・要望

- ・ 今回の模擬授業は大変参考になった。次回は**より長い時間模擬授業を確保し、課題の数を増やすことで、様々なケースを想定し、実践的な活用法を学びたい。**
- ・ オンライン配信の際に、音声途切れたり映像が乱れたりする場面があった。今後は安定した配信環境を整えてほしい。

※ 調査対象：研修受講者（熊本県内の小学校・中学校教員、指導主事） 有効回答数：48 調査期間：研修実施後2週間（令和7年8月21日～9月3日）

3. 各実証県における研修改善の取組

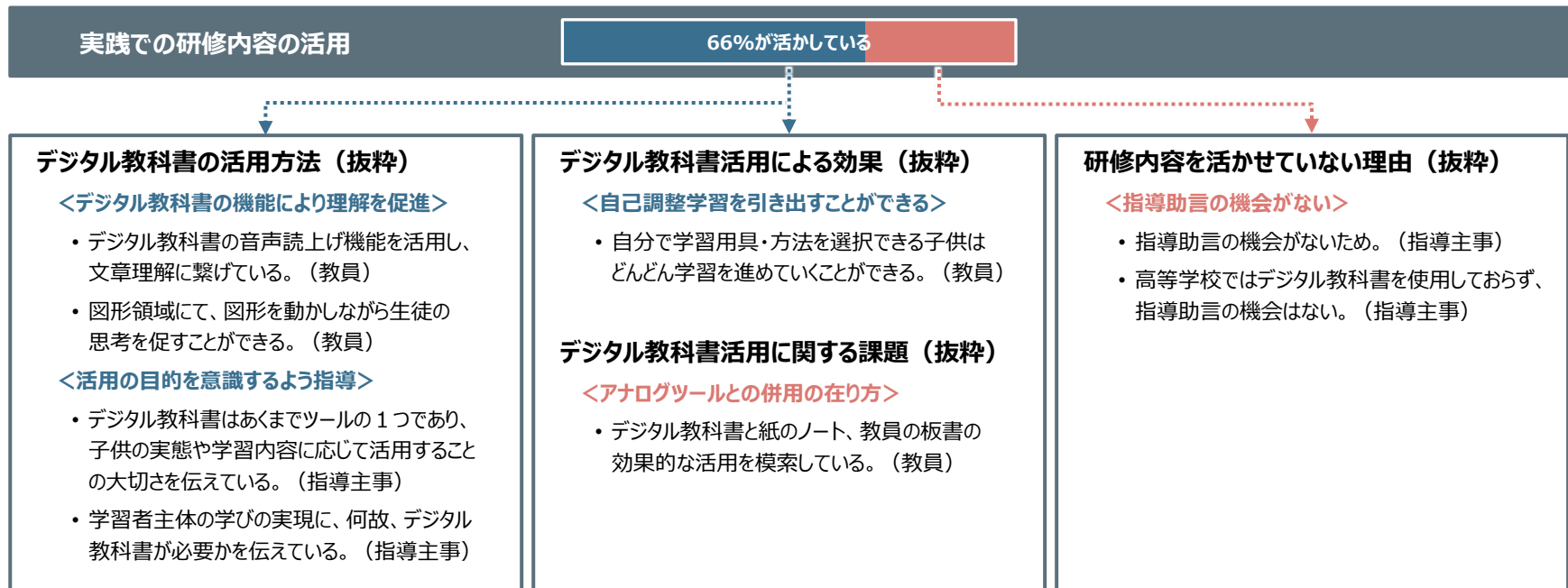
3.4. 熊本県教育庁

3.4.3. 研修改善（第1回）



- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、**6割以上が研修内容を活かしている**と回答しています。
なお、研修内容を実践に活かしていないと回答した者はいずれも指導主事で、「指導助言の機会がなかった」と回答しています。
- 実践の内容について、教員は、子供たちの理解促進に向け、本文読上げ機能や図形領域のコンテンツを活用していると回答があり、**研修後、デジタル教科書に触れながら活用を進めている様子**がうかがえます。
- 指導主事は、教員に対し、活用「自体」が目的化しないよう**活用の意義や目的を意識するよう助言**していることが分かります。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）



■ 今後の研修に対する意見・要望

- ・ デジタル教科書の実践例を更に知ることで、教科特性の応じた指導の充実を図りたい。（教員）
- ・ 学習者用デジタル教科書の取扱いに関する国の動向や、活用の好事例については引き続き情報が欲しい。（指導主事）

※ 調査対象：研修受講者（小学校・中学校教員、指導主事） 有効回答数：12 調査期間：研修実施から約2か月後（令和7年10月6日～10月24日）

3. 各実証県における研修改善の取組

3.4. 熊本県教育庁

3.4.3. 研修改善（第1回）

- 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振返りを行い、「研修の成果に繋がった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。



成果と課題

今後の研修に向けた取組

研修の成果に繋がった点

デジタル教科書の具体的な活用段階を強調して示したこと

- ・ 研修前の受講者は、効果的な活用に至るまでの道筋を想像できていなかった。
- ・ そこで、講義冒頭に、活用段階を示し、現状、自身がどの段階に位置しているか示し、PBL等も用いながら、今後どのように活用を進められるか、意識付けを行った。
- ・ その結果、受講者は自らの立ち位置を踏まえて研修に取り組み、効果的な活用に至るまでの道筋を理解するとともに、ネクストアクションを明確化することができた。

今後の研修においても、受講者が自身のデジタル教科書の活用段階を把握できるようにするとともに、段階に応じた活用の進め方を理解してもらう。

模擬授業にて、実際の活用イメージを想起させたこと

- ・ 研修前の受講者は、実際の授業での活用イメージを十分に持てていなかったため、活用が進んでいなかった。
- ・ そこで、有識者による模擬授業を実施し、学習者の立場を体験してもらうことで、具体的な活用イメージを想起しやすい環境を整えた。
- ・ その結果、受講者は、デジタル教科書活用の意義や効果を実感をもって理解し、授業における具体的な活用イメージを形成することができた。

今後の研修においても、活用段階に応じて、具体的な活用イメージを想起しやすいように研修を設計する。

課題

実践的な活用方法を学ぶ機会の更なる確保

- ・ 本研修は 1.5 時間という限られた時間の中で、デジタル教科書活用の意義や効果、具体的な活用イメージを、初期段階のステップとして十分に理解してもらった。
- ・ 今後の研修については、「具体的な授業への展開をより深め、実践に直結する内容を更に取り上げてほしい」といった意見が寄せられた。

今後の研修では、デジタル教科書の活用方法検討といったアウトプットの時間を設け、デジタル教科書の活用を受講者自身のものとして定着してもらう。

研修担当者の声（本研修の振返り）

本研修は、参集とオンラインを併用したハイブリッド形式で実施したことで、より多くの受講者を募ることができ、幅広く訴求できたと感じています。今後は更に理解の深化を図るため、対象を明確にした研修を実施することも検討していきたいです。（熊本県 松下 指導主事）



3. 各実証県における研修改善の取組

3.4. 熊本県教育庁

3.4.4. 研修改善（第2回）



- 2回目の実証対象とした研修（第2回『熊本の学び』作業部会）の概要は以下のとおりです。



研修の概要

研修のポイント

- ✓ 各教科の特性に即したデジタル教科書の活用方法が検討されるよう、**受講者を専門教科ごとにグループ編成**する。
- ✓ 活用イメージを具体化するために、グループごとに**具体的な授業場면을想定した模擬授業を検討・実施**する。
- ✓ 模擬授業は、教科を超えてデジタル教科書の活用・指導助言のポイントが共有できるよう、**ワールドカフェ形式でグループを超えた交流を促す**。

対象者：熊本県内の指導主事 31名

実施方式：参集

目的

① 知識・理念等の理解

② スキル・技能等の習得

③ 意識・行動等の変容

目標

・ デジタル教科書の意義や授業での活用・指導助言のポイントを理解することができる。

・ デジタル教科書を活用した授業づくりに関する指導助言ができる。

・ デジタル教科書の活用に関する指導助言について自信をもつことができる。

内容

レクチャー 有識者の講義（指導助言の視点の明確化）

ワークショップ グループ協議（教科ごとの授業検討）

ワークショップ 模擬授業（相互参観による授業体験）

3. 各実証県における研修改善の取組

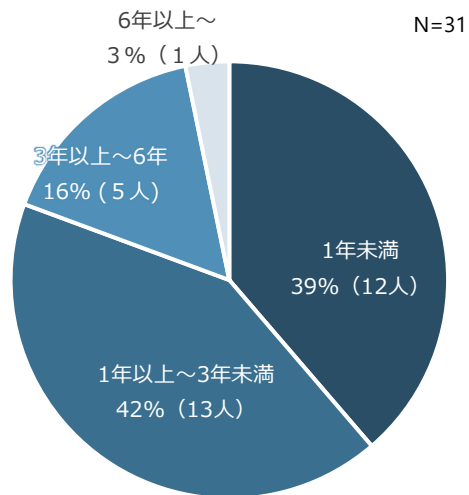
3.4. 熊本県教育庁

3.4.4. 研修改善（第2回）

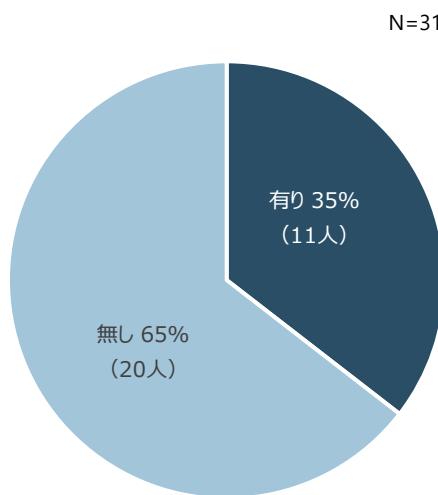


- 本研修の受講者の傾向は、以下のとおりです。
- 受講者は全て指導主事であり、その経験年数は「3年未満」が約8割を占め、比較的経験年数の浅い指導主事が多い構成となっています。
- 約7割の指導主事が学校在籍時にデジタル教科書の活用経験がなく、また、デジタル教科書の活用に関する指導助言の機会についても「学校訪問時の1/4未満」と回答した者が全体の9割を占めていることから、研修開始時点においては、活用経験及び指導助言経験の双方が十分とは言えない状況にあることがうかがえます。

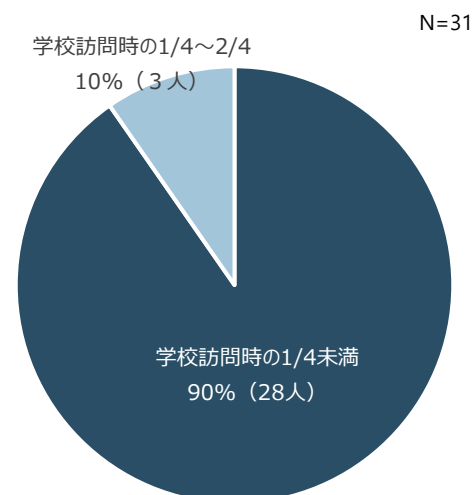
指導主事経験年数



デジタル教科書の活用経験



デジタル教科書に関する指導助言頻度



3. 各実証県における研修改善の取組

3.4. 熊本県教育庁

3.4.4. 研修改善（第2回）



- 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

レクチャー 有識者の講義（指導助言の視点の明確化） 30分

有識者から、指導主事に求められる役割や視点を踏まえながら、デジタル教科書の活用に関する知見が体系的に共有した。

■ 主な講義内容

序盤：指導主事に必要なマインドセット

- 「現場への働きかけの難しさ」といった課題を起点に指導主事の役割を再確認するとともに、学校現場への提案の幅を広げるため、多様な考え方に触れ、自身の価値観や認識をアップデートすることの必要性を強調。

中盤：デジタル教科書の具体的な活用方法

- 「デジタル教科書にはどのような機能があるか」「[過年度事業の好事例動画](#)を視聴した感想」を受講者同士で意見交換。
- デジタル教科書の基本的な機能を説明した後、効果的な活用場面と指導助言時に求められる「問い」や「価値付け」との関連を解説。

終盤：グループ協議における授業検討のポイント

- 研修後半のグループ協議に向け、模擬授業を検討する際に意識すべき「授業検討のポイント」について説明。

授業検討のポイント

1. 授業では課題の解決に向けて自分で考え自分から取り組んでいる。
2. 自分の考えを発表する機会を、自分の考えが上手く伝わるよう、資料や文章、話の組立て等を工夫して発表している。

次頁に続く

- ・ 課題を起点に指導主事の役割を冒頭で確認したことで、**受講者は指導助言の幅を広げる重要性、デジタル教科書の効果的な活用方法を学ぶ必要性を理解し、研修への意欲が高まっている様子が見られた。**
- ・ 受講者同士の意見交換では、「解説動画（スマートレクチャー）を児童生徒が自分の好きなタイミングで繰り返し視聴できる点は有効」といった機能面を評価する意見や、「算数・数学科の図形領域では、紙教材よりもデジタル教科書のシミュレーション機能の方が児童の集中を保ちやすい」等、デジタル教科書の活用をイメージし、**具体的な授業場면을想定した活発な意見が交わされていた。**
- ・ デジタル教科書の機能確認後に、効果的な活用場面と指導助言時の「問い」「価値付け」を関連付けて説明したことで、**理論と実践を結び付けながら理解を深めて、学校現場への指導助言におけるヒントを得ている様子**がうかがえた。

見出された効果的場面	指導助言の時の「問い」「価値付け」
学習者用端末の操作への慣れ	<ul style="list-style-type: none"> ・ いつでも使える、使ってもよい環境なのか？ ・ カメラ、共同編集、クラウド保存など多様な機能が使えるのか？ ・ 使う上でのリテラシーは育っているのか？
デジタル教科書の機能の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・ 書き込み、拡大、保存などの機能を理解しているのか？ ・ 授業で多様な機能を体験する機会は十分確保されているのか？ ・ 自分なりの（得意な）使い方をつかんでいるのか？
学習支援ソフトウェアとの連携	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習支援ソフトウェアの機能・特徴を知っているのか？ ・ 必要ときに使える環境なのか？ ・ 連携活用によってメリットを感じる場面が仕掛けであるのか？
今の学習活動の目的を理解	<ul style="list-style-type: none"> ・ その学習に取り組んでみたくなるような課題設定なのか？ ・ この活動でたどり着くゴールが分かっているのか？ ・ そのために何をどうしたらいいのかが理解できているのか？
内容理解につなげる試行錯誤	<ul style="list-style-type: none"> ・ 考えの根拠がデジタル教科書から見出だせる課題設定なのか？ ・ 納得・理解できるだけの十分な活動時間が確保されているのか？ ・ 個の理解と協働による理解の場が仕掛けられているのか？

▲効果的な活用場面と指導助言時の「問い」「価値付け」

3. 各実証県における研修改善の取組

3.4. 熊本県教育庁

3.4.4. 研修改善（第2回）



■（前頁の続き）

研修の流れ

ワークショップ **グループ協議（教科ごとの授業検討）** 50分

専門教科別にグループを編成し、教科特性を踏まえたデジタル教科書の活用を意識しながら、模擬授業の内容を整理した。

■グループ協議の実施方法

- ・ 国語、算数・数学、理科、社会、外国語の主要5教科ごとに3～4人のグループを編成。
- ・ サンプル版のデジタル教科書を活用し、授業の一場面を想定して、活用する機能や授業展開について検討。
- ・ 検討内容は、オンライン上のワークシートに整理・記録。

ワークショップ **模擬授業（相互参観による授業体験）** 55分

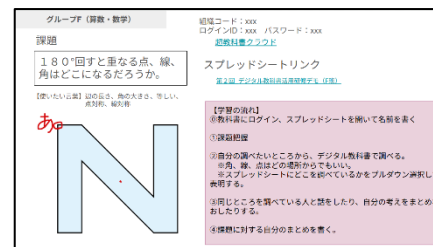
ワールドカフェ形式で、「授業者」と「学習者」の役割を分担しながら、デジタル教科書を活用した模擬授業を実施した。

■ワールドカフェの実施方法

- ・ デジタル教科書を実際に操作しながら模擬授業を実施。模擬授業後、活用方法や指導助言のポイントについて説明。
- ・ 各セット開始時に、各グループから1名を授業者として残り、他のメンバーは学習者として席を移動。受講者は他グループを順に回り、発表を聞く。これを3セット行い、セットごとに授業者を交代。
- ・ 発表者と受講者の間で、模擬授業の進め方やデジタル教科書の活用の工夫点、改善点等について意見交換を実施。

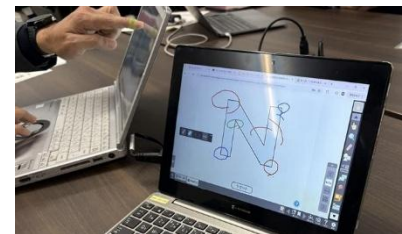
研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- ・ 協議の中で**デジタル教科書の機能を発見し、相互に紹介し合うことで、多くの受講者が新たな気付きを得ていた**。また、専門教科ごとにグループ編成したことにより、専門性を踏まえた検討がなされていた。
- ・ 後半の活動では、全員が模擬授業を実施する必要があったため、一人一人が議論に主体的に参加していた。また、実際に授業の1場面を想定したことで、活用のポイントを詳細に確認できていた。
- ・ 算数・数学の授業を検討していたグループを除き、**学習支援ソフトと組合せた活用方法については検討されていない様子**だった。



▲「算数・数学」の授業を検討していたグループのワークシート

- ・ 算数・数学を扱った模擬授業では、個別にデジタル教科書のシミュレーション機能を用いて試行錯誤した後、全体でその内容を振り返る展開が見られた。前段の講義の中で触れられていた「効果的な活用場面」を意識した授業検討がなされ、個別での活動場面と、学級全体での指導場面を意図的に区別した授業構成がなされていた。
- ・ 他グループの模擬授業を体験することで、児童生徒の立場からデジタル教科書の効果を感じる機会となり、**学習者目線で考えること、経験することの重要性を再認識する契機**となっていた。



▲ デジタル教科書を活用して、模擬授業を受講している様子

3. 各実証県における研修改善の取組

3.4. 熊本県教育庁

3.4.4. 研修改善（第2回）



- 受講後アンケートでは、満足度・理解度・活用に対する自信について自己評価を求めたところ、いずれの項目についても**全受講者から肯定的な回答が得られました。**
- また、各項目について自由記述での意見を求めたところ、「**具体的な場面での活用を学ぶことができた**」「**指導助言の幅を広げる重要性を再認識した**」といった意見が多く挙げられました。
- 今後の研修に対する意見・要望としては、**学習支援ソフトと効果的に組み合わせる方法を知りたい**という声が寄せられています。

受講後アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

研修の満足度 100%が満足	研修の理解度 100%が満足	活用に対する自信 100%が現状より向上
<p>満足度に関する自由記述（抜粋）</p> <p>＜具体的な場面から活用・指導助言の視点を学ぶことができた＞</p> <ul style="list-style-type: none">・ 模擬授業の検討を通じて、実際の授業場面のように活かすかを具体的に考えることができた。・ グループで試行錯誤しながら授業案を作成する過程において、授業場面に応じたデジタル教科書の効果的な使い方を理解するとともに、指導助言の視点を学ぶことができた。 <p>＜他校や他教科の受講者から学ぶことができた＞</p> <ul style="list-style-type: none">・ 異なる教科の模擬授業を参観し、多様な視点やアイデアを得ることで、授業づくり新しい発想を取り入れることができた。	<p>理解度に関する自由記述（抜粋）</p> <p>＜指導助言の幅を広げる重要性を再認識＞</p> <ul style="list-style-type: none">・ 課題への対応策として、デジタル教科書を積極的に1つの手立てとして提案することで、より効果的な指導助言ができると再認識した。・ 自身が新たな学びに挑戦する姿勢が、効果的な指導助言に繋がると理解した。 <p>＜デジタル教科書の指導助言におけるポイントを理解＞</p> <ul style="list-style-type: none">・ デジタル教科書の指導助言においては、「まずは使ってもらおう」ことを重視し、教員自身が効果的な活用方法を模索しながら、授業に継続的に取り入れていく必要があると理解した。	<p>今後の活用に関する自由記述（抜粋）</p> <p>＜課題に応じたデジタル教科書活用を促したい＞</p> <ul style="list-style-type: none">・ 訪問指導や校内研修において、課題に応じて、デジタル教科書を活用した具体的な手立てを、新たな選択肢として提示していきたい。 <p>＜教科特性に応じた活用方法を提案したい＞</p> <ul style="list-style-type: none">・ デジタル教科書の機能を理解し、教科特性に応じた効果的な活用方法を提案したい。 <p>＜学習者主体の学びを支える活用を広げたい＞</p> <ul style="list-style-type: none">・ 授業の主語、学びの主語を問いながら、学習者主体の学びを支えるような指導助言を行い、その際の選択肢として、デジタル教科書を提示したい。

■ 今後の研修に対する意見・要望

- ・ **デジタル教科書と学習支援ソフトを効果的に組み合わせる方法を知りたい。**
- ・ 教科書会社や教科によって使用できる機能やツールが異なるため、**全てのデジタル教科書のコンテンツをいつでも自由に使用**できると良い。

※ 調査対象：研修受講者（熊本県内の指導主事） 有効回答数：31 調査期間：研修実施後1週間（令和7年12月4日～12月11日）

3. 各実証県における研修改善の取組

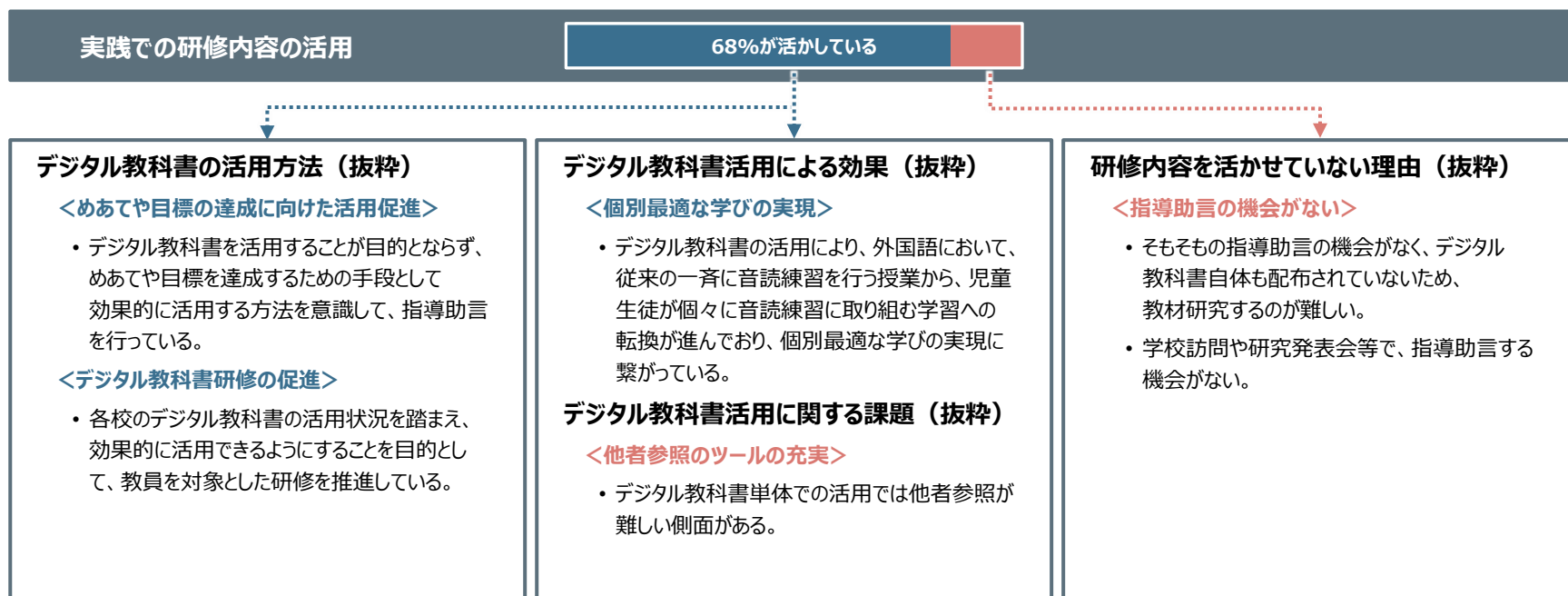
3.4. 熊本県教育庁

3.4.4. 研修改善（第2回）



- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、**6割以上が研修内容を活かしている**と回答しています。なお、研修内容を実践に活かしていないと回答した者はいずれも、「指導助言の機会がなかった」と回答しています。
- 実践の内容について、**めあてや目標達成の手段としてデジタル教科書を活用することを意識して指導助言を行っている**と回答がありました。また、**研修後、デジタル教科書が個別最適な学びを実現するための手段として活用されつつある様子**がうかがえます。
- 今後の研修では、**他者参照を円滑に行うため、学習支援ソフトとの組み合わせについて理解を深める**ことが求められます。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）



■ 今後の研修に対する意見・要望

- ・ 他者参照を円滑に行うため、デジタル教科書と学習支援ソフトを適切に組み合わせる方法について理解を深めたい。
- ・ デジタル教科書への理解を深め、教材研究を行うために、指導主事にも教科書を配布してほしい。

※ 調査対象：研修受講者（県・教育事務所指導主事） 有効回答数：14 調査期間：研修実施から約2か月後（令和8年1月29日～2月13日）

3. 各実証県における研修改善の取組

3.4. 熊本県教育庁

3.4.4. 研修改善（第2回）



- 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振返りを行い、「研修の成果に繋がった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。

成果と課題

今後の研修に向けた取組

研修の成果に繋がった点

デジタル教科書を触りながら、授業展開を検討する機会を設けたこと

- 研修前の受講者は、デジタル教科書の機能や効果的な活用方法を十分に理解していなかった。
- そこで、専門教科ごとにグループ編成し、サンプル版のデジタル教科書を実際に操作しながら、互いに意見を出し合い、指導計画を具体化する機会を設けた。
- これにより、受講者はデジタル教科書の機能について、相互に理解を深めるとともに、授業場면을想定した活用の視点を獲得した。

今後の研修においても、受講者間で意見を出し合いながら、デジタル教科書を実際に操作し、具体的に授業展開を検討する機会を設ける。

模擬授業を実施し、相互フィードバックする機会を設けたこと

- 授業展開の検討後、ワールドカフェ形式により、全員が模擬授業を実践し、相互にフィードバックを行う機会を設けた。
- 受講者は、授業者・学習者の双方の立場を体験するとともに、異なる教科や校種におけるデジタル教科書の活用方法に触れることができた。
- これにより、デジタル教科書に関する指導助言への自信に繋がったとともに、本研修の演習スタイル自体が、今後教員向け研修を実施する際に活かせる知見となった。

今後の研修においても、模擬授業等のアウトプットの機会を設け、相互にフィードバックを行うことで、学びを深め合う研修を設計する。

課題

デジタル教科書と学習支援ソフトを組み合わせた活用の検討

- 多くの受講者は、デジタル教科書単体での活用場面を中心に検討していた。
- デジタル教科書と学習支援ソフトと組み合わせた活用を検討することで、より効果的な授業づくりに繋がると考えられる。

今後の研修では、デジタル教科書と学習支援ソフトを実際に組み合わせて活用している授業例を積極的に提示する。

研修担当者の声（本研修の振返り）

本研修は、対象を指導主事に絞り、効果的な指導助言に繋がる満足度の高い研修になりました。また、指導主事は自らが研修を実施する立場でもあるため、デジタル教科書を実際に操作する体験や模擬授業の実施といった活動が、今後の研修設計に活かせる学びになったと考えます。（熊本県 松下 指導主事）



3. 各実証県における研修改善の取組

3.4. 熊本県教育庁

3.4.5. 総括

- 熊本県教育庁での実証を通じて得られた「研修改善のポイント」と、実証を踏まえた「今後の取組」は以下のとおりです。

熊本県教育庁における研修改善の取組の総括

研修改善のポイント

研修改善 (1回目)

デジタル教科書の具体的な活用段階を強調して示したこと → 参考 : p.76

- ・ 教員・指導主事は、自身がデジタル教科書の活用プロセスのどの段階にあるのかを把握できていない場合がある。そのため、研修冒頭で活用段階を提示し、自らの段階を明確にした上で今後の活用を具体的にイメージさせることが重要。

模擬授業にて、実際の活用イメージを想起させたこと → 参考 : p.77

- ・ デジタル教科書の活用経験が乏しい受講者は、授業での具体的な活用イメージを十分に持てず、活用に踏み出しにくいことが多い。そのため、模擬体験等を通じて学習者の立場を体験させ、具体的な活用場面を想起しやすくする機会を設けることが有効である。

研修改善 (2回目)

デジタル教科書を触りながら、授業展開を検討する機会を設けたこと → 参考 : p.84

- ・ グループワークでデジタル教科書を実際に操作しながら意見交換を行い、指導計画を自ら具体化する機会を設けることで、受講者は機能への理解を深めるとともに、授業場面を想定した活用の視点を身に付けることができる。

模擬授業を実施し、相互フィードバックする機会を設けたこと → 参考 : p.84

- ・ ワールドカフェ形式で模擬授業と相互フィードバックを行うことで、指導者・学習者双方の視点を受講者自身が体験し、他教科の活用についても理解を深めることができるので、適切な指導助言に繋がる。また、このような演習形式は、指導主事にとって今後の研修設計に活かせる有益な知見となる。

実証成果を踏まえた 県における今後の取組

- ・ 第1回研修では、教員及び指導主事を対象に有識者による模擬授業を実施し、第2回研修では、指導主事のみを対象に受講者自身が模擬授業を考え、実施し合う活動を取り入れました。学習者の立場を体験しながら理解を深めるような形式は効果が高く、今後も継続して実施していきたいと考えます。（熊本県 松下 指導主事）
- ・ また、第2回研修は、デジタル教科書の活用経験が少ない指導主事に対象を絞り、その上で、適度な負荷を伴う研修を行うことで、より深い理解に繋がることも確認できました。今後は、教科ごとの特徴を踏まえた活用を更に支援するとともに、紙の教科書との併用についても検討を進めていきたいと考えています。（熊本県 松下 指導主事）

3. 各実証県における研修改善の取組

- 3.1. 埼玉県教育局
- 3.2. 福井県教育庁
- 3.3. 奈良県教育委員会
- 3.4. 熊本県教育庁
- 3.5. 鹿児島県教育庁



3. 各実証県における研修改善の取組

3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.1. 基本情報

- 実証研究にご協力いただいた鹿児島県教育庁に関する基本情報、実証前の課題認識は以下のとおりです。

県担当部署	鹿児島県教育庁 義務教育課 義務教育係		
県担当者	寺地 瞳 指導主事	担当有識者	東京家政大学 太田 洋 教授
県における 過年度の取組	<ul style="list-style-type: none">・ デジタル教科書に特化した研修等の取組の実績はないが、1人1台端末の活用が日常的になるよう端末活用を推進。・ 具体的な端末活用の様子を「主体的・対話的で深い学び」と関連付け、個別最適な学びと協働的な学びの視点から授業改善を考えられるよう、令和5年度から「鹿児島県教育委員会『学びの羅針盤』」の改訂を行い、「学習者主体の授業」の推進に取り組んでいる。		

実証前の 課題認識



学校・教員

- **デジタル教科書の活用状況には差が見られる**
 - ・ デジタル教科書の活用に関しては、教員間でばらつきがある。また、校内研修もあまり行われていない。
- **有効な活用方法にアクセスできていない**
 - ・ 教員は有効な活用方法を見い出せておらず、活用の効果も実感できていない。
 - ・ 学校内での知見の蓄積や共有の仕組みが乏しく、参考となる情報にアクセスしづらい状況がある。

教育委員会・指導主事

- **経験がなく、デジタル教科書に馴染みがない**
 - ・ デジタル教科書が導入されていた時点で、指導主事になっている者、または管理職になっている者が多く、指導主事がデジタル教科書を授業で使ったことがない。
- **学校現場の課題に即した支援を行う必要がある**
 - ・ デジタル教科書の導入状況は各自治体で異なるため、県レベルで共通した実践や取組等を展開しにくい。
 - ・ 学校現場が抱える課題は、デジタル教科書や端末の操作といった「技術面」と、教科指導的な観点に照らした活用といった「内容面」があると考えられるが、実際にどのような課題があるのかを把握した上で、適切に支援する必要がある。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.2. 年間計画

- 鹿児島県教育庁における、令和7年度のデジタル教科書の活用に関する研修計画は以下のとおりです。本事業では、「指導主事向け研修」と「県フォーラム内での研修」を研修改善に関する実証対象としました。

	対象	概要
指導主事向け研修 (第1回研修) 実証対象：p.92	<ul style="list-style-type: none">・ 教育事務所指導主事7名・ 市町村教育委員会指導主事35名	<ul style="list-style-type: none">・ 有識者から、「学習者主体の授業」の実現に向けて、デジタル教科書の利点や具体的な活用事例、指導助言で必要なポイントを解説。・ デジタル教科書のサンプル版を操作しながら機能や活用できそうな授業場面・課題などを洗い出した上で、グループで活用できそうな機能や指導助言の方策について協議。
県フォーラム内での 研修 (第2回研修) 実証対象：p.100	<ul style="list-style-type: none">・ 県内教職員・ 教育事務所指導主事・ 市町村教委指導主事・ 教育関係者・ 一般県民 など	<ul style="list-style-type: none">・ 県内小学校外国語科で先進的な活用を行う教員から、授業づくりで大切にしていることも紐づけながら、デジタル教科書の活用事例を紹介。・ 有識者が実践発表を価値づけながら、デジタル教科書の活用の意義や「学習者主体の授業」と関連した活用の在り方について解説。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.3. 研修改善（第1回）



- 1回目の実証対象とした研修の概要は以下のとおりです。



研修の概要

研修のポイント

- ✓ 指導主事の納得感の伴った理解を引き出せるよう、県が教育方針として掲げている「学習者主体の授業」に紐づけながら活用の意義を解説する。
- ✓ 指導主事自身がデジタル教科書の活用イメージを持てるよう、デジタル教科書を実際に操作する時間を設ける。
- ✓ 具体的な指導助言に繋がれるよう、教師のデジタル教科書の活用段階別に必要な指導助言の方法を検討する。

対象者： 教育事務所指導主事 7名、市町村教育委員会指導主事 35名

実施方式： 参集+オンライン

目的

① 知識・理念等の理解

② スキル・技能等の習得

③ 意識・行動等の変容

目標

・ デジタル教科書の活用の意義や活用事例を理解することができる。

・ デジタル教科書の活用と「学習者主体の授業」を関連付けた指導助言ができるようになる。

・ デジタル教科書を活用した授業に関する、各校への指導助言への意欲を高める。

内容

研修前の取組 事前アンケート

レクチャー 有識者の講義（活用の意義や事例の理解）

ワークショップ 個人演習（デジタル教科書の操作）

ワークショップ グループ協議（指導助言の方策の検討）

3. 各実証県における研修改善の取組

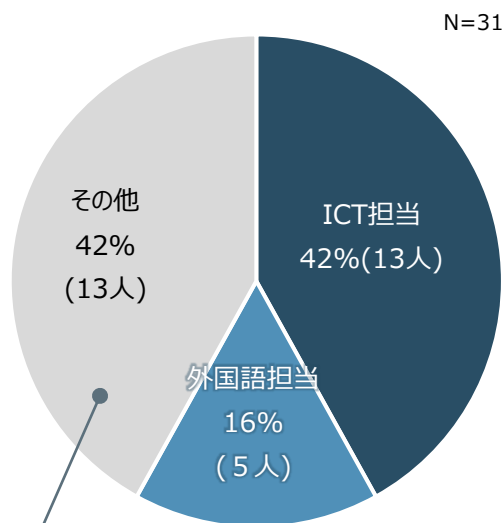
3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.3. 研修改善（第1回）



- 本研修の受講者の傾向※は、以下のとおりです。
- 指導主事の担当領域は、ICT担当が最も多く、次いで教科担当が多くなっています。
- デジタル教科書を活用した授業経験については、約7割が未経験であり、デジタル教科書に関する指導助言の機会については、9割が「学校訪問時の1/4未満」と回答しています。受講者の活用経験が少なく、学校での指導助言に繋がられていない状況がうかがえます。

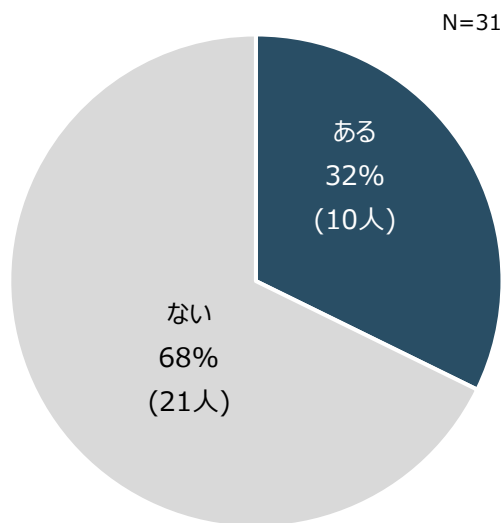
指導主事の担当領域



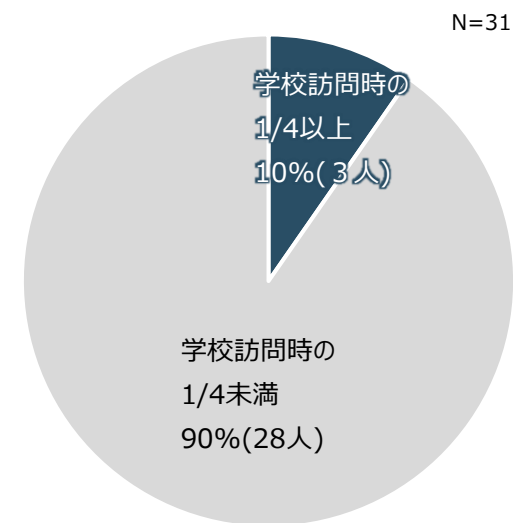
その他の内訳：

数学担当、学力向上担当、
校内研修担当、学校教育全般担当 等

デジタル教科書の活用経験



デジタル教科書に関する指導助言頻度



※ この傾向は受講後アンケート結果に基づいたものであり、実際の受講者数と有効回答数が異なる。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.3. 研修改善（第1回）



- 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

研修前の取組 事前アンケート

受講者が感じているデジタル教科書のメリットや課題を把握した。

レクチャー

有識者の講義（活用の意義や事例の理解）



「学習者主体の授業」の推進に向けて、デジタル教科書の利点や具体的な活用事例、指導助言で必要なポイントを解説した。

■ 主な講義内容

- ・ 鹿児島県が作成した教育方針である『学びの羅針盤』が掲げている「学習者主体の授業」にデジタル教科書が寄与することを、事例動画も交えながら解説。
- ・ 事例動画では、これまでの外国語の一斉指導型の授業では実現できなかった、生徒が個別のペースで様々な学び方を展開している様子（＝「学習者主体の授業」の一例）を紹介。
- ・ 教師への指導助言の具体例について、「デジタル教科書活用の3ステップ」（右図①）に紐づけながら解説。

※図①のステップの図は以下の動画より引用。

学習者用デジタル教科書活用の意義～これからの時代に求められる授業に向けて～

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- ・ デジタル教科書のメリットとして、自分のペースでの学習が可能であることを多くの受講者が感じていた。課題として、紙の教科書との違いが分からないことや、教員のICTスキルの差があることが多く挙げられた。
- ・ 「**学習者主体の授業**」の事例動画は、多くの受講者が注視している様子だった。
- ・ 講義のうち、特に以下の内容で受講者のメモやうなずきが多かった。
 - ✓ **デジタル教科書活用の3ステップ**と、**各ステップに至るために実際に行われた教師への指導助言**の事例（下図①②）
 - ✓ 児童生徒にデジタル教科書を使わせて教師が何もしない「デジタル放任授業」に陥らないために、**教師が児童生徒の様子を見取り、学級全体に良い学び方の例や留意点を共有することが重要であること**
 - ✓ **教師も子供たちと一緒にデジタル教科書の活用を学んでいけばよい**ということ



▲図①：デジタル教科書活用の3ステップ

- Step 1 あらゆる教科書でとにかく使ってみる**
→デジタル教科書を使うメリットを伝える
- Step 2 効果的な活用方法を深める**
→様々な授業場面で使えることを示す
- Step 3 新たな学び方を追究する**
→子供たちが学び方を自己調整するためにデジタル教科書が役立つことを示す

▲図②：デジタル教科書活用の各ステップに至るために必要な指導助言の事例を紹介。

例えば、講義の冒頭で紹介した「事例動画」は、有識者の指導助言により教師が「音読での使用」から活用の幅を広げた例であり、これはStep 2の「様々な場面で使えることを示す」に該当することを説明。

次頁に続く

3. 各実証県における研修改善の取組

3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.3. 研修改善（第1回）

■（前頁の続き）

研修の流れ

ワークショップ

個人演習（デジタル教科書の操作）



15分

実際にデジタル教科書のサンプル版を操作し、「効果的だと感じた機能」「活用できそうな授業場面」「活用する上で課題となりそうな点」をオンライン上のワークシートに受講者がまとめた。

（次頁にワークシートの内容を掲載。）

ワークショップ

グループ協議（指導助言の方策の検討）



50分

グループごとに、「学習者主体の授業」に向けて活用できそうな機能や、具体的な指導助言の方法について意見交換を行い、有識者から講評を行った。

■グループ協議の実施方法

- グループは参集とオンラインの参加者でそれぞれ校種別に編成。1グループ3～5名程度。
- オンライン上のワークシートに協議内容をまとめ、他グループの内容も参照できるようにする。（次頁にワークシートの内容を掲載。）
- 各グループの協議内容を全体で発表する。

■有識者からの講評の内容

- 前段の講義で掲げた「デジタル教科書活用の3ステップ」に則りながら、具体的な指導助言の例を提示。



研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 講義で扱った外国語だけでなく、**様々な教科のデジタル教科書の機能を確認**していた。
 - 操作して気付いたことや疑問を受講者同士で話し合う様子が見られた。
 - ワークシートには、「児童生徒の様子を見取ることが重要」など、**有識者の講義内容を踏まえて記入**している受講者が見られた。
-
- 協議は円滑に進行していた。講義や個人演習で気付いたことを共有した上で、「**デジタル教科書だから実現できること**」まで議論を深めることができていた。
 - 協議の後半では、各指導主事が把握している学校での活用状況も踏まえながら、**活用段階別に指導助言の具体的な方法を検討しているグループ**も見られ、**実現可能性の高い内容**となっていた。
 - 一部のグループでは、デジタル教科書の機能に関する疑問に議論が集中していた。**
 - 有識者からの講評における具体的な指導助言の例の提示は、**グループ協議でも「更に知りたい」という声が多かった内容**であり、受講者のメモやうなずきが多かった。



▲グループ協議の様子

「デジタル教科書の機能を知る」ための指導

- どこにどんな機能があるのか教師も子供たちも全員で理解する時間を確保。
- Unitの最初のページの場面を表すアニメーションを全体で一度視聴。
- その後教師がデジタル教科書のいろいろな機能を示しながら、使い方の指導。

▲有識者からの講評では、具体的な授業への指導助言の例を紹介

3. 各実証県における研修改善の取組

3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.3. 研修改善（第1回）



- 前頁の「ワークショップ」において、実際に作成されたワークシートの例を以下に示します。

実際に作成されたワークシートの例

ワークショップ

個人演習（デジタル教科書の操作）

効果的だと感じた機能

- 好きなタイミングで必要な箇所に絞って音声を確認
- 教科書の挿絵を切り貼りして、ワークシートの作成を省力化

活用できそうな授業場面

- 友達の考えを転記でき、グループの意見内容の集約が容易
- 全体で学習内容を確認後、個別で課題解決を行う時間に活用

活用する上で課題となりそうな点

- 教師が児童生徒の学習の状況を十分に見取り、支援すること

個人演習の内容を基に協議

ワークショップ

グループ協議（指導助言の方策の検討）

どの機能をどのように活用できるか

- 従来の教科書では提示できなかった動画や音声・情報等を、子供たちの課題解決に活かし、個に応じた学びに繋げることができる。
- これまでの学習の履歴やデジタル化した成果物を残すことができ、既習事項等を学びに活かすことができる。児童生徒が成長を実感し、学習意欲を高めることに繋がる。

どのような指導助言を実施するか

- Step1→Step2→Step3と学校の状況に応じた指導助言を実施したい。まずは、各校の活用状況に関する調査を実施する。
- Step1の学校には、活用の習慣化に繋げるため、「まずは子供と一緒に使ってみましょう」と促す。
- 「デジタル放任授業」とならないように、教師が児童生徒の様子を十分に見取り、見取ったことをもとに指導。

3. 各実証県における研修改善の取組




3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.3. 研修改善（第1回）



- 受講後アンケートでは、満足度・理解度・指導助言への自信について自己評価を求めたところ、満足度と自信は9割以上の受講者、理解度は全受講者から肯定的な回答が得られました。
- また、各項目について自由記述での意見を求めたところ、「**教師のデジタル教科書の活用段階に沿った指導助言の例が分かりやすかった**」「**段階的に活用を促すような指導を行いたい**」等が多く挙げられました。
- 今後の研修に対する意見・要望としては、**デジタル教科書の操作や機能を理解できるような研修**を求める声が寄せられています。

事後アンケート結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

研修の満足度  94%が満足	研修の理解度  100%が理解	活用に関する意識  91%が現状より向上
<p>満足度に関する自由記述（抜粋）</p> <p><活用ステップに沿った具体例が分かりやすかった></p> <ul style="list-style-type: none">・ 「デジタル教科書活用の3ステップ」の段階に沿った指導助言の事例が分かりやすかった。 <p><実際の操作体験を通じて学ぶことができた></p> <ul style="list-style-type: none">・ 実際にデジタル教科書を操作する演習を経てからグループ協議を行ったため、具体的な授業場面について協議することができ満足した。 <p><地域の実態に引き付けた検討ができた></p> <ul style="list-style-type: none">・ 他地域の指導主事との協議を通じて、各受講者の地域の環境や実態に応じた指導の在り方や、指導助言を受ける教職員の立場に立った指導内容を検討することができ満足した。	<p>理解度に関する自由記述（抜粋）</p> <p><“教師も学びながら”活用を広げること></p> <ul style="list-style-type: none">・ 教師も児童生徒も、指導主事も一緒に学びながらデジタル教科書の活用を進めていけばよいと分かった。・ デジタル教科書を無理にでも使おうとするのではなく、子供たちと一緒に試してみながら、使い方を模索していけばいいということが分かった。 <p><教師の立場に立った指導助言の在り方></p> <ul style="list-style-type: none">・ 指導助言においては単なる助言にとどまらず、「相手の思いや状況を丁寧にくみ取りながら、対話的に進めていく姿勢」が重要であることを改めて実感した。	<p>今後の活用・助言に関する自由記述（抜粋）</p> <p><段階的に活用を促す指導を行いたい></p> <ul style="list-style-type: none">・ 3つのステップとともに具体的な活用例を示し、教師が自ら活用したいと思えるようにしたい。・ 導入当初は操作面や接続環境に課題が生じやすいことも念頭に置き、「できるところから無理なく取り入れていくこと」「小さな成功体験を積み重ねていくこと」の大切さを伝えていきたい。・ まずは子供と一緒に使い、習慣化を図る。次に活用方法を示し、学習方法の選択を子供に委ねることの大切さを伝えていきたい。 <p><「学習者主体の授業」の観点で指導したい></p> <ul style="list-style-type: none">・ 「学習者主体の授業」を実現する手段の一つとしてデジタル教科書を使えるよう指導したい。

■ 今後の研修に対する意見・要望

- ・ デジタル教科書のサンプル版を操作し、オンラインのワークシートを活用した意見集約をできたため、一方的な研修ではなく双方向性があり、対面と遜色ない研修ができた。
- ・ 実際にデジタル教科書に触れる機会が少ないので、**教科書発行者等を招き、操作や機能面をある程度理解できるような研修**があるといい。

※ 調査対象：研修受講者（教育事務所・市町村教育委員会指導主事） 有効回答数：31 調査期間：研修実施後1週間（令和7年8月8日～15日）

3. 各実証県における研修改善の取組

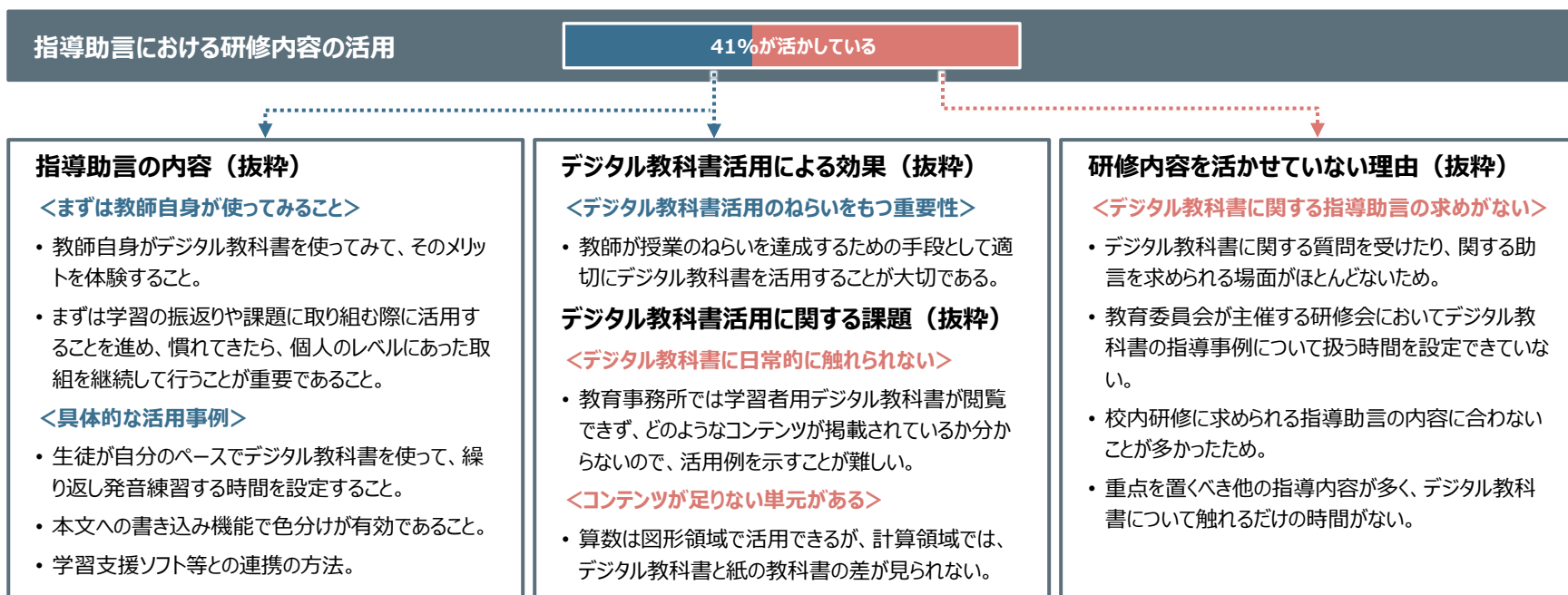
3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.3. 研修改善（第1回）



- 追跡アンケートでは、研修以降の指導助言に関し、約40%の回答者が研修内容を活かしていると回答しています。
- 指導助言の内容は、教師自身がまず試してみることや具体的な事例を紹介した受講者が多かったです。
- 指導助言に活かさない理由として、「デジタル教科書に関する指導助言の求めがない」が多く挙げられました。今後は学校現場の求めがなくても指導助言ができるよう、具体的な授業の参観や次期学習指導要領と結び付けた研修を行い、普段の指導助言でもデジタル教科書を取り上げられるような自信に繋げることが有効と考えられます。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）



■ 今後の研修に対する意見・要望

- ・ デジタル教科書を実際に操作しながら授業を行う様子を参観することで活用方法を具体的にイメージできるような研修があるとよい。
- ・ 次期学習指導要領に向けて、他教科についても事前に実証研究ができるとよい。紙・デジタルそれぞれの良さを生かした活用について深めていきたい。

※ 調査対象：研修受講者（教育事務所・市町村教育委員会指導主事） 有効回答数：29 調査期間：研修実施から約4か月後（令和7年11月28日～12月12日）

3. 各実証県における研修改善の取組

3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.3. 研修改善（第1回）

- 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振り返りを行い、「研修の成果につながった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。



成果と課題

今後の研修に向けた取組

研修の成果に繋がった点

実際にデジタル教科書を操作しながら、「学習者主体の授業」に繋がる活用方法を考えたこと

- ・ 県内の指導主事は「学習者主体の授業」の必要性を理解する一方で、デジタル教科書の活用経験が少なく、教師の活用を促す指導助言に繋がれずにいた。
- ・ 研修では、デジタル教科書が「学習者主体の授業」を実現するツールであることを理解した上で実際に操作を行ったため、活用できる授業場面に関して、納得感かつ具体性を伴った検討ができ、「デジタル教科書だからできること」まで議論が深まっていた。

活用段階別に具体的な指導助言の例を示したこと

- ・ 指導主事は、教師の活用状況や考えに寄り添いながら指導助言を行う必要がある。
- ・ 講義で「デジタル教科書活用の3ステップ」と、各ステップに至るために必要な指導助言の例が豊富に示されたことで、受講者が自身の担当する学校の活用状況を想起しながら、具体的かつ実現性の高い指導助言の検討に繋がっていた。

課題

デジタル教科書の操作に関する疑問へのフォローが必要なこと

- ・ デジタル教科書を操作する中で生まれた疑問が、対面では近くの受講者と話すことで解消しやすいが、オンライン受講者は解決が難しい側面があった。
- ・ 指導助言の方法など本質的な議論に時間を割くため、機能面の疑問の解決は質問フォームに委ねるなどの対応が求められる。

今後の研修においても、デジタル教科書の操作の機会を十分に確保し、受講者間でデジタル教科書の使用イメージを共有できるようにする。

今回の研修で指導助言のポイントを学べたため、今後は指導主事が単元計画作成の段階から現場の教員と関わり、デジタル教科書の活用方法を教員と共に検討できるような機会を設ける。

今後の研修では、デジタル教科書の操作や機能に関する質問を受ける時間を十分に確保する。

研修担当者の声（本研修の振り返り）

今回の研修はオンライン参加者が多く、グループワークの様子が把握しきれない不安がありましたが、オンラインのワークシートを活用したことで、対面参加者と同じくらい意見を得ることができました。今後は、研修成果を受講者以外にも広げていきたいです。（鹿児島県 寺地 指導主事）



3. 各実証県における研修改善の取組

3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.4. 研修改善（第2回）



- 2回目の実証対象とした研修の概要は以下のとおりです。



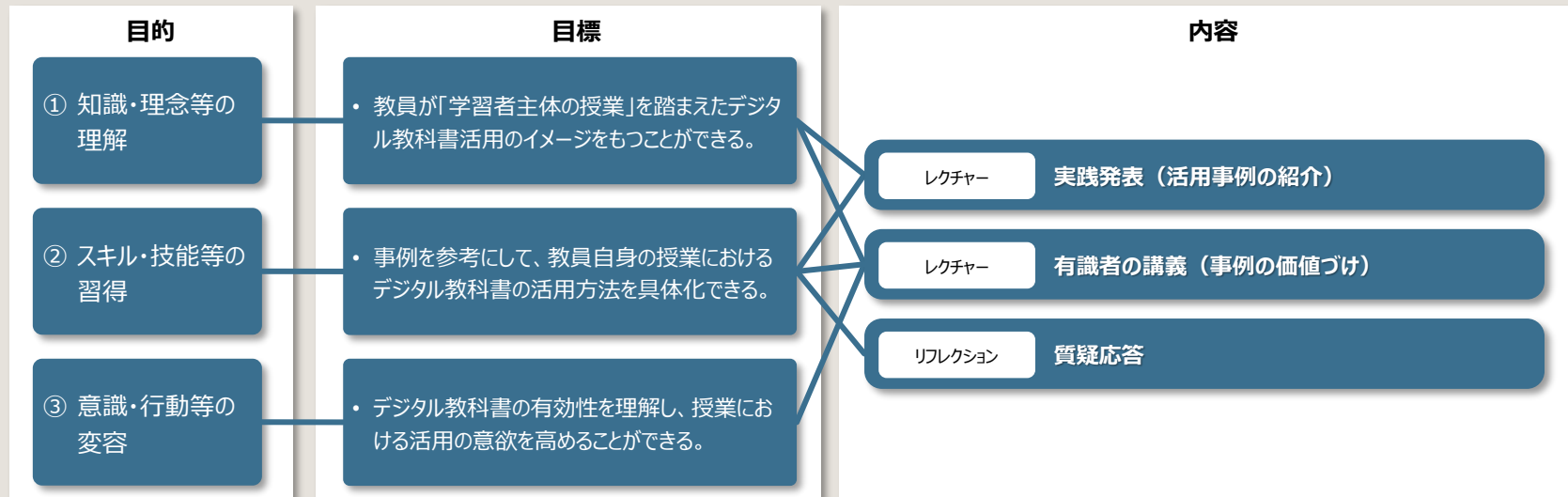
研修の概要

研修のポイント

- ✓ 参加者が授業での活用イメージを具体的に描くことができるよう、**教員が実際に使っているワークシートや、授業中の写真や映像を用いながら実践事例を紹介する。**
- ✓ 参加者の理解を引き出せるよう、**県が教育方針として掲げている「学習者主体の授業」に紐づけながら活用の意義を有識者が解説する。**

対象者：教員を含む一般参加者（県フォーラム内での開催）※下記目標は参加者のうち、教員にフォーカス。

実施方式：参集+オンライン



3. 各実証県における研修改善の取組

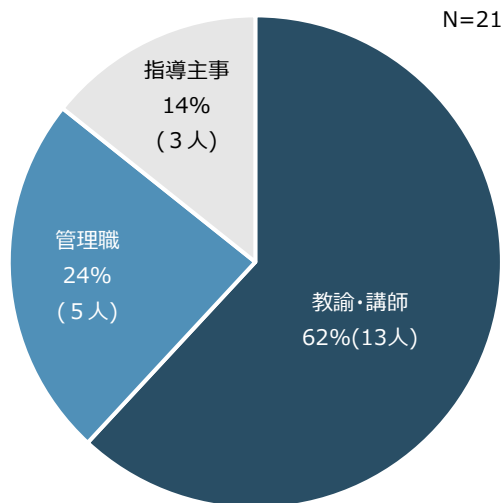
3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.4. 研修改善（第2回）

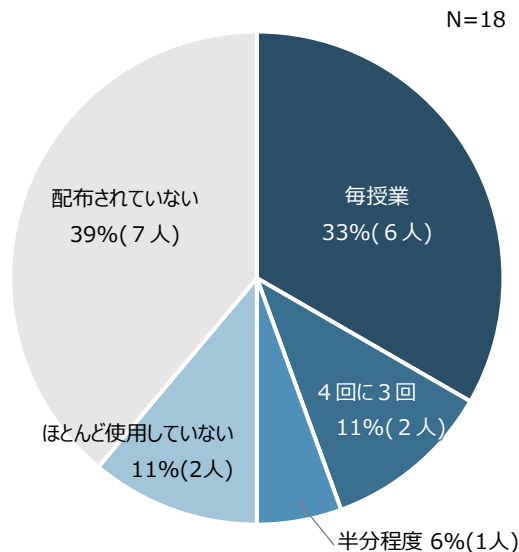


- 本研修の受講者の傾向※は、以下のとおりです。
- 受講者のうち、教員（教諭・講師・管理職）の約5割がデジタル教科書を「自身の授業の半分以上」で活用していました。また、デジタル教科書が自身の学校・担当教科書では配布されていない教員（高等学校の教員が中心）も一定数参加していました。
- 受講した教員の校種は、デジタル教科書の配布が進む小学校・中学校が約7割を占めますが、一部、高等学校や特別支援学校からの教員も参加していました。

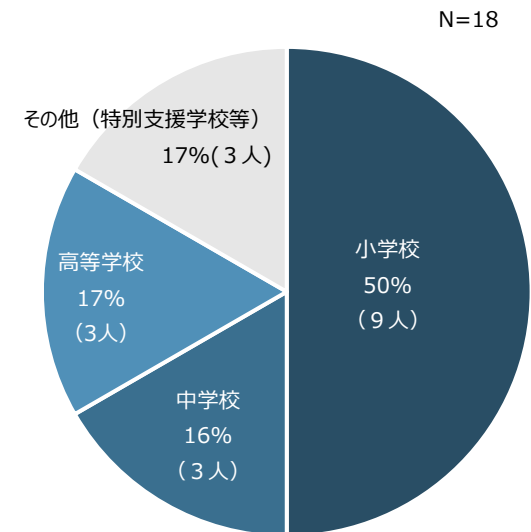
参加した教員・指導主事の内訳



教員のデジタル教科書の活用頻度



教員の在籍する校種



※ この傾向は、受講者のうち教員・指導主事のみを対象とした受講後アンケート結果に基づくものであり、実際の受講者数と有効回答数が異なる。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.4. 研修改善（第2回）



- 研修の流れ及び実際の研修の様子は以下のとおりです。

研修の流れ

レクチャー 実践発表（活用事例の紹介） 15分

小学校外国語科におけるデジタル教科書の活用事例について、先進的な活用を行う県内の教員（薩摩川内市立平佐西小学校 安部菜穂子先生）から実践発表を行った。

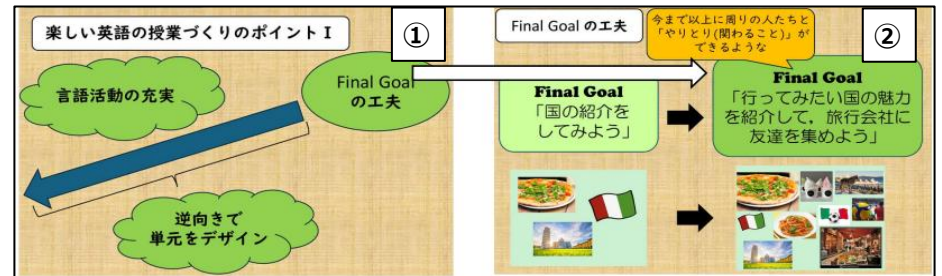
■ 実践発表の内容

- ・ 「外国語の授業づくりで大切にしていること」として以下を挙げた。
 - ✓ Final Goalから逆向きで単元計画を作成すること（右図①）
 - ✓ Final Goal（単元目標）を、児童が様々な想いや考えを伝えられるものになるよう工夫すること（右図②）
- ・ 上記の授業においては、単元目標に向けて子供たちが自走できるための仕掛けづくりが重要である。そのための自己調整学習のポイント（右図③）を、デジタル教科書の活用事例（右図④）と併せて説明。
- ・ 併せて、児童の自己調整学習の様子を見取るためのツールとして、児童が取り組むべきタスクが整理された2種類の「Mission Sheet」を紹介。（内容は次々頁）

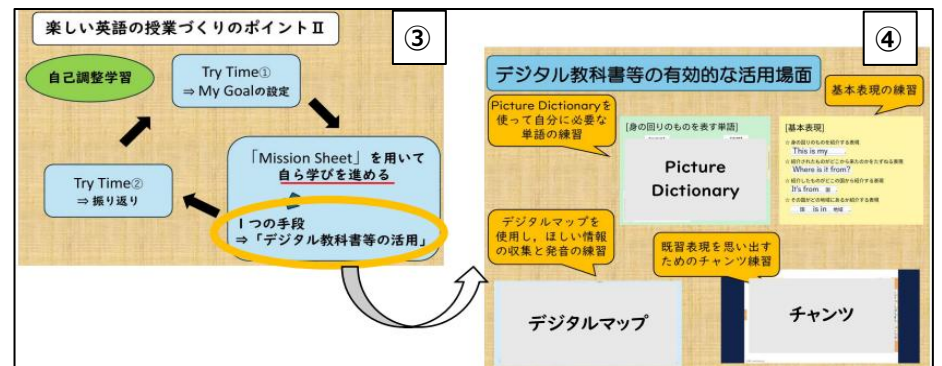
次頁に続く

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- ・ 導入として、子供たちの授業中の様子が動画で提示されたときに、受講者の多くは引き込まれている様子であった。
- ・ **デジタル教科書の活用例（下図④）だけでなく、その裏にある授業づくりのねらいや単元計画の工夫点（下図①②）、自己調整学習の進め方（下図③）も併せて説明された。**これにより、デジタル教科書の活用自体を目的化させることなく、子供たちが自ら学びを進めるための一つの手段として活用することの重要性を訴求していた。



▲単元ゴールから逆向きで単元計画を作成する重要性（図①）や、子供たちの学び合いを引き出すための単元ゴール設定の工夫（図②）について説明



▲自己調整学習の進め方（子供たちが自分でゴールを設定し、学びを進め、振り返る）を説明（図③）子供たちが自分で学びを進めるための1つの手段として、デジタル教科書の活用例を紹介（図④）

3. 各実証県における研修改善の取組

3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.4. 研修改善（第2回）



■ （前頁の続き）

研修の流れ

レクチャー

有識者の講義（事例の価値づけ）



25分

有識者が小、中学校における活用事例を取り上げながら、実践発表とも紐づけて、デジタル教科書の活用の意義や「学習者主体の授業」と関連した活用の在り方について解説した。

■ 主な講義内容

- ① 「デジタル教科書活用の3 Step」を紹介し、各Stepに紐づけて活用事例を説明。
Step 1の事例として音読練習・リスニングでの活用、Step 2の事例として本文の内容理解に活用した事例を取り上げた。
- ② 県内の教員による実践をStep 3（新たな学び方を追究する）に位置づけ、子供たちが目標達成に向け学び方を自分で選択すること（自己調整学習）が重要であることを説明。
- ③ 自己調整学習は「放任」ではなく、教師が子供たちの学びの様子を見取る必要がある。そのためのツールとして、「Mission Sheet」(次頁) が鍵となることを説明。
- ④ 子供たちが自己調整学習を「楽しい」と思う理由を解説。「Mission Sheet」で取組状況が可視化されることで、子供たち自身が「ここまで自分で取り組むことができた」と自己肯定感を高めることに繋がる。

リフレクション

質疑応答



10分

教員による実践発表や有識者の講義に対する質疑応答の時間を設けた。

研修の様子（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）

- 講義のうち、特に以下の内容で受講者のメモが多く、強く訴求している様子が見られた。
 - ✓ デジタル教科書活用の3 Step。特に音読練習だけでなく、教科書本文の理解へ活用の幅を広げたStep 2の事例（左記①）
 - ✓ 子供たちにデジタル教科書を使わせて教師が何もしない「デジタル放任授業」に陥らないために、教師が児童生徒の様子を見取り、学級全体に良い学び方の例や留意点を共有することが重要であること（左記③）
 - ✓ 子供たちがデジタル教科書等を活用した自己調整学習を「楽しい」と思う理由を解説したこと（左記④）



デジタル教科書活用の3 Step（再掲）▶

- 受講者から質問は挙がらなかったが、有識者が、教員の実践発表の内容や、**そこに至るまでの教員の中での試行錯誤**に関して深掘りした。
- 具体的な内容として、「児童の学ぶスピードが個々で異なるため、一斉指導では限界を感じた」「子供たちが目標に向かって学びを段階的に進めていくためには、Mission Sheetで学び方を提示することが重要だった」などの**教員の実感**を伴った発言を引き出していた。

3. 各実証県における研修改善の取組

3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.4. 研修改善（第2回）



- 研修内の実践発表（小学校外国語科）で、子供たちが自己調整学習を進めるために重要な取組として紹介された「Mission Sheet」を以下に示します。
- Sheet Bはタスクに取り組む順番も子供たちが自分で決めることができ、進め方に悩む子供たちは、タスクに取り組む順番が示されたSheet Aを使用します。

Mission Sheetの一例

Level 1 から順に進めていくMission Sheet A

どこから進めてもよいMission Sheet B

全員が終わらせなければならぬタスク！

Grade 6 Class No. Name _____

Level	Tasks	Let's check! 終わった日付を書こう!	
		Helpした友達の名前	評価
	Small Teachers になって友達を help しよう！ *答えを教えるのではなく、一緒に考えよう！ *A: 9人以上, B: 1~8人, C: 0人		
1	ランランカードを使って、「身の回りのもの」について内容をふくらませる。 *身の回りのもの、どの国からきたか、どの地域にあるか、国の紹介の _____ は必ず	/	/
2	身の回りのものを紹介することができる。 *やりとりをした友達(や先生)の名前を書く。	1 / 2 / 3 / 先生 /	/
3	どこから来たのかに迷えることができる。 *やりとりをした友達(や先生)の名前を書く。	1 / 2 / 3 / 先生 /	/
4	どこから来たのか答えることができる。 *やりとりをした友達(や先生)の名前を書く。	1 / 2 / 3 / 先生 /	/
5	ランランカードの Let's write 1 の「身の回りのものがどこの国から来たのか書いてみよう。」を書いて、先生にチェック&A 評価をもらう。	/	/
6	紹介した国がどの地域にあるか伝えることができる。 *やりとりをした友達(や先生)の名前を書く。	1 / 2 / 3 / 先生 /	/
7	ランランカードの Let's write 2 の「紹介した国がどの地域にあるか書いてみよう。」を書いて、先生にチェック&A 評価をもらう。	/	/

Grade 5 Class No. Name _____

I can _____ を使って、自分ができることを友達3人と先生に伝える。

名前	できること	
1		/
2		/
3		/
先生		/

4 『play+楽器』の動作(3種類)を絵を見て言うことができる。

友達		
先生		/

3 『well シリーズ』の動作(4種類)を絵を見て言うことができる。

友達		
先生		/

5 『ride, fast シリーズ』の動作(4種類)を絵を見て言うことができる。

友達		
先生		/

1 『play+スポーツ』の動作(6種類)を絵を見て言うことができる。

友達		
先生		/

Mission
友達のことを知って、プロフィールカードに書かれている友達を探すための準備をしよう！

2 『do シリーズ』の動作(3種類)を絵を見て言うことができる。

友達		
先生		/

6 『jump シリーズ, run, swim』の動作(4種類)を絵を見て言うことができる。

友達		
先生		/

Can you swim? を使って、友達3人と先生にインタビューする。

名前	can / can't	
1	can / can't	/
2	can / can't	/
3	can / can't	/
先生		/

I can't _____ を使って、自分ができるできないことを友達3人と先生に伝える。

名前	できないこと	
1		/
2		/
3		/
先生		/

Can you _____? を使って、友達3人と先生にインタビューする。

名前	can / can't	
1	can / can't	/
2	can / can't	/
3	can / can't	/
先生		/

自分ができるできないことをランランカードに書いて、先生にチェック&A 評価をもらう。

名前		
先生		/

3. 各実証県における研修改善の取組

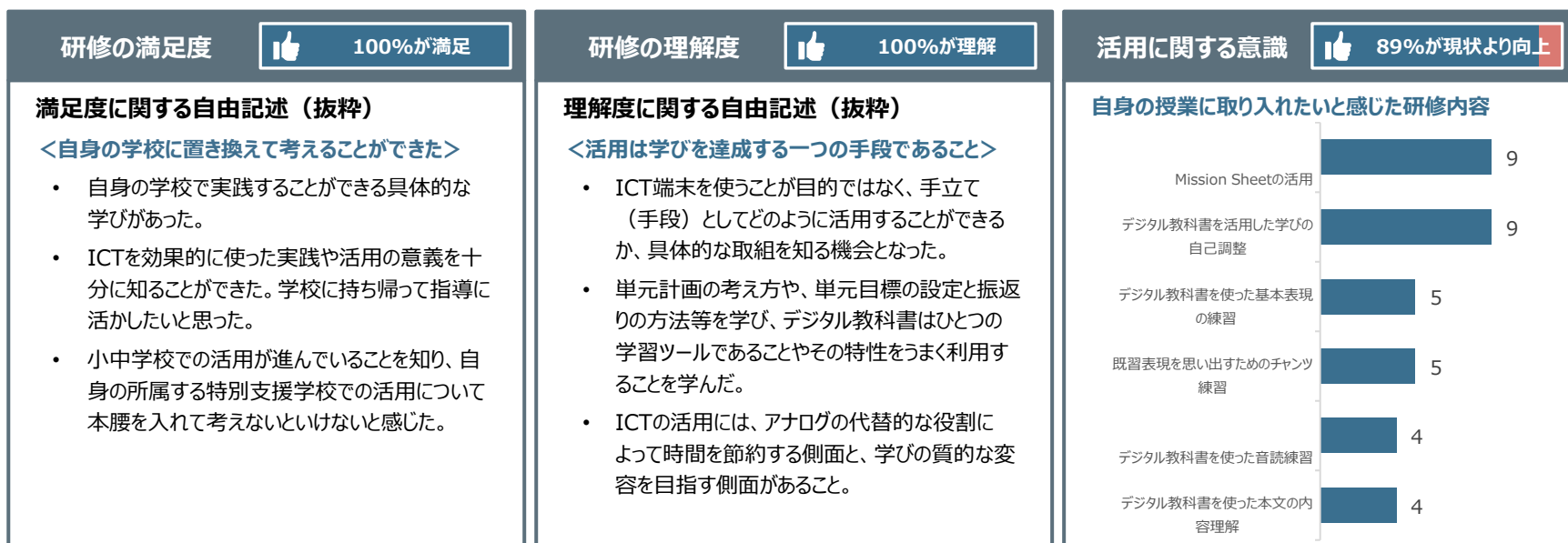
3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.4. 研修改善（第2回）



- 受講後アンケートでは、満足度・理解度・活用に対する意欲について自己評価を求めたところ、満足度と理解度は全受講者から、活用に対する意欲は約9割の受講者から肯定的な回答が得られました。
- 研修の中で特に理解したことや自身の授業に取り入れたいものを回答いただいたところ、特に「**デジタル教科書が子供たちの学びの自己調整に寄与すること**」は多くの受講者にとって理解され、自身の授業でも取り入れたいと感じられていたことが伺えます。
- 研修に対する意見・要望として、「自己調整学習におけるデジタル教科書の活用事例を更に学びたい」という意見がありました。

事後アンケート結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）



■ 今後の研修に対する意見・要望

- ・ **自己調整学習においてのデジタル教科書の活用方法・実践例を更に学びたい。**
- ・ 高校におけるデジタル教科書等を活用した授業実践の例を紹介してほしい。

※ 調査対象：研修受講者のうち、教員と指導主事（鹿児島県外からの参加者も含む）

有効回答数：21

調査期間：研修実施後約2週間（令和7年11月4日～14日）

3. 各実証県における研修改善の取組

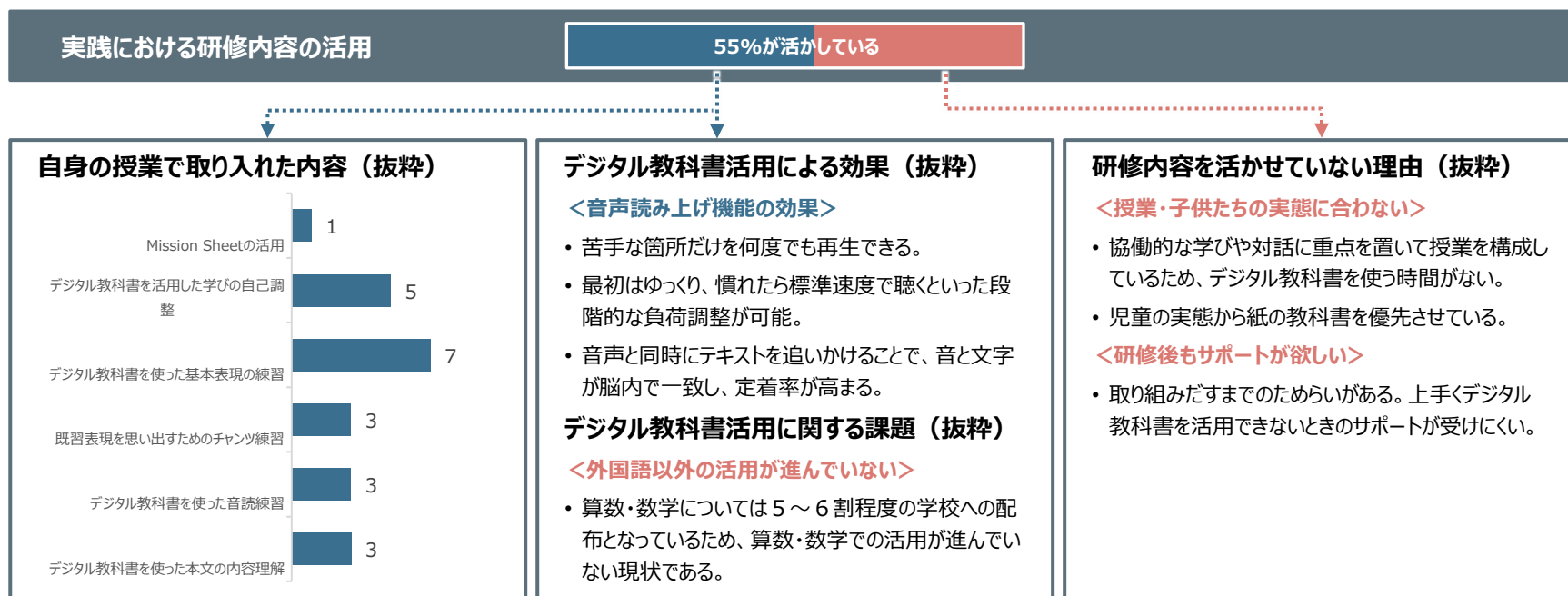
3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.4. 研修改善（第2回）



- 追跡アンケートでは、研修以降の実践に関し、**55%の回答者が研修内容を活かしている**と回答しています。
- 研修内容で実際に自身の授業に取り入れたものを回答いただいたところ、**デジタル教科書を使った基本表現の練習を中心に**取り入れられ、**特に音声読み上げ機能の効果が実感**されていました。
- 研修内容を実践に活かせていない理由として、「**授業・子供たちの実態に合わない**」「**活用に関するサポートが受けにくい**」が挙げられています。**教師の担当する教科やクラスの実態に合わせた細やかなサポートの必要性が示唆**されています。

追跡アンケートの結果（青字は成果、赤字は課題に繋がる内容）



■ 今後の研修に対する意見・要望

- ・ デジタル教科書が全ての教科で配布され、実際に教師が授業で使用することによって、成果と課題が明確になり、今後の紙媒体・ハイブリッド・完全デジタルの選択がしやすくなるのではないだろうか。

※ 調査対象：研修受講者のうち、教員と指導主事（鹿児島県外からの参加者も含む）

有効回答数：24

調査期間：研修実施から約3か月後（令和8年1月26日～2月6日）

3. 各実証県における研修改善の取組

3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.4. 研修改善（第2回）



- 研修における受講者の様子や受講後アンケートの結果から、有識者を交えた振返りを行い、「研修の成果につながった点」と「課題」、それらを踏まえた「今後の研修に向けた取組」を整理しました。

成果と課題

今後の研修に向けた取組

研修の成果に繋がった点

デジタル教科書の活用に紐づけながら、単元計画や子供たちの学びの見取りの工夫についても説明されたこと

- 授業におけるデジタル教科書の活用を検討する際は、単元においてどのような学びを目指し、教師がどのように子供たちの学びを見取るかも併せて検討する必要がある。
- 実践事例紹介では、単にデジタル教科書等ICTの活用方法だけでなく、「外国語の授業づくりで大切にしていること」として、単元計画の組み立て方の工夫等についても説明された。また、子供たちの学びを見取るためのツールも紹介され、受講者が授業検討時に意識すべき点が明確になり、活用イメージをより具体的ものにすることができていた。

今後の研修においても、活用方法だけでなく、活用の意図や授業設計における工夫点も併せて伝え、実践に繋がる意識を醸成する。

デジタル教科書導入までの教員の試行錯誤も共有されたこと

- 「児童は学ばスピードが異なり、一斉指導では限界を感じたため、デジタル教科書の活用を始めた」など、教員が実践に至るまでの試行錯誤の過程も共有されたことで、一見レベルが高く見える事例に対しても、受講者が共感・納得しやすい内容になっていた。

今後の研修においても、実践発表を行った教員の生の声を取り上げる。

課題

活用事例を基に自身の授業への応用を考える場面が必要なこと

- 本研修で紹介されたのは一つの事例のみだったが、デジタル教科書の活用実践例を更に学びたいという意見や、高等学校での実践例を求める意見が見られた。
- 研修内で紹介できる事例には限りがあるため、事例を基に受講者が自身の授業に落とし込んで考えられるような研修設計が求められる。

今後の研修では、教員が事例を自身の授業にどのように応用するかを検討するアウトプットの機会を設ける。

研修担当者の声（本研修の振返り）

現場の先生にデジタル教科書活用の意義や方法を理解してもらい、各市町村で横展開するためには、指導主事だけでなく、現場の教員の協力が必要です。教員には、実践例を踏まえて自分の授業に落とし込む方法を考え、グループ内で発表し話し合う活動の機会を提供したいです。（鹿児島県 寺地 指導主事）



3. 各実証県における研修改善の取組

3.5. 鹿児島県教育庁

3.5.5. 総括

- 鹿児島県教育庁での実証を通じて得られた「研修改善のポイント」と、実証を踏まえた「今後の取組」は以下のとおりです。

鹿児島県教育庁における研修改善の取組の総括

研修改善のポイント

研修改善 (1回目)

実際にデジタル教科書を操作しながら、「学習者主体の授業」に繋がる活用方法を考えたこと

→ 参考 : p.95

- ・ 指導主事は「学習者主体の授業」の必要性を理解する一方、デジタル教科書の活用経験が少なく、教師の活用を促す指導助言に繋がらずにいることが多い。
- ・ 研修では、デジタル教科書が「学習者主体の授業」を実現するツールであることを理解した上で実際に操作を行うことで、活用できる授業場面に関して、納得感かつ具体性を伴った検討ができ、「デジタル教科書だからできること」まで議論が深まる。

活用段階別に具体的な指導助言の例を示したこと → 参考 : p.94、p.95

- ・ 指導主事は、教師の活用状況や考えに寄り添いながら指導助言を行う必要がある。研修内で活用段階別に必要な指導助言の例を示すことで、受講者が自身の担当する学校の活用状況を想起しながら、具体的かつ実現性の高い指導助言の検討に繋がられる。

研修改善 (2回目)

デジタル教科書の活用に紐づけながら、単元計画や子供たちの学びの見取りの工夫に関しても説明されたこと → 参考 : p.102

- ・ 実践事例紹介では、単にデジタル教科書の活用方法だけでなく、単元計画の組み立て方や子供たちの学びを見取るための工夫も紹介することで、受講者が授業検討時に意識すべき点が明確になり、活用イメージをより具体的ものにする事ができる。

デジタル教科書導入までの教員の試行錯誤も共有されたこと → 参考 : p.103

- ・ デジタル教科書を導入しようと思った経緯や苦労したことなど、教員が実践に至るまでの試行錯誤の過程も共有することで、一見レベルが高く見える事例に対しても、受講者が共感・納得しやすい内容になる。

実証成果を踏まえた 県における今後の取組

- ・ デジタル教科書にまだ触れたことがない教員や指導主事に向けて、インプット中心の研修を実施し、研修での学びを実際の授業に活かすために、デジタル教科書を使うこと自体を目的とせず、使う意図を明確にすることの重要性を伝えることができました。
- ・ 今後は、採択した教科書発行者別での研修や、教科書発行者を招いた研修、デジタル教科書の活用段階別に応じた研修を実施し、教員や指導主事が実際の授業でどのように活用するかをアウトプットする機会を設けたいです。(鹿児島県 寺地 指導主事)

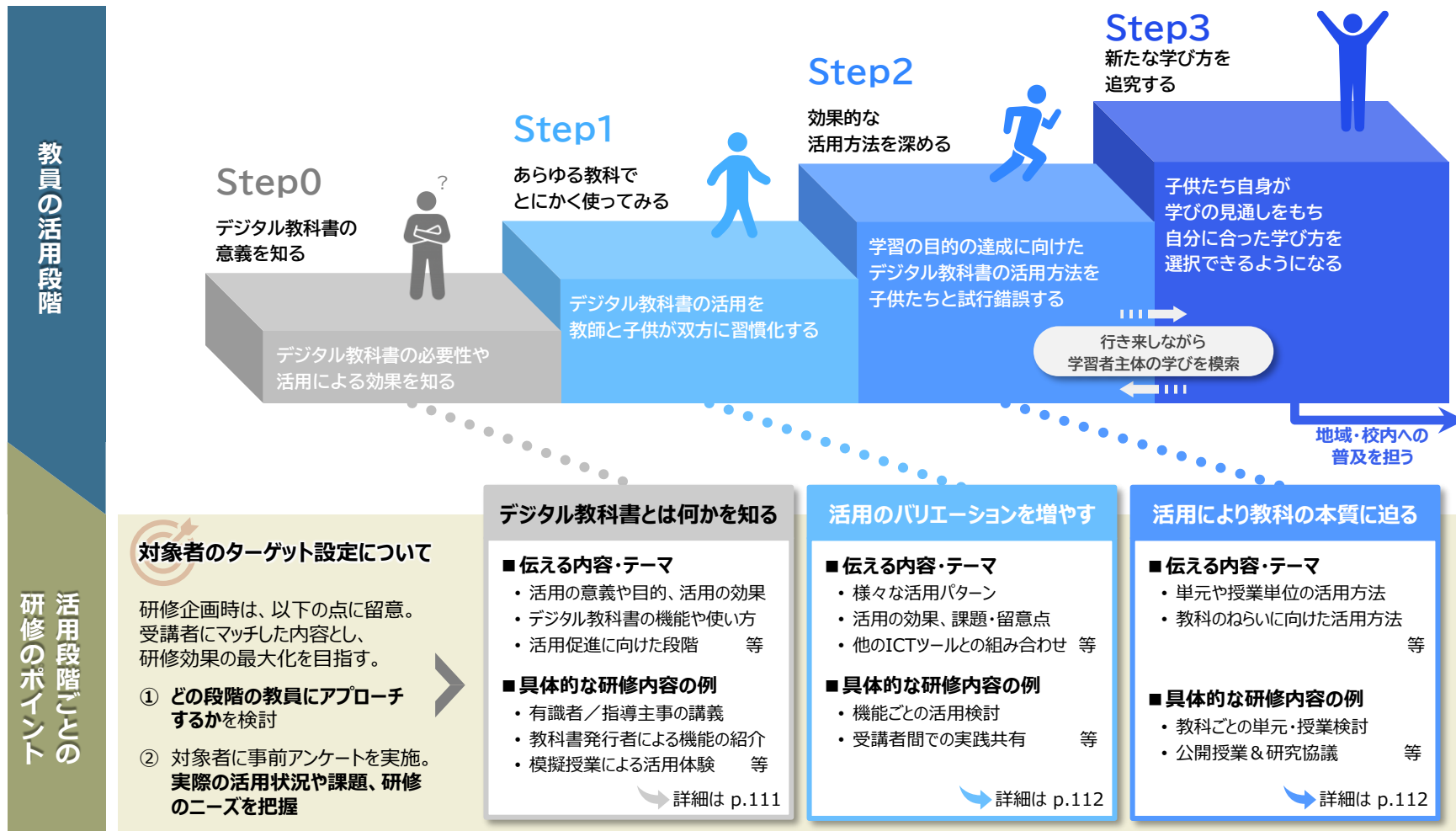
4. 実証研究結果の総括



4. 実証研究結果の総括

4.1. 効果的な研修に向けたポイント（1/5）

- 本事業の総括として、デジタル教科書の普及促進に向けた研修を、より効果的なものとするためのポイントに関し、各実証県の取組から共通に得られた示唆をもとに、以下のとおり整理しました。
- 教員は、以下のような段階を踏んでデジタル教科書を活用した授業改善を進めていくと考えられ、その段階に応じた研修設計が重要です。



4. 実証研究結果の総括

4.1. 効果的な研修に向けたポイント（2/5）

- 前頁に記載した「活用段階ごとの研修のポイント」について、Stepごとに詳述します。
- Step 0の教員は、デジタル教科書への関心が低いと考えられ、まずはデジタル教科書とは何かを知ることが重要です。そのため、研修においては、デジタル教科書の意義や活用の効果、機能、その使い方の例等を、以下に掲載するポイントによりインプットしていくことが効果的であると考えられます。

主にStep0の教員向け研修のポイント

1

■ デジタル教科書を操作しながら活用検討

教員・指導主事共に、デジタル教科書の操作経験が無い者が一定数いるため、それらの者が、**実機に触れて、機能や操作感を確かめながら活用を検討することで、**の具体的な活用イメージを掴むことができる。

参考) 埼玉県第2回、奈良県両回、熊本県第2回、鹿児島県第1回

2

■ 公開授業や実践動画により活用イメージを醸成

受講者に対し、**公開授業や実践動画により、デジタル教科書を活用する学習者・教員の実際の様子を示すことは、**実際の授業での活用イメージを醸成するとともに、成功体験に繋がる実践に繋がる可能性が高い。

参考) 埼玉県第1回、奈良県両回、熊本県第1回

3

■ 模擬授業により学習者の目線から活用の効果を訴求

受講者に、**模擬授業等で学習者の立場を体験させることで、**デジタル教科書の効果について、実感を持った理解を促すことができる。また、**動画や事例紹介時に、学習者の視点からデジタル教科書の必要性や効果を説明することも訴求効果が高い。**

参考) 福井県第1回、熊本県両回

4

■ デジタル教科書の活用促進に向けた段階を理解

教員・指導主事共に、どのように活用を進めてよいか分からないという声は多い。そのため、研修において、**目指すべき先進事例やそこに至るまでの取組を細分化して示すことで、**各受講者が以降の取組の見通しを明確にもつことができる。

参考) 熊本県第1回、鹿児島県両回

5

■ 教科書発行者から機能の詳細をレクチャー

デジタル教科書に搭載されている機能・コンテンツやその意図、また、**実際の活用場面など教科書発行者の視点から詳細にレクチャーして**もらうことで、活用の意義や具体的な活用方法を掴むことが可能となる。

参考) 埼玉県第2回

Step0

デジタル教科書の
意義を知る



デジタル教科書の必要性や
活用による効果を知る

デジタル教科書とは何かを知る

■ 伝える内容・テーマ

- ・ 活用の意義や目的、活用の効果
- ・ デジタル教科書の機能や使い方
- ・ 活用促進に向けた段階 等

■ 具体的な研修内容の例

- ・ 有識者／指導主事の講義
- ・ 教科書発行者による機能の紹介
- ・ 模擬授業による活用体験 等

4. 実証研究結果の総括

4.1. 効果的な研修に向けたポイント (3/5)

- Step 1の教員は、授業での活用のパターンが少ないと考えられ、研修において活用のバリエーションを増やすことが重要です。その際、活用自体が目的化しないよう、活用の意図や活用による効果・課題を意識させることがポイントとなります。
- Step 2の教員は、一連の単元・授業の中で如何に効果的に活用できるかがテーマとなるため、研修では、特定の単元・授業に絞って教科のねらいに向けた活用検討を行うことが有効であると考えられます。

主にStep 1の教員向け研修のポイント

6

■ 「意図」を明らかにして活用を検討

デジタル教科書の活用を検討する際には「協議の視点」を設定することで、焦点化した議論を促すことができる。その際、活用自体が目的化しないよう「**学習活動の意図（目指す姿や育てたい資質能力）**」を意識させると良い。

参考) 埼玉県両回、福井県第2回

7

■ 「成果・課題」や「活用に至るまでの試行錯誤」も共有

実践事例を共有する際、**活用方法だけでなく、その成果・課題や活用に至るまでの試行錯誤も紹介**することで受講者に高く訴求できる。また、**紹介した活用方法をもとに、そのポイントを一般化して伝える**ことで、受講者の再現性を更に高めることができる。

参考) 埼玉県第1回、福井県第2回、鹿児島県第2回

主にStep 2の教員向け研修のポイント

8

■ 特定の単元・授業場面を想定して検討

デジタル教科書に関する理解を各自が自身の授業と結びつけ、教科のねらいや資質・能力の育成に繋がる活用¹に迫るためには、**特定の教科や単元・授業に焦点化し、実際の授業の流れの中で検討を行う**と良い。

参考) 埼玉県第1回

Step1

あらゆる教科で
とにかく使ってみる



デジタル教科書の活用を
教師と子供たちが双方に
習慣化する

活用のバリエーションを増やす

■ 伝える内容・テーマ

- ・ 様々な活用パターン
- ・ 活用の効果、課題・留意点
- ・ 他のICTツールとの組み合わせ 等

■ 具体的な研修内容の例

- ・ 機能ごとの活用検討
- ・ 受講者間での実践共有 等

Step2

効果的な
活用方法を深める



学習活動の目的の達成に向けた
デジタル教科書の活用方法を
子供たちと試行錯誤する

活用により教科の本質に迫る

■ 伝える内容・テーマ

- ・ 単元や授業単位の活用方法
- ・ 教科のねらいに向けた活用方法 等

■ 具体的な研修内容の例

- ・ 教科ごとの単元・授業検討
- ・ 公開授業&研究協議 等

4. 実証研究結果の総括

4.1. 効果的な研修に向けたポイント（4/5）

- 指導主事向けの研修におけるポイントについても、以下のとおり整理しています。
- 指導主事も教員と同様に、活用経験が少ないという課題があるため、「デジタル教科書を操作しながら活用検討」や「デジタル教科書の活用促進に向けた段階を理解」といった点が研修のポイントとなります。
- また、研修を通じて“教育ビジョン”に関連づけながらデジタル教科書の活用を理解したり、教員と一緒に活用検討を行う中でデジタル教科書に関する学校現場の課題感を把握したりして、実際の指導助言のイメージを掴んでもらうことが重要です。

指導主事員向け研修のポイント

1

■ デジタル教科書を操作しながら活用検討

教員・指導主事共に、デジタル教科書の操作経験が無い者が一定数いるため、それらの者が、**実機に触れて、機能や操作感を確かめながら活用を検討することで**、実際の授業での具体的な活用イメージをもつことができる。

※再掲

参考) 熊本県第2回、鹿児島県第1回

4

■ デジタル教科書の活用促進に向けた段階を理解

教員・指導主事共に、どのように活用を進めてよいか分からないという声は多い。そのため、研修において、**目指すべき先進事例とそこに至るまでの取組（指導助言）を細分化して示すこと**で、各受講者が以降の取組の見通しを明確にもつことができる。

※再掲

参考) 熊本県第1回、鹿児島県第1回

9

■ “教育ビジョン”に関連付けながらデジタル教科書の活用を理解

教育委員会が掲げる教育ビジョン等と関連させながら「デジタル教科書の意義や活用」を説明することで、日頃意識している指導の観点と紐づけながら理解することができる。

参考) 鹿児島県第1回

10

■ 教員と一緒に活用検討し、学校現場の課題感を把握

学校から離れて一定期間経過している指導主事からは、「現場の教員が、デジタル教科書に関しどのような課題を抱えているか分からない」という声が多く挙げられる。**研修等で、指導主事と教員と一緒に活用検討する場を設け、学校現場における実際の課題感を知ることで**、指導助言のイメージを具体化することができる。

参考) 奈良県第2回

4. 実証研究結果の総括

4.1. 効果的な研修に向けたポイント（5/5）

- 全ての研修に共通するポイントは以下の通りとなります。
- 特に、「事前アンケート等により受講者属性を把握」することについては、受講者の現状やニーズを把握し、それらに即した効果的な研修設計を行う上で必要不可欠となります。

全ての研修に共通するポイント

11

■ 事前アンケート等により受講者属性を把握

デジタル教科書の活用実態は教員ごと異なるため、**事前アンケート等で受講者の現状やニーズを詳細に捉え、それらに即して研修を企画することで、研修内容の訴求力を向上させることができる。**

参考) 福井県第2回、奈良県第2回、熊本県第2回、R6事業

12

■ グループ分けによる議論の活性化

デジタル教科書の活用状況は教員間で差があるため、グループの組成方法に関しては留意が必要となる。

受講者の属性（地域・教科等）で分ける場合、「同僚性」が生まれ共感性の高い議論を引き出すことができ、特定の属性で分けない場合、様々な立場からの意見交換が生まれ多様な議論を引き出すことができる。

参考) R7の各研修、R6事業

13

■ 同対象への継続的な研修による段階的な理解促進

研修後の受講者の実践やアンケートから抽出されたデジタル教科書の成果・課題を踏まえ、後続の研修で更なる授業改善に向けた活用を検討する等、研修間に関連性をもたせ、同対象に継続した研修を行うことで、段階を踏んだ理解促進を図ることが可能となる。

参考) 埼玉県第1回、福井県第2回、R6事業

14

■ 「個別・協働・全体」をバランスよく取り入れる

デジタル教科書の活用に不慣れな教員は、他の教員から気付きを得ることが多い。そのため、**授業と同様に「個別・協働・全体」と形態を変えながら検討を進め、最後に各自が個別に以降の取組を整理することで、活用に関する深い理解を引き出すことができる。**

参考) 埼玉県両回、熊本県第2回、R6事業

15

■ 概念的な内容（抽象）と活用事例（具体）の往還

例えば、学習指導要領の内容とデジタル教科書の関連性（＝概念的理解）を説明した後、該当の場面を実際の活用事例から学ぶ（＝具体的理解）等、**抽象的な理論・概念を具体的な活用事例とセットで伝えることで、受講者の高い理解度を引き出すことができる。**

参考) 埼玉県両回、福井県両回、奈良県第2回

4. 実証研究結果の総括

4.2. 今後の方針（1/2）

- 次に、本事業での研修の取組から得られた成果を踏まえ、デジタル教科書の更なる普及促進に向け、国や都道府県等が、今後取り組むべきことを以下のとおり整理しました。
- 本内容についても、有識者の皆様からも意見を頂いており、その内容を併記しています。

1	R6事業 の総括	研修後、受講者からは「協働的な学び」や「教科ごと」「発達段階ごと」の活用を更に知りたいという声が多く寄せられており、個々のニーズに応じて、研修を細分化していく必要がある。
	R7事業 の成果	教育委員会が、研修を細分化する際に参考となる考え方を明示すべく、ニーズがある程度類似するであろう「教員の活用段階」ごとに、研修企画に当たってのポイントを整理した。
	今後の 方針①	自治体において「早急に普及促進を図りたい」との考えのもと、幅広い対象に向けた大規模研修を実施するケースも多いが、受講者のニーズに沿い、より高い研修効果が得られるよう、「教員の活用段階」を意識した研修設計を促す必要がある。

【今後の方針①に対する 委員からの意見】

- Step 2～3のような活用が進む教員に対しては、ICT活用研修ではなく、各教科研修の中でデジタル教科書の活用を検討することが望ましいと考えられる。各自治体において、研修計画を作成する際には、こうした段階を意識しながら、体系的に構成することが重要である。

2	R6事業 の総括	“授業観の転換”に有効な機能やその活用場面など、抽象的な理解は得られたものの、一連の授業の流れの中で実践するイメージが未だ十分に形成できておらず、行動変容に至っていない者もいる。その点をフォローする研修が必要である。
	R7事業 の成果	過去の研修等で得た知識をもとに単元・授業を通じた活用を検討する事例など、抽象的な理解に留まらず、実際の授業での活用を意識した実践的な理解を促す研修事例を一部創出することができた。
	今後の 方針②	「活用のバリエーションを見い出す」「活用により教科での本質に迫る」といったところにニーズがある、より活用が進む教員向けの研修事例（Step1～2を想定）については少ないため、引き続き事例創出を図っていく必要がある。

4. 実証研究結果の総括

4.2. 今後の方針（2/2）

■ （前頁の続き）

3	R6事業 の総括	学習者主体の学びによる効果への疑念やこれまでの指導法から変えることへの心理的負担など、意識の転換を阻む要因を探り、研修内外で対応策を講じていく必要がある。
	R7事業 の成果	意識の転換が特に求められる、デジタル教科書に関心がない教員（Step 0）向けの研修事例の蓄積が進んできており、実証の過程において、この段階の教員が抱えている課題感や、それらを踏まえ訴求すべき内容・方法が整理されてきている。
	今後の 方針③	「教員の活用段階」ごとに、とりわけ、実際に活用を始めている教員（Step1～2）が持つ、デジタル教科書の活用に応じた課題感を把握し、その対応策を検討する必要がある。
4	R6事業 の総括	研修実施者からのアプローチのみに依存するのではなく、研修を受けた受講者が起点となって、学校・地域における活用促進を担っていくような仕組みづくりが必要である。
	R7事業 の成果	活用レベルを高めた教員が、“普及”側に回る研修事例を創出することができた。また、地域での活用促進のキーマンとなる指導主事向け研修についても数例創出することができた。
	今後の 方針④	特に、地域での普及促進の起点となる指導主事が、知見・経験不足を理由にボトルネックとなっている側面もある。そのため、指導主事向けの研修モデルの更なる創出を図るとともに、教員との役割の違いを踏まえながら研修企画に当たってのポイントを整理する必要がある。

【今後の方針④に対する 委員からの意見】

- 指導主事は「デジタル教科書を操作した経験がなく、自信を持って指導助言できない。」と悩んでいることが多いが、授業改善に向けた視点や考え方など授業づくりの根幹は理解しているため、操作方法さえ分かれば指導助言に繋げていくことができる。このような背景も踏まえて指導主事向け研修のポイントを抽出していけると良い。



アビーム、ABeam及びそのロゴは、アビームコンサルティング株式会社の日本その他の国における登録商標です。
本文に記載されている会社名及び製品名は各社の商号、商標又は登録商標です。 ©2026 ABeam Consulting Ltd.



Build Beyond As One.